

544

137

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始





23. 7. 30



2-187

2-187



意語・意句・意節・意章

記日夜六十釋評 密嚴對

著郎三等木鈴



關老不

大正  
14. 10. 21  
内交



544-137

はしがき

この複雑多端な世の中に於いては、「敏活に」といふことが、どこまでも重大な要件と信じます。本書も、この點に於いては、既刊の徒然草と同じく、最少の時間と最少の努力とで、十分實力が得られるやうに工夫いたしました。

本書には、特に、「批評摘要欄」を加へて、こゝで一通りの批評をいたしました。又、「若い讀者への希望」といふ欄をも加へました。こゝでは、批評の不足を補ひ、かつ、讀み方・解き方・味ひ方・綴り方・文法・修辭等、その他一切の國語學習上の注意と希望とを、思ふがまゝに述べて置きました。私は、本書の特徵を自ら信じてゐますから、世の男女の學生諸君、及び教育者諸君に、敢て本書をお勧めいたします。一たび本書を手になされた方は、必ず私に共鳴して下さることと信じます。(因に、既刊嚴密對照徒然草の批評は、近く、「徒然草批評集成」として出す都盛であります。)

大正十四年九月

著者識



敵密 評釋 十六夜日記 目次

一、昔壁の中より(段).....一

1、昔壁の中より求め出でたりけむ(節).....二

(一) 字句に、捕へられないやうにするが肝要。(若い讀者への希望).....四

(二) 理解しながら、繰り返し〜音讀を。(若い讀者への希望).....五

2、また賢王の人を捨て給はぬ政にも.....五

(三) よく落ちついて考へなければ.....七

3、更に思ひつづくれば.....七

(四) かういふ疑問の起らぬ人は、本當に讀む人でない。.....〇

(五) 句と句なごの連絡.....〇

(六) 一語一句も、ゆるがせにしては.....〇

4、さてもまた集を撰ぶ人は.....〇

(七) この文の條理の整然たるところを.....一五

(八) 其文としての目的を、十分達してゐることが肝要。.....一六

5、惜しからぬ身一つは.....一六



- 6、さりとて文屋康秀が .....一九
  - 7、めかれせざりつる程だに .....二四
  - 8、代々に書きおかれける歌の .....二七
  - 9、大夫のかたはら去らず .....三一
  - 10、山より侍従の兄の律師も .....三六
  - 11、女の子はあまたもなし .....四〇
  - 12、五つの子どもの歌 .....四三
- (九) 文章も、其目的を達せしめるには、相當な用意が必要。.....一九
- (一〇) 古い文を味ふには、本歌・故事等を知るも必要。.....二四
- (一一) 文章を読むにも書くにも、特徴を知り、特徴を現はすが大切。.....二七
- (一二) 無邪氣な一面に、また一糸取り亂さない一面を。.....三一
- (一三) 實力を望む人は、辭書を用ゐて、重要語の意義の轉化をも。.....三五
- (一四) 前後の關係を考へないと、文の意味を誤る。.....三九
- (一五) 本節は、婦人の方に、よく味はつていただきたい。.....四二
- (一六) 根本の意義を、徹底的に理解してゐれば、これと同系の語はおのづからわかる。.....四五

二、粟田口といふ所より.....四七

- 1、粟田口といふ所より .....四八
  - 2、野路といふ所は .....四九
  - 3、今宵は鏡といふ所に .....五二
  - 4、いまだ月の光は .....五四
  - 5、十七日の夜は .....五六
  - 6、醒が井といふ水 .....五八
  - 7、美濃の國關の藤川 .....六〇
  - 8、不破の關屋の .....六一
  - 9、關よりかきくらしつる雨 .....六三
- (一七) どうですか、この文章の簡潔さは。.....四九
- (一八) 文章は、繪として眼に見えるまで、讀まればならぬ。.....五一
- (一九) 苦痛な、いやなことでも、詩文の材料としては、立派なことがある。.....五二
- (二〇) このさつぱりした、かうくしい所を、學んで下さい。.....五六
- (二一) 文章は、偽ではだめ。實感實景を叙したものには、どうしても心が引かれる。.....五七
- (二二) この賞め方の味吸を、ちよつと味つて置くさよ。.....六〇
- (二三) 自然に燃え立つて、出来たものでなければうそ。.....六一
- (二四) 本節は、讀んで興がないが、なぜでせうか。.....六二



- 10、十九日、またこゝを出でて行く……………六四  
(二五)こゝに愚痴もいはず、苦境から脱する唯一の法がある。
- 11、晝つ方過ぎ行く道に……………六五  
(二六)文章も、あらゆる方面に於て、變化を與へるが必要。
- 12、洲の俣とかやいふ川には……………六六  
(二七)詩や歌になると、盛に語句が轉倒せられてるから、譯するにも、出来るだけ、原文の語句通りにするがよい。
- 13、また一の宮といふ社を……………六七  
(二八)然し、例外もあつて、轉倒した方がよいこともある。
- 14、二十日尾張國下戸といふうまやを……………七八  
(二九)出来るだけ自由に、多くの思想感情を、いき／＼と詠み出すやうに。
- 15、鳴海の瀉を過ぐるに……………七九  
(三〇)作者の立場となつて見るが必要。
- 16、二村山を越えて行くに……………八〇  
(三一)要するに、自分の見聞、及び心のまゝをうつすが第一である。
- 17、八橋に止まらむといふ……………八一  
(三二)自然に動いた感じ、自然に走つた筆ほど、たふさい美しいものはない。

- 18、二十一日八橋を出て、行くに……………八二  
(三三)折々、伊勢物語の文によつて書かれたものが出て来る。
- 19、日は入りはて……………八三  
(三四)古い文章を味ふには、その時代を知るが必要。
- 20、二十二日のあかつき……………八四  
(三五)またいふ、變化といふものはよいものである。
- 21、高師の山も越えつ……………八五  
(三六)自然の詩である月を、よく觀察して置く必要がある。
- 22、濱名の橋より見渡せば……………八六  
(三七)昔の地理を知られば。
- 23、今宵は引馬の宿といふ所に……………八七  
(三八)當時を知るこゝが必要。
- 24、二十三日天龍のわたりといふ舟に……………八八  
(三九)この文を、筆にまかせて思はぬこゝまで走らなした文を、見ては惜しい。
- 25、今宵はとほつあふみの見付の國府……………八九  
(四〇)或種の解釋には、事實習慣を調べて見るが大事。
- ……………九〇  
(四一)國名や地名は歴史を物語る。



- 26、二十四日晝になりて……………九八
- (四二)文章は、はつきり理解せよ。理解しなければ鑑賞どころではない。……………一〇一
- 27、二十五日菊川を出でて……………一〇二
- (四三)車中からでもよい、この文章を心に置いて大井川を眺められよ。……………一〇三
- 28、宇都の山越ゆるほどにしも……………一〇四
- (四四)言語文章は、思想感情を傳へるものなれば、聞き手や讀者の「こゝ」をも考へよ。……………一〇七
- 29、こよひは手越といふ所に……………一〇八
- (四五)この文章には、事實そのままを寫した所に生命がある。……………一〇九
- 30、二十六日薬科川とかや渡りて……………一〇九
- (四六)かうした歌に、そのうさをやる、實にゆかしい。……………一一一
- 31、暮れかかるほど……………一一一
- (四七)實に事實はたふさいものである。……………一一二
- 32、程なく暮れて……………一一三
- (四八)かく、どんな材料をも、美化してしまふのがたふとい。……………一一五
- 33、富士の山を見れば……………一一五
- (四九)この文には、作者がそのままあらはれて居るかと思ふと、これにいひ知らぬなつかしみが出來て來る。……………一一八

- 34、今宵は波の上といふ所に……………一一八
- (五〇)簡潔を期するよりも、思ふ存分に想を述べよ。……………一一九
- 35、二十七日明けはなれて……………一二一
- (五一)一言一句、むだのない文章である。……………一二一
- 36、今日は日いらららかに……………一二一
- (五二)少し古い文章になると、文法がわからないと、正しい解釋も出來れば、文章の面白味も味はれない。……………一二三
- 37、伊豆の國府といふ所に……………一二三
- (五三)意外な獲物。……………一二五
- 38、二十八日伊豆の國府を出でて……………一二五
- (五四)難解な文になると、前後の關係やら、作者の思想やら、道理やらを、十分に考へなければならぬ。……………一二七
- 39、いとさかしき山を下る……………一二八
- (五五)かかる險阻な所をうつすには、かうした短い句を以てする。……………一二九
- 40、湯坂より浦に出でて……………一二九
- (五六)よく前後を考へて、まさまつた解をすることが大切。……………一三一
- 41、丸子川といふ川を……………一三一



42、酒匂を出でて……………(五七)かういふ文章も、見のがしてはならぬ。……………一三二

三、あづまにて住む所は……………(五八)細い有明の月や、たちこめた朝霧は、たしかに作者の心のあらはれである。……………一三四

1、あづまにて住む所は……………(五九)作者の經由せられた所を、一々たつて見たい。……………一三七

2、前の右兵衛督の御むすめ……………(六〇)うつくしい心さ、立派な文さ、きれいな文字さの見舞は、實にたふさいものである。……………一四〇

3、式乾門院のみくしげ殿……………(六一)二人の親しみはうらやましい。旅愁を訴へてゐる、慰さめてゐる、それで上品である、言葉に、調子に。……………一四三

4、あかつき便ありと聞きて……………(六二)自分を、作者の地位に置いて見ないと、その真意を理解することも、まして味ふことも出来ない。……………一四九

5、ほど經てこのおとどひ…………………………一五〇

…………………………一五三

…………………………一五四

6、程なく年暮れて……………(六三)いづれにしても、一應理窟の立つた解釋までしておくが必要。……………一五八

7、權中納言の君は……………(六四)重ねていふ、作名の身になつて讀め、そして味へよ。……………一六一

8、彌生の末つかた……………(六五)さながら、歌集にでも接してゐるやうだ、成程こゝまでに九十二首ある。……………一六六

9、卯月のはじめつかた……………(六六)こゝに、作者の佛教に對する信仰の點が見えてゐる。……………一六九

10、また和徳門院の新中納言……………(六七)文學は、或點まで實用的のものである。……………一七〇

11、夏はあやしきまで音づれも絶えて……………(六八)この種の文では、殊に、主部・述部を分けて見るが必要。……………一七一

……………(六九)愚痴を語るには、大に人と場合とを見るが必要。……………一八一

……………(七〇)阿佛尼が、いざよふ月にさそはれて、鎌倉へ出かけたのは、建治三年の十月である。……………一八三

12、侍従の宰相の君のもとより……………(七一)作文上達の秘訣は、燃えてゐる心にまかせて、筆を走らせるにある。……………一八四



13、侍従の弟爲守の君のもとよりも……………一八八

(七二)これを讀んで、どうして、己が學びの道にいますまに居られようか。……………一九〇

14、また權中納言の君……………一九〇

(七三)この情の續くのは、きれいを交りであるからである。……………一九二

(七四)常々勉強の時に、殊にこの助詞をゆるがせにせず、一々意味をはつきりとせられたい。……………一九三

四、しき島ややまとの國は……………一九四

(七五)先づ解釋力を養ふやうに十分つとめられたい。……………二一二



一、昔壁の中より

本段は、本書十六夜日記を四段に分けたが、其第一段である。十二節より成る。

本段は、第一節より第五節までに於て鎌倉へ旅立つ理由を述べ、第六節より第十二節までに於いて、出發に至るまでのいろいろの用意やら、名残を惜しむことなどを記して、本段を結んでゐる。



1、昔壁の中より求め出でたりけむ

1、ま  
あ今の  
孝經は  
の孝の  
字も知  
らない  
やうだ  
さ、暗  
に細川  
の莊を  
押領し  
た爲氏  
を難じ  
てゐる  
。これ

昔、壁の中から探し出したさかひ書物の名(即ち孝經の孝  
昔、壁(か)の中(か)より求め出でたりけむ  
さいふこと)をば、  
書(み)の名をば、  
かりも、  
水莖(みづき)の岡の屑葉(くずば)かへすがへすも書  
きおく跡(あと)たしかなれども、  
親のいましめである。

IX【壁の中より求め出でたりけむ  
書】孝經さいふ書物のこと。  
【求め】さがしもさめ。  
【たりけむ】であつたらう。過去の  
時に、動作が己に完了せるのを  
推量していふ助動詞。  
【書(み)の名】ふみは、こゝは書  
物の意で特に孝經の「孝」を指す  
【ば】或物を特に引出していふ助詞  
の「ば」を濁つたもの。こゝでは、  
「孝」を特に引き出したのだ。  
【人の子】たゞ「子」といふと同じ  
。(暗に彌子の爲氏を指す)  
【ばかりも】おぼろげにも。少しも。  
【ばかり】は、ほゞくらゐ、の意  
の接尾語。

が事件  
の起で  
、同時  
に此日  
記の出  
來る所  
以であ  
る。

【身の上のこと】「孝さいふこと」をわが(爲氏)身の上に関係したること。  
X【けりな】「けり」は、詠嘆の意をあらはす助動詞(わい)で、こゝは過去の意ではな  
い。「な」は、感動の意の助詞。故に「知らざりけりな」といへば、「知らぬわいの」の  
意となる。  
【水莖の岡の葛葉】「かへすがへす」をいはむがための序詞。「水莖」は、みづみづし  
い莖の意で、「稚(わか)か」の枕詞で、「わ」を「な」とは、音が通じて、「岡」の枕詞とな  
る。又これには筆の意もあつて、次の「書きおく」の縁語ともなつてゐる。「葛葉」  
は裏が白いから風にひるがへつて、裏が目になつた故に、「かへすがへす」などにかか  
【かへすがへす】くれぐれも。くりかへしくりかへし。こゝでは、丁寧に、念を入  
れて、などの意。  
【書きおく跡】書きおいた手跡、即ち遺言状。(父爲家が、後妻即ち阿佛尼の子爲  
相(ためすけ)に播磨國細川の莊を譲るその遺言状)  
【親のいさめ】親の禁止(と)めること。親のきめた掟。【いさめ】は、こゝめ忠告する  
こと。

【参考】

【壁の中より】孝經を、壁の中よりさがし出した物と書いたのは、次の孔安國序に、「魯恭王  
使三人 壞夫子講堂於壁中石函。得古文孝經二十二卷。」とあるによる。  
【けり】これは「過去のけり」詠嘆のけり「な」と、普通は分けて解くが、元來「けり」は、「き」  
と「あり」の結合せるもので、現在見ることに於て「あゝかうであつたのである」と過去  
を思ひ起していふので、これは「き」の現在態だともいふ。



【批評摘要】

婉曲な、然も短い數行の文ではあるが、愛兒へこの細川莊を押領せられた歎は、強くあらはれてゐる。「求め出でたりけむ書の名をば」といひ、「今の世の人の手は」といひ、「かひなきものは親のいさめなり」といひ、皆間接にいひあらはされたなど、さすがに女性の嘆。これのため、鎌倉までも旅立たれるかと思ふさ、何はともあれ、少なからず感ぜさせられざるを得ない。

【若い讀者への希望】

(一) 先づ修飾語句に妨げられないやうにせねばなりません。この文章では、「昔壁の中より求め出でたりけむ書の名をば」は、「孝といふことをば」の意。「水壑の岡の葛葉かへすがへす書きおく跡」は、「書きおいたあと、即ち遺言状」の意であります。これがわかれば讀めたのです。その上「書の名」は、「孝經の名」で、孝經には、古文孝經、今文孝經があり、古文孝經はいかなるもの、今文孝經はいかなるものなごさ、せんさくする必要はありません。「水壑の岡の葛葉」は、かへすをいふための序詞といふことがわかればよいのです。然し前に註しておいた位がわかれば、面白いのです。とにかく字句に捕へられないやうにするのが肝要です。

2、有  
りがた  
い御仁  
政にも  
捨てる  
れるの  
は、自  
分一人  
思ひな

2、また賢王の人をすて給はぬ政にも

また聖天子の誰をも捨てられぬといふ御仁政にもあはず、  
また賢王(めいおう)の人をすて給はぬ政(まこと)に

も漏(も)れ、忠臣の世を思ふ情(なさけ)にもすて

からぬものは、  
このつまらない自分一人だけで「仕方が  
らるゝものは、  
數ならぬ身一つなりけり  
ない」と思ひながら、  
又そのまゝにもしておかれぬの  
と思ひ知りながら、  
またさてしもあらで

- (二) 一通り理解が出来たらば、意味を理解しながら、くりかへしくりかへし音讀せねばなりません。これは面白くないまでも至れば、それでよいのです。それまでに至れば、必ず應用がきます。他の文章を讀むにも作文を作るにも必ず役立ちます。
- (三) 他の書を読むための實力として、基本語句を、十分明かに記憶せねばなりません。

重要語句としては、「たりけむ。ば。ばかり。けり。な」の五語です。

- 2「賢王」賢名な天子。  
「人」をすて給はぬ政「民」をして各其志を遂げ、安んぜしめる御仁政。  
「漏れ」取り残され「て御仁政にあづからぬ」。
- 「忠臣」君を思ふ輔弼の大臣。「賢王」に對して「た」。
- 「世を思ふ情」國民を思ふ慈悲。  
「數ならぬ身」取るに足らぬ身。  
「なりけり」けりは、詠嘆の意。  
X「さてしもあらで」かくても居られぬので。



がら、思ひ切れないのは、今度の事件である。歩一歩筆を進めていく。

で、やはり今度の事件は、いほうやうなく悲しいこと、なほこのうれへこそ、やるかななく悲しけれ。

(六)

【なほ】やはり。でもやはり。(其上の意の時もある。)  
【このうれへ】この心配になること即ち細川莊を押領せられた事。  
【やるかななく】慰めやうもなく。  
【悲しけれ】悲しむ。助詞「は」は「は」助詞の「けれ」ではない。

【参考】

【さてしもあらで】「さて」は、(然)ありて。「しも」は、感動詞「も」に、強める。「し」が薄つたもので、意を強め、又は語調をととのへる。「で」は、「すて」の約まつたもので、ないで、の意。つまり「さてしもあらで」は、そのままにもしてゐられないでか、そのまま捨ててもおかれないで、などの意である。

【批評摘要】

すべて不平などは、直接よりも遠まはしの方が、聞き心地のわるいものであるが、この文に於ては少しもさうは感じられない。心ではどんなに恨んでゐるか知れないが、言葉には、「かう苦しめられるのは自分だけであるから仕方がない」といつてゐる。そのけなげさ、そしてたゞ自ら不幸を嘆くしをらしさ、わざとらしくなく、心地よく聞かれる。然し、これはどこまでも比較的なので、かう書いてゐるうちにも、變な感じも湧いて来る。

【若い讀者への希望】

- (一) よく落ちついて考へなければなりません。この文などは、遠まはしに述べてゐるが、要するに、「とてもだめだ、このまゝにしてはゐられない。」といふことなのです。字句としては、忠臣とは忠義なけらうであるが、「賢王云々」の前からの關係よりして、こゝでは、天皇をおたすける大臣であることに思ひ至らねばなりません。終の「悲しけれ」は、形容詞で悲しく・悲しく・悲し・悲しき・悲しけれ、と活用します。して見ると、悲しけれの「けれ」は、助動詞でないことがわかります。つまり間遠を生ずることがあります。
- (二) 重要語句としては「數ならぬ身・さてしもあらで・なほ・やるかななく」の四語。

3、更に思ひつゞくれば

よく／＼考へて見ると、更に思ひつゞくれば、やまと歌の道は、實意が少く、ただまこと少く、あだなるすさびばかり。

(七)

【更に】その上に。少しも、の意の時もある。  
【やまと歌の道】和歌の道。(漢詩をから歌と、ふに對して)  
【まこと】實意。  
【あだなる】實のない。浮薄な。

3、さやう和歌の道、これ



は天の岩戸開きにも歌はれた。又「世を治め物を和らげるなかだちこそな」さる「さ」歌聖たちがいつた「さい」つて、和歌の徳を述べてゐる。

のさ思ふかも知れない。【だが】日本の國に於いて、  
りと思ふ人もやあらむ。日の本の國に、

【昔】天の岩戸が開かれた時、八百萬の神の歌は  
天【あ】の岩戸【いほ】ひらけし時、四方【よ】の神た

れた神樂歌をはじめとして、これが世  
ちの神樂【かぐ】のことばをはじめて、世をを

を治め、人の心をやはらげるたすけになったさ、  
さめ、物をやはらぐるなかだちとなり

けるとぞ、この道のひじりたちは、しる  
【古今集】

の序にも書いておかれ「たほごのものである」。  
しおかれたりける。

×【この道のひじりたち】歌道の大家たち。古今集の撰者を指す。  
×【ひじり】これは轉じた意が多いが、こゝでは、其道に達した人、の意。

【参考】  
【神樂のこさげ】「神樂」は、神を祭るに行はれる我が國最古の音楽である。琴・笛などに合せて

日知

歌舞をなすもの。今、伊勢大神宮でするのが、大太神樂で、地方の祭禮などで戯曲をするのが里神樂である。

【世をさめ云々】これは、次の紀貫之の古今集の序にあるのをいつたのである。「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、男女の中をも和げ、たけきものふの心をも慰むるは歌なり」

【ひじり】日和【ひしり】で、日の如くあまねく天の下を明かに知る義から、1、徳高き聖人聖天子。2、天皇の稱。3、其道に達した人。4、高德の僧又は僧の通稱。

【批評摘要】

作者は、後に歌道のため、愛兒のために、鎌倉まで出かけるさいつてゐる。本節は、其はじめなので、歌道の大切なことを述べてゐる。和歌の徳を述べるに、八百萬の神の神樂歌と、古今集の序を取り出したところ、さすがと思はれる。

また「この道のひじりたちは、しるしおかれたりける」さいつたのみで捨てたところ、上品にも強くも感じられる。なほ始に於て、「ただまこさ少く、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ」と書き出された用意、これが後半の歌の徳を一層強く大きく思はしめてゐる。



【若き讀者への希望】

(一) 本節で突然歌の端を述べ立てたので、はじめで讀まれる讀者には、何のこゝさかわかりになりますまい。若しかういふことに出會つた時には、この本を讀むにしても、この疑問を胸の中にあづけておかねばなりません。わかるまで次を待つか、或は教室ならば先生にたづねるかするのです。かういふ疑問が起らずに通る人は、本を讀む人ではありません。

(二) 句と句などの連絡上當然補はるべき語は、「」の中に入れて置きました。本節では、「人によつては」「だが」などでありませぬ。これは其文章が理解せられれば自然に入れます。かういふ補ひが、はいるやうにならねば、そこが理解せられたのではありませぬ。

(三) 中には、語尾を口語に譯してそれとして、國語位常識で澤山だといつて、空すすまいてゐる方もあります。それは國語の解釋を知らない方です。勿論字句や故事や文法に捕へられてしまつてはいけません。さうかといつて「けり」も「たり」も「つ」も「ぬ」も「けり」も「けり」も「し」も「ぬ」も「し」も、何の區別もわからぬやうでは、文章がは入りやりにて、必ず神經衰弱にかゝります。どうしても、明確になるまでは、つゝめなければなりません。それがためには、時には、一語一句もゆるがせにはなりません。

(四) 重要語句としては、「更に・あだなる・すさび・にける・さぞ・ひじり」の六語。出来るだけ、その語が繪となつて目に見えるまでにならねばなりません。それまでにならないと國文を讀んで、面白味を感じることも、應用をきかせることも、勿論出来るやうなことはありませぬ。

4、さてもまた集を撰ぶ人は

さてまた、  
さてもまた、**集(れ)**を撰(え)ぶ人は例(れい)多(た)  
だが、一生の中に二度まで勅を受けて、**世々に**  
**かれど、ふたたび勅(ちく)を受けて、世々に**  
にお撰が申し上げたのは、**恐らくは類例のなかつたことであら**  
**聞えあげたるは、たぐひなほありがたく**  
う。  
**やありけむ。その跡にしもたづさはりて**  
て、爲守爲相の二人の男の子供らと、**澤山の歌の草稿など**  
**三人(りた)のをのこごども、百千(ももぢ)の歌の**

4、さてまた、  
集を撰ぶやうな家を  
受けて

4【さても】さてまあ。「も」は感動詞  
×【集】詩歌文章など集めた書物。  
×【ためし多かれど】例が多くあれど  
×【聞えあげたるは】奏上したる(の)は。  
×【たぐひ】類。類例。  
×【なほ】やはり。やはりなほ。  
×【ありがたく】世にありにくい義で、珍らしく。稀に。  
×【やありけむ】「や」は疑問のやで、「けむ」の係(かかり)となつてゐる。  
×【たづさはる】かゝはる。關係する。  
×【三人の男の子供らと】澤山の歌の草稿など  
×【ももぢ】數多くの。澤山の。



亡夫、から歌、道のた、め、子、供のた、め、後、世を申、ふため、にいた、く約、束の細、川の莊、も、爲、氏に横、領せら、れてし、まつた、。これ、では暮、しさへ、困難で、ある。歌の名和

門たる、こまこ、遺言、さを述、べて、細川莊、を取り、もどす、必要を、明かに、した。

古(こ)ほぐどもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、「道(みち)を助けよ、子供を養育せよ、わが後世を申へよ。」といつて、深きちぎりを結びおかれし細川のながれも、故(ゆ)なくせきとめられしかば、あととふ法(り)のともし火も、道(みち)を守り、家を助けむ親子(おや)の命(いのち)も、もろともに消えを争ふ年月(とし)を経て、あやふく心細きものから、何としてつれなくけふまで

【歌の古ほぐ】歌の古い草稿、即ち「ほぐ」は、書きちらしの紙であるが、爲家以来書き残した歌の草稿をいふ。  
【えに】「え」は縁(えん)に「は」にて。「あづかりもたる」あづかりも「ち」たる。  
【道(みち)を助けよ】「道」は歌道(うたのみち)をいふ、それを助けて盛(さか)にせよ。  
【はぐくめ】養育(やしよく)せよ。(親鳥(おやどり)が子を羽(はね)の間に入れて育てるよりいふ)  
【後の世(ごのよ)】人の死後(しご)の來世(らいぜ)。  
【こへ】こむらへ。  
【とて】といつて。  
×【ちぎりを結ぶ】約束(やくそく)をする。(こゝでは細川莊(ほそがわのむら)を譲るこの約束を指す。)  
×【細川のながれ】細川(ほそがわ)の莊(むら)を、川の縁語(えんご)で「ながれ」といつた。  
【ゆゑなく】理由(りゆう)なく。  
【せきとめられ】細川(ほそがわ)の莊(むら)を細川(ほそがわ)の流(なが)らしたので、その「莊(むら)を奪(うば)はれたこと」を「流(なが)をせきとめられ」といつた。

來たのであらう。  
はながらふらむ。

【道(みち)を守り】代々(よからよ)傳(つた)へられた和歌(わがうた)の道(みち)を守り立てて行き。  
【家を助けむ親子(おや)の命(いのち)】其家(そのいへ)を助け立てて行く親(おや)親(おや)佛(ほとけ)尼(に)自身(みづかみ)子(こ) (爲(な)相(あ)等(とう))の命(いのち)。  
【もろともに】兩方(りやうほう)ともに。(法(り)の燈火(とうか)と親子(おや)の命(いのち)とを指す)  
【消えを争ふ年月(とし)】われざきに消えようとする危(あや)い年月(とし)。即ち法(り)の燈火(とうか)が先に消えるか、それとも、親子(おや)の命(いのち)が先に消えるか、其二つ(ふたつ)が先(ま)を争(あ)ふやうな危(あや)い年月(とし)。  
【ものから】「ものながら」の略(りやく)。にはあれど。ものの。  
【何(なに)として】なんで。何故(なにゆゑ)に。何(なに)のために。  
【つれなく】平氣(へいけい)で。常(とこ)とかはらずに。無論(もちろん)「なまげなく」の意(い)の時(とき)もある。  
【ながらふ】生存(せいぞん)する。ながいきする。  
【らむ】であらう。推量(すいりやう)の助動詞(すけごころばい)。

【参考】  
【集(むら)を撰(えら)ぶ人(ひと)は例(れい)多(おほ)かれど】古今集(ここんしゅう)の撰者(せんしや)紀貫之(きくわんし)・紀友則(きともすね)等(ら)から、續古今集(ぞくここんしゅう)を撰(えら)んだ爲家(ため)家で、撰者(せんしや)約二十人(やくにじゅうににん)、勅撰集(ちくせんしゅう)が十二(じふに)も出たのをいふ。  
【ふたたび勅(ちく)をうけて】世(よ)世(よ)に聞(き)えあげたるは【藤原定家(ふじのさだけ)】は、新古今集(しんここんしゅう)の撰者(せんしや)の一人(ひとり)となり、後に獨(ひとり)りて、新勅撰集(しんちくせんしゅう)を撰(えら)んだ。爲家(ため)家は、續後撰集(ぞくごせんしゅう)と續古今集(ぞくここんしゅう)を撰(えら)んだ。  
【ありがたし】世(よ)にあるこゝ難(がた)し」の義(ぎ)で、稀(まれ)である。めづらしい意(い)となる。無論(もちろん)今(いま)いふ



ありがたい、かたじけないの意もある。

【やありけむ】「や」は疑の意の「や」で、ここでは、係(かかり)となつてゐる。この係は、動詞、形容詞、助動詞の連體形で結ぶ。

【三人のをのここ】「みたり」は、ふたりの誤寫にや。四條(阿佛尼)が腹の子五人あり、長女は紀内侍にて父異なり。慶融・源承は僧なり。さればこは侍従の爲相と大夫の爲守との二人なるべし云々(残月抄)

【深きちぎりを結びおかれし細川の流】この爲家一家には、播州細川の莊と江州小野の莊とが、倭歌所の奉邑として、代々嫡子に傳へることとなつてゐた。故に爲家は最初長子爲氏に譲ることとした。然るに後、爲氏に不孝のことがあつたといふので、それを取り消して、改めて爲相に譲るさいふ證書を二回も認めて、翌建治元年五月に薨じた。然るに爲氏は、この遺言を實行しなかつたのである。

### 【批評摘要】

前節より一步進めて、わが家は其大切な和歌の名門であるといふことを述べ立てた。その跡を引受け、遺言によつて歌道を助けねばならぬ、子供を養育せねばならぬ、亡父の後世をとぶらねばならぬ。然るに、この責任を果すための細川の莊を、無法にも横領せられたと歎いてゐる。論旨も明かでないかにもと思はせればおかない。最後の「もろもろに消えを争ふ年月を経て、危く心細きものから、何としてつれなく今日までほながららむ」とは聞く

もいたいたしいやうななげき方である。

### 【若い讀者への希望】

(一) 御覽なさい、本節に至つて始めて、前節に述べた歌の徳の必要さがわかりました。作者の目的は、細川の莊を取りかへすにあります。亡父の遺言に従つて歌道を助けねばなりません。家の爲めに子供を養育せねばなりません。亡夫の爲めに後世を弔はねばなりません。これを果すには、生計の本たる細川の莊が必要です。若し歌といふものが大切でなかつたならば、歌道を盛にし、其家を守る必要もなくなります。ここでは、この文の條理の整然たることを學ばねばなりません。

(二) 文章は、理窟に走るさ情味に缺けるといふことになり易いものです。然るに「生活が困難だ」食つても行かれない」といふかばりに、「あまふ法のさもし火も、道を守り、家を助けむ親子の命も、もろもろに消えを争ふ年月を経て」といつてゐます。聞くから心もいら／＼するではありませんか。

この文は、「成程かよい女で鎌倉まで出かけるも無理はない」と人に思はすれば、それで其目的を達してゐるのです。理窟に傾けば人は反感をもちます。情に流れてしまへば條理がたちません。かういふことは、今書かうとする文章によつて、よく考へねばならぬことです。



かつて教員の検定に、「新茶を贈る文」といふ問題が出たことがありました。勿論これは二三行書けば用が足りるのに、或受験者の答案は五六枚の長文で、内容は何かさいふと、茶の産地・産額・輸出先等まで細々書きつてあつたといつて、話の種になつたことがあります。文によつて長いのがよいこともあれば、短いのがよいこともあれば、理に傾いたのがよいこともあれば、情に傾いたのがよいこともあるのです。要するに文章は、其文としての目的を十分達してゐることが肝要です。

(三) 重要語句としては「聞えあぐ・ありがたく・やありけむ・もちのほぐ・はぐくむ・さふ・さて・ちぎりを結ぶ・法のももし火・ものから・つれなく・らむ」の十三語。

5、惜しからぬ身一つは

5、いかにも子供の歌道

惜しからぬ身一つは易く思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇のなほしのびが

5【身一つは】「他のものは別としてわが身一つだけは。」  
【やすく】容易に。くもなく。  
【思ひすつ】思ひ切る。  
×【子を思ふ心の闇】子を思ふため

のことが思ひ切れなく、鎌倉幕府の裁判を仰て、萬事を捨て、出かけてよ。うさした。關東下の理向の理由を述べた。

また歌道はさうであらうがその心配はやるせなくて、たく、道をかへりみるうらみはやらむかたなく、さてもなほあづまの龜の鑑(かた)にうつさば、くもらぬかげもやあらはるると、せめて思ひあまりて、よろづのはば見ず、かりを忘れ、身をえうなきものになし果てて、ゆくりなくもいざよふ月にさそはれ出てなむとぞ思ひなりぬる。

【ゆくりなくも】思ひがけなく。ふさ。  
×【いざよふ月】「いざよひの月」で、陰曆十六日夜の月。  
【出でなむ】出でよう。出發しよう。  
×【思ひなりぬる】「さういふ」氣になつてしまつた。

に起る心のまよひ。(心の正しい判断力を失つたのを闇ぐらゐのなたさへたのだ。)  
【なほ】それでもやはり。(わが身一つは思ひ切つたがやはりの意。)  
【しのびがたく】こらへられない。  
【道をかへりみるうらみ】歌道のこころを心配するなげき。  
【やらむかたなく】思ひをやるすべがなく。慰めやうなく。  
【さても】さありても。それでも。  
【あづま】關東。鎌倉幕府を指す。  
×【龜の鑑】「龜鑑」の直譯で、善惡をかんがへ正すべき法規。  
【うつさば】「かゞみ」の縁語で、「裁判を」仰がば。「法規に」照らしたならば。  
【くもらぬ影】まがらぬ道理。(鏡の縁語としてくもらぬ影と云ふ。)  
【せめて】せつに。甚しく。  
【思ひあまりて】こらへられぬ程に苦しく思ふ。  
【はばかり】故障。慎むべき事。  
×【えうなきもの】不必要なもの。さうならうさかまはぬもの。



【参考】

【子を思ふ心の闇】こは、後撰集に出てゐる藤原兼輔の歌によつたのである。即ち、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。」其意は、「いつたい親の心さいつても、物の判断が出来ないほどのものではないが、折々常識を缺いたやうなことをする、それはたしかに子のために迷つたのである。」

【龜鑑】龜は、昔、龜甲を焼いて、その裂目の如何によつて吉凶を占(うらな)つた、それはいふ。「鑑」は、物をうつして、正しい姿を知るもの。故に「いづれも正しい判断を得るものである。」

【えうなきもの】伊勢物語に「昔男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき國も定めんとて行きけり」とあるによつたのである。

【いざよふ月】「いざよふ」は、ためらふ、躊躇するの意である。陰曆十五日前の月は、夕方までに上つてしまふが、十六日の月は、夕方東の山の端に、出ようかどうしようかと躊躇してゐる。即ち「いざよふ」は、故にそれを「いざよふ月」といふ。十六日、又十六日の夜、のこさを「いざよひ」といふから、それを「いざよひの月」といふ。作者阿佛尼も、大に出發を躊躇してゐる時であつたから、いざよふ月にさそはれてさいつたのである。

【思ひなりぬる】「ぬる」は現在完了の助動詞「ぬ」の連體形である。「ぞ」の係りを結んだのである。「ぬ」は、「自然にさうなつてしまつた」の意の語である。こゝでは、いざよふ月に誘はれて、自然さうなつたのである。「つ」とは幾分違ふ所がある。

【批評摘要】

女は子のために強い。さういふことを聞いてゐるが、この文を読んで成程さうなづかれる。今の世ならばいさ知らず、當時の婦人としては、周囲のこゝも心配せねばならぬ。旅行の困難も思はねばならぬ。然るをこの擧に出でたのは、子のため、歌道のため、この切なる思であつたらう。しかもさうした火の出るやうな事柄も、きれいにやさしく書き出されてゐる。ここに終の「ゆくりなくもいざよふ月にさそはれ出でなむこそ思ひなりぬる。」といふところなど、さすが都の婦人はさ思はせられる。

【若き讀者への希望】

(一) 文章も其目的を達せしめるには相當な用意が必要です。こゝで作者が強く述べたいのは、子のため、歌道のために、鎌倉幕府の裁判を仰ぐこゝです。さうです、そのために、わが身一つは思ひ捨てる。要求をゆるめておます。かうするさ、いはうさする所が強くあらはれます。そしてまたあまり強く主張し、且つそれをきたなくいふさ、同情を失ひ、反感を買ふこゝになりません。「心の闇は」といひ、「あづまの龜の鑑にうつさば、くらね影もやあらはる」といひ、「身をえうなきものになし果てて」といひ、終りにはいかにも美はしく「ゆくりなくもいざよふ月にさそはれ出でなむこそ思ひなりぬる。」といひつてゐます。



皆さん人と議論するのでも、文章を書くのでも、かうした用意が必要です。また文章を読むにも、作者のこの用意を知ることが必要であります。  
(二) 重要語句としては、「やらむかたなく・さても・あづま・せめて・ゆくりなくも・いざよふ月・ぬ」の七語。

6、さりとして文屋康秀が

6、定  
めがた  
ない初  
冬の空  
しぐ  
れる雨  
散る  
木の葉  
れも涙  
を誘ふ  
種なれ  
ぎ、思

東國へ行くまで、「小町の時のやうに」文屋康秀が誘ふのでも  
さりとして、**文屋康秀**（ぶんやの）がさそふにも  
なければ、**「業平のやうに」**住みかさをがしに行くのでもない。  
**あらず、住むべき國**（くに）**求むるにもあらず**  
。時はもう冬の初の空模様も一向定まらぬをりだから、  
**頃はみ冬立つはじめのさだめなき空な**  
**れば、降りみ降らずみ時雨**（れいど）**もたえず、**  
**あらしにきほふ木**（き）**の葉さへ、涙ととも**

6【さりとして】さありさいつて。「さ」は、東國へ旅立するを指す。  
×【文屋康秀が誘ふ】康秀が三河へ下る時に小野小町を誘つた故事をいふ。  
×【住むべき國求む】伊勢物語にある在原業平が、東國に住む所を求めに出かけたのによつた。  
【み冬立つはじめ】冬になるははじめ【み】は接頭語。冬は陰曆十月から三箇月をいふ。  
【定なき空】時雨常ない空あひ。  
【降りみ降らずみ】降つたり降らな

ひ止ま  
るわけ  
にもゆ  
かす、  
思ひ切  
つて出  
かける  
ここに  
した。  
さ、た  
ゆたふ  
心ばえ  
を述べ  
た。

散り亂れ散りして、  
に亂れ散りつつ、**事**にふれて心細くかな  
しけれど、**人**やりならぬ道なれば、いき  
うしとでも、とどまるべきにもあらず、  
**何**（なに）となくいそぎ立ちぬ。

【事】にふれて【何】かの事について。何かにつけて。  
×【人】やりならぬ道【人】がしひて自分をやるのではなく、自ら求めて行く旅。  
×【いきうしとでも】行きづらいいつても。「往き憂し」と書く。  
【で】「す」との約。ないで。  
【何となく】何さいふきまつた考もなく（悲しさに用意も考もきまらず）。

【参考】

【文屋の康秀】歌人で、清和・陽成の兩朝につかへた人。こゝは「文屋の康秀が、三河の椽になりて縣見（あかた）ぬなかを見に行くこと」には、え出で立たじやと、いひやりけるかへりこゝに詠める。小野小町。わびぬれば身を浮き草の根をたえて、誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」云



あるによつて書いた。一首の意は、「自分は憂い、つらい身で、」難儀をして居りますから、浮草の根がなくて、「どちらへでも水の行く方へ誘はれて行くやうに、誰でも」誘つてくれる人があらうなら、「どちらへなりとも」参らうと思ひます。」

【住むべき國求む】次の伊勢物語の在原業平の東國行きを書いた文に、「昔、男ありけり。京や住みうかりけむ。東の方に行きてすみか求むきて、友とする人一人二人して行きけり。」とあるによつて、書いた。

【人やりならぬ——いさうしきても】これは次の歌を反對につかつたのだ。「人やりの道ならなくにおほかたは、いさうしきといひていざ歸り來む」(源實)一首の意(人のさせる旅ではない、わが心から行く旅なのだから、たいがいなこゝなら、もう行きたくもないといつて、さあ歸らうよ。)

【批評摘要】

いざよふ月に誘はれて、よくも立つにいたつたと思つたが、さすがは女姓、「さりさも」に筆は轉ぜられてしまつた。時も時、さだめがたない空あひ、降りみ降らすみの時雨、涙も共に亂れ散る木の葉、皆やうやくきめた心を、睡へさせようとするやうなものばかり。然しまた男々しくも、急ぎ立つことにした。と、かうした情味を現はすには、皆よい取りあはせて

ある。自然である。眞である。

【若い讀者への希望】

(一) この文章は、折角旅立とうきめた其心を、心ない風物までが邪魔をして苦しいといふ其間の情緒を述べてゐます。其切なさが、強くあらはれる條件として、

第一、始に二つの故事が用ゐられてあります。即ちかつて小野小町も自分の様に都を去つたことがあつたが、それは文屋の康秀に誘はれ、其上自分もたよる所が無かつた時であるから丁度よい。在原業平も東國へ出かけたが、それは、京都がいやになつて住みかを求めに出かけたのだ。以上二人は少しも都が戀しくなくて行くのだが、自分はさうでない所に苦しさがあつたわけです。

第二にかはり易い初冬の空、降りみ降らすみの時雨、風に亂れ散る木の葉があります。これは、たださへ變り易い自分の心を變へさせようとして、其所に苦しさがあつたわけです。

第三に自分勝手に出かけたのだから、もういやになつた、さあ歸らうこの歌を引いて、いさうしきでも止まるべき筈でもないから、出かけることにした。と結んであるが、そこにも苦しさがあつた。



かうした意味がわかるさ、其文章が深く味はれます。だから、ちよつと古い文章を味ふには、本になつてゐる故事や歌をも知ることが必要であります。勿論無益なせんさくに落ちてはなりません。

(二) 重要語句としては、「さり」として。み冬・定なき空・降りみ降らすみ・時雨・に・きほふ・さへ・つつ・事にふれて・人やりならぬ・いきうし・で・何となく」の十四語であります。

7、めかれせざりつる程だに

7、いざ出立さなるさ、荒れまさる庭や籬にさへ心が

始終見てゐる時でさへ、めかれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされ

7「めかれ」目をはなすこと。「かる」は「はなれる、離(わか)る、の意。」「ほご」問。うち。「だに」ですら。でも。軽きをあげて、重きを言外にさとりせるに「荒れまさりつる」益々荒れて来た「まがき」垣根。柴竹などであらくつくつたかき。「ましてさ」「いつも見てゐる間

引かれめる。慰めかれ二人の子。ふさ目に入つた亡父の枕、今更昔覺えて、傍に一首かきつけ、たのしみ、たふ心を逃べてゐる

慰めかれたが其中にも、慰めかねたる中にも、侍従(むじ)大夫(だいふ)などの、あながちに打ち屈(ひぢ)したるさま、いと心苦(こころ)しければ、さまざま言ひこしらへ、閨(に)の中を見れば、昔の枕(まくら)さへ、さながら變らぬを見るにも、今更(いまさら)が悲しくなつて、座のかたはらに次の歌を書きつけた。

「この門出に」残して行く亡夫爲家の枕の塵をさへ、とどめ置く古き枕の塵をだに、わが立ち去らば、誰か拂はむ。

さへかうだから、自分が立ち去つたあとを「まして」荒れまさるであらう」と。

「慕はしげなる人々」「自分を」慕はしさうに名残、惜しんでくれる人々。

「袖のしづく」袖をぬらす涙のしづくで、涙のこと。悲嘆。

「慰めかれたる中にも」その悲しみを慰めかれたがその中にも。

×「侍従」阿佛尼の子爲相。

×「大夫」爲相の弟爲守。五五

「あながちに」あまりに。ひごく。

「打ち屈したるさま」氣おちした様。惘然たる様。「打ち」は接頭語。

「いと」甚だ。

「心苦し」氣の毒に思ふ。

「言ひこしらへ」よいやうにいひ慰め。すかしなだめる。

「閨」寝間。

「昔の枕」亡夫爲家が在世當時使用した枕。

「さながら」其まゝ。もこの通り。

「今更」今更なつて事新しく。

「かたはらに」其手近な所にあつた襖か何かに。



【参考】

【侍従】常に天皇の御側に侍して、いろ／＼の御用をつとめ、御諫言を申し上げなごする官で、中務省に属してゐる。  
【大夫】五位の人をいふ。爲守は、當時十三歳で、從五位であつた故。こゝでは爲守をかかいつた。

【批評摘要】

「めかれせざりつる程だに、荒れまさりつる庭も籬も、ましてま見まばされて、」  
「慰めかれたる中にも、侍従・大夫などの、あながちに打ち屈したるさま、」  
「昔の枕さへ、さながら變らぬを、」  
庭や籬のこゝから、わが子のこゝ、亡夫のこゝ、これが、今や出で立たうとする婦人の心のあゆみ、そのたゆたふさま、殊に「まま／＼いひこしらへ」なんてさながら目に見るやうである。歌は、思ふこゝろを其まゝ述べたので、別に巧といふ點もないが、眞情の伺はれる點がよい。

【若い讀者への希望】

(一) この文章には、老婦人の特徴が、よく現はれてゐると思ひます。婦人といふものは、細かいものを氣にするものです。殊にいつ歸るをも知れぬ門出の時はなほさらです。こゝで、かう荒れる庭や籬が、自分が留守になつたらご

うなるであらうとか、慰めかれた、わが子のひどくしよけた姿とか、それから、いろ／＼いひこしらへたこゝかなど、誰も常に見たり、聞いたり、また経験したこゝでありません。亡夫の枕を見て云々などは、いふまでもないこゝであります。これに見るやうに、文章を読むにも、書くにも特徴を知り特徴をあらはすが大切です。そのあらはれない文章は、人を動かすこゝは出来ません。即ちよい文章ではありません。

(二) 重要語句としては、「めかれ。ほど。だに。まがき。袖のしづく。侍従。大夫。あながちに。心苦し。言ひこしらへ。さながら。今更」の十二語。

8、代代に書きおかれける歌の

8、父祖以來の歌の稿本に歌を添へて送る返歌

俊成以來書きおかれた歌の草稿どもの冊子の終りに添へ書な  
代代(よ)に書きおかれける歌の草子(さう)ど  
して、  
もの奥書(おく)して、  
あだならぬかぎりを選  
りしためて、  
侍従(むじ)のかたへ送ると

8【代代】俊成・定家・爲家の父子三代をさす。  
【歌の草子】歌の稿本。「草子」は、冊子で、綴じた書きもの。  
【奥書】書籍の終りに、其本の由来などを書くそれ。  
【あだ】むだ。  
【かぎり】皆。残らず。  
【選りしたたむ】えりわけて整理する。



歌、  
て書きそへたる歌、

〔これは〕俊成・定家・爲家が書き集めた歌の草稿〔であります〕、  
和歌の浦にかきとどめたる藻鹽草〔あしほ〕

これを父祖の記念かんんさまあ思つて勉強なさいよ。  
これを昔のかたみとも見よ。

決してくよこしな歌道に入りなざるな爲相よ。  
あなかしこ横浪〔なみ〕かくな濱千鳥〔ちどり〕、

〔父祖以來〕立派な和歌の名門であることを思つたならば。  
ひとかたならぬあとを思はば。

この歌を見て、  
これを見て、侍従のかへりごと、いとと

くあり。

私が成人の後よもやむだにはいたしません歌の草稿の、  
つひによもあだにはならじ藻鹽草、

記念品を父祖三代のあごにのこしていたゞいたからには。  
かたみを三代〔み〕の跡〔あと〕に残せば。

〔こゝで〕といつて。

〔和歌の浦〕紀伊國海草郡にある。  
こゝでは、歌道の家即ち俊成父祖を指す。

〔かきとどめたる〕書き残したの意であるが、下の藻鹽草を掻き集める意をかけていつた。

〔藻鹽草〕掻き集めては、鹽をさるための海草で、掻き集めたものの意。こゝでは、上の和歌の浦の縁語で、和歌の草稿の意。

〔昔のかたみ〕俊成以來の人たちの記念物。

〔かたみ〕亡〔な〕き人又は別れた人の形として見るもの。遺物。

〔も〕感動の助詞。

〔あなかしこ〕おそれつつしめよ。決して「あな」は、ああ。「かしこ」は、かしこしで、おそれ多い。〔横浪かくな〕寄せ来る浪に向はな

いで横にかき進むが「横浪よかく」で、それをするな。即ちこれは、邪道に入るを横浪をかくにたさへたので、父祖傳來の正し

があつた。それが大にわたつて、夫に見せたいなと思ふ。また泣けてしまつた。さ前節に次いで、その間の情緒を述べた。

〔邪道〕迷つたかも知れませぬ御教訓が無かつたらこの私は、  
迷はまし教へざりせば濱千鳥、

立派な和歌の名門をそれ程にも「知らないで」。  
一方〔かた〕ならぬあとをそれとも。

この返歌が、  
このかへりごと、いとおとなしければ、

まあほつとして、嬉しいにつけても、  
心やすく、あはれなるにも、昔の人に聞

したくて、  
かせ奉りたくて、またうちしほはたれぬ。

〔みよ〕〔三代〕俊成・定家・爲家の三代。「三代」には上の「かたみ」を受けて、見よ、の意がかけてある。

〔まし〕事實を假定する想像をいふ語。假にさうしたならば、〔母の〕御教訓がなかつたとしたならば、〔教へざりせば〕教へずあつたとしたならば、〔母の〕御教訓がなかつたとしたならば。

〔それ〕も「それこそ「知らずして」。「それ」は、一方ならぬ跡をうける。  
〔おとなし〕大人らしい。年の割におとなしい。  
〔心やすく〕安心で。  
〔あはれなるにも〕うれしいと思つたにつけても。「あはれ」は、喜悲共に心の感じをいふ語。



【昔の人】亡夫爲家を指す。

【たくて】たく「し」て

【うしほたる】泣き入る。涙に袖をぬらす。

【参考】

【藻鹽草】昔は、鹽をとるに海藻をかき集めて、こめに幾度も、幾度も潮水を注ぎかけて鹽分を含ませてかばかし、これを焼いて水に溶かし、その上澄を煮つめてつくつた。其海藻を藻鹽草といつた。藻鹽草は掻き集めるものだから、すべて書き集めたもの、特に和歌に關するものを書き集めたものにいふ。

【千鳥】水禽の名。冬月多く川や海の上に、群がって鳴く。

【批評摘要】

歌道を思ふ情、始終一貫して強くあらはれてゐる。女の身として、たださへ心の亂れ安いのには、代々の歌の稿本を奥書までして、よいのは残らず、これを記念させよ、歌の邪道に入るなとの歌二首まで添へてゐるではないか。爲相の返歌の比較的よいのに對して、歌道のために喜んで亡夫に聞かせたいなんて、またさもあらむさうなづかれる。前の二首、別にさりたてていふほどのところもないが、歌道をつぐべき爲相に對する戒さしては、さすがと思はれる。終の爲相の二首は、人もいふやうに、大方前には劣つてゐる。たゞ理窟を歌の形にしたさいふやうに感じられる。

【若い讀者への希望】

(一) 青年男女には、其特長として、元氣なところ、無邪氣なところがあつてかはゆく、またこれがために、あらゆる方面に伸びて行くのであります。この反面として、おぼざつばな、利害をかへり見ない、時には感情の赴くままに事を處して思はぬ失敗を招くことがあります。だから、青年に、ちいさん・ばあさん、を學べといふではありませんが、この一節などには、青年特に若い乙女たちの参考すべきことが多くあります。先づ當時婦人の旅行の不便を思つて御覽なさい。作者阿佛尼の身分を考へて御覽なさい。そしてこの事件の結果を豫想して御覽なさい。これだけ思つても、心は千々に亂れてしまひます。

然るにこの阿佛尼は、困難の間にあつて、それは折々涙にむせぶはむせぶものの少しも取り亂したところもなく、後々のことまで一々始末をつけて出かけるところなどは、に學ぶべき所です。無邪氣な一面を失はないで、また一面にかうした事に處して「糸取り亂さないところがあつて、人は感心するものであります。そしてこゝに述べたことは始終一貫してゐます。かうした理性的な活動をも伺ふことが出来ます。

(二) 重要語句としては「草子・奥書・あだ・さて・和歌の浦・藻鹽草・かたみ・あな



地丁 其

かしこ。濱千島。ひさかたならぬ。かへりこご。さくまし。おさなし。あはれ。うちしほたる」の六語。

9、大夫のかたはら去らず

9、爲守は、爲守に別れを惜しんで明日から、はるばる東の空を眺める。自ら歌を詠んだ。

爲守が(自分阿佛尼)のそばも離れずに馴れ親しんで来たのを大夫(たい)のかたはら去らず馴れ來つるを、今は後に取り残されようといふ名残惜しさが、ひどく感じられ、振り捨てられなむ名残(なり)、あながちに、手ならひに書いたそれを見るこ、思ひ知りて、手ならひしたるを見れば、  
「母上が」はるばる行かれる其先が遠く戀ひ慕はれて「明日からはるばると行くさき遠く慕はれて  
いかにそなたの空を眺めむ。  
と書きつけてあるそれが、何よりも殊にあはれに思はれて、と書きつけたる、ものより殊にあはれに

「大夫の」この「は」が「の」意。  
「むたばら去らず」「自分の」そばをはなれずにおて。  
「馴れ來つるを」馴れしたしんで来たものを。「を」は、ものを、の意。  
「なむ」未來完了の助動詞。であらう。  
×「名残」別れ惜しき。  
「あながちに」ひどく。切に。  
「思ひ知りて」深く心中に感じられて。心にこたへて。  
「手ならひ」思ふにまかせて書きなぐさむこと又そのもの。  
「したるを」したる「の」を。  
「行くさき」「母の」行くさきの地(鎌倉をいふ)。

直に返歌で慰めた。さ前節に次いで、今度は爲守の名残を記した。

其紙に「次のやうに」書き添へた。  
て、同じ紙に書き添へつ。

そんなに思つて東の空を眺めなされる戀しいのなら、つくづくと空な眺めを戀しくば、  
たさへ道程は遠くても直ぐにも歸つて來ませうから。  
道遠くともはや歸り來(こ)む。  
とぞなぐさむる。

「いかに眺めむ」どんなに物思ひに沈みながら見ることぞせう。「なむ」は「物思ふ時など」つくづくと見つめる。遠く見渡す。  
「そなたの空」そちらの空。(關東は鎌倉の空を指す)  
「ものより殊に」何ものよりも殊に。何ものよりも。  
「あはれにて」ふびんに思はれて。氣の毒に思はれて。  
「同じ紙に」手ならひした其紙をいふ。

【つ】現在完了の助動詞で、口語では「てしまつた」と譯する。「ぬ」は、事の自然的にさうなるのをいふが、「つ」はだしめけに積極的にさうするにいふ。  
×「つくづく」じいつこ。つくねんこ。物思ひに沈むさまをいふ副詞。  
×「空な眺めそ」空を眺めるな。上の「な」は禁止、下の「そ」はただ添へて念を押すに止まる。

【参考】  
【名残】1、「波残り」の略で、風が止んで、海上にまだ波の残れること。2、物ごとの去つた後、なほ其氣の残れるもの。餘情。3、別れ。別れを惜しむこと。  
【な……そ】「な」は、動詞に添へて動作を禁止する語。「そ」は、たゞ添へて念を押す意の語。「な」の用法は、1、動詞の終止形に添ふ場合。2、連用形(但加變と佐變とだけは未然形)



の上に「な」をつけ、動詞を隔てて「そ」を添へ或はこれを省くこともある。

### 【批評摘要】

爲守はいまだ幼くて、日頃母の傍をばなれなかつたので、一層名残惜しかつたらう。母よりさきに歌を詠んでゐる。母も「ものより殊にあはれにて」といつてゐる。末子をいたはる様、目に見えるやうである。

本節は、割合に簡潔に出来てゐる。終にも「こそ慰むる」みだけで、くだくだしく書かなかつたところはまことによい。

「はるばる」の歌、幼い爲守の歌としては、すらつとよく出来てゐるが、下の句「いかにそなたの空を眺めむ」の方が、さきに出るのが自然の情であらうのに。

「つくづく」の歌「そんなにお泣きなされるな、直ぐ歸つて來ますかられ」と云ふ詞は、ちよつとした外出の時にも、幼児にいひおく詞であるが、この歌は、本當にそれで、よく眞情があらはれてゐる。

### 【若い讀者への希望】

(一) この文章には、ちよつとまごつきます。「大夫の」の「の」と、名残の次に入るべき助詞がわからねばなりません。若しこれを「誰かが」大夫のかたは

ら而去らず」としたら何も文をなしません。そこで、「の」の意味をはつきりしておかなければならぬことがわかります。この「の」は「が」の意の助詞で「人の戀しき」は「人が戀しい」、「鶯の鳴く」は「鶯が鳴く」で、これがかういふ種類の「の」であります。また「の」には、いろ／＼の意味の時があります。「人類の」の「の」は所有をあらはします。「櫻の花」「世の中」の「の」は由る所かかはる所を、「阿波の鳴門」の「の」は「に」にある「の」意を、「富士の山」は「富士といふ山」「月の眉」は「月のやうな眉」といふ意なごです。

それから、詞といふものは、原意からいくらかも轉じて意味が變はつていくものです。「名残」といふ詞にしても語原は「波残り」の略だといひます。「風が吹き止んでなほ海上に波の鎮まらぬこと」轉じて、「なぎさに、波が引き去つた後に、なほこゝ、かしこに波水の残つてゐるもの」。また轉じて、「物事の過ぎ去つた後に、その氣の残れること」また轉じて、「漏れ残ること。それから、「別れ」別れを惜しむこと「こんな風に轉々して行くものです。

だから、其場限りの簡単な解釋本にばかりによるこゝ、知識がいかに淺薄になつて、少しも應用がきかなくなりませぬ。所謂實力にならないのです。して見ると、國語でも外國語でも、いやしくも實力を望む人は、適當な辭書を用ゐて重要語の意義の轉化、てにをはなどの意義を明かにするのが大切です。一體辭書は、引きなれないと、これほど面倒なものはありません。また引いて見ると、どうしても引かすにはぬられないものです。



(二) 重要語句としては、「の・なむ・名残・ながむ・つ・つくづく・な……そ」の七語です。

(三六)

10、山より侍従の兄の律師も

10、源承律師も、山より侍従の兄の律師も、いってたちから来て、「不吉の涙はかけません。』といひながらも、さすがに悲しいやうだ。其の慶

比叡山から爲相の兄の源承律師も、  
山より侍従の兄の律師も、いってたち  
發を見送らうといつておいでた。律師も「自分の出發を」たいさ  
見むとおはしたり。それもいと心細し  
う心淋しく思つてたが、この手ならひの歌をも見て、  
と思ひたるを、この手ならひどもを見て  
又それに書き添へた。

「お別れは惜しいが」この旅衣に無駄には涙をかけますまい、  
あだにのみ涙はかけし旅衣(たびのえ)、

「訴訟に勝つて」心の満足が出来てお歸りになる間だから、  
心のゆきて立ちかへるほど。

10 X 山比叡山延曆寺のこと。

【侍従】前に出た爲相。  
【律師】僧官(僧正・僧都・律師)の第  
三位。爲相の同母兄の源承律師。  
【いでたちを見む】出發を送らう。  
【おほす】来る。居るの敬語。  
【それも】それは源承を指す。  
【思ひたるを】「たる」は「て・ある」  
の約。て、ぬる。「を」は、のにか  
の意。  
【この手ならひ】爲守の書いた歌。  
【あだにのみ】むだには。「のみ」は  
それと限つて強める語。  
【かけし】衣の袖に「かけまい」  
【旅衣】旅に着る着物。  
【心のゆきて】満足して。(訴訟に勝  
つ意)  
【立ちかへるほど】歸るまでの間。

融阿闍梨も見えて、鎌倉へ同道する。一首書いた。前節に次いで、今度は、二人の兄のこゝとを述べた。

といつて不吉な言は避けながらも、泣けて来るのを、  
とは言思(ことごと)しながら、涙のこぼるるを、  
強く口をきいて悲しさをこまかして見ても、  
あららかに物いひ紛らはすも、さまざま  
しいので、  
あはれなるを、阿闍梨(あじり)の君は山伏(やまぶし)に  
て、この人よりは兄なり、「この旅の道の  
ましてお送りいたしませう。」といつて、  
しるべに送りたてまつらむ。」とて、出で  
られたやうだが、  
立(た)たるめるを、「この手ならひに又まじ  
いらればならぬ。」  
らはざらむやは。」とて書きつく。  
立ち添ふぞ嬉しかりける旅衣、  
かたみに頼む親のまもりは。

「兄弟」諸共に力とたのむ母親の守護として。

(三七)

「立(裁)ち」は旅衣の縁語。  
【言思】不吉をいふのを忌むこと。  
X 【こぼるるを】「を」は、のを、の意。  
【あららかに】あらあらしく。  
【あはれなる】かなしい。ふびんな。  
【阿闍梨の君】源承の兄の慶融。「阿  
闍梨」は僧職の一。  
【山伏】山野に起臥して、行をする  
僧。  
【この人】源承律師を指す。  
【道のしるべに】道案内のために。  
【に】は、の爲め、の意。  
【さて】といつて。  
【出で立たる】出で立つの敬語。  
【める】推量の助動詞「めり」の連體  
形。やうだ。見える。  
【この手ならひ】前の律師の歌を指  
す。  
【まじらばざらむやは】交はらずに  
居らうやむなしい。「やは」は反語。  
【立ち添ふぞ嬉しかりける】ける」  
は「ぞ」の係の結び。「立ち添ふ」  
は「母に」添ひ行く即ち同行する  
。又「立(裁)ち」は下の旅衣の縁  
語。  
【かたみに】互に。互に諸共に。



【参考】

「こぼるるを」「こぼるる」は、こぼれ・こぼれ・こぼる・こぼるる・こぼるれと活用する、其連體形である。「こぼるるを」は、連體形の次に名詞が略かれたのである。ちよつと古い文には、この例は、頗る多い。本節にも、「思ひたるを」「紛らはすも」「あはれなるを」「出で立たるめるを」などそれである。

【批評摘要】

これが親心といふであらう。律師・阿闍梨の二人の來れるを喜んで、「出立見むとおぼしたり」といつてゐる。そして其の心の中で察して、「いと心細しと思ひたるを」「言忌しなから、涙のこぼるるを、あちらかに物言ひ紛らはすも、さまざまなるを」なんて、子も子、親も親、よく其の消息があらはれてゐる。阿闍梨のお供をするに至つては、大に満足せられたことであらう。

「あだにのみ」の歌、がよい母の長の旅を送る。をのこの情がよく見えてゐる。自分に母があつて、其母の出で立ちを送る時には、かういひたいと思ふやうな歌である。「あだにのみ」の「のみ」はよくきいてゐる。かういふ歌はよいさかわるいさかは、あまりいひたくない。真情があふれてゐれば満足すべきであると思ふ。

「立ち添ふぞ」の一首、これはまた長男の母を送るやうな歌である。「かたみに頼む親」といつ

てゐるさころなど。

【若い讀者への希望】

(一) 本節には、「を」といふ、思ひに違つて、意味が裏返る意の語が、三箇所にあります。これは、口語にするさ、「のに・のを・が」となります。この「を」の出る毎に文の意味が裏返つて行きますから、前後のこの關係を落ちついて考へていかぬと文の意味を明かに知ることが出来ません。「思ひたるを」(三六頁)は、心細いと思つたが、「あだには涙はかけじ」と意味が裏返つてゐます。「さまざまなるのを」(三七)は、いろ／＼あはれであるのに、「立ち添ふぞ嬉しかりける」と書きつける上意味が裏返つてゐます。

この「さまざまあはれなるを」以下八行は、「さまざまあはれなるを阿闍梨の君は……」「……」とて、「立ち添ふぞ嬉しかりける旅衣、かたみに頼む親のまもりは。と書きつく。」となるのであります。

それから「山伏にて、この人よりは兄なり」は阿闍梨の君の説明で括弧の中に入るべきものであります。だから譯すにも「律師よりは兄であるが」と次へ續くやうに譯しました。



(二) 重要語句としては、「山・律師・おはす・を・旅衣・心の行きて・言忌・阿闍梨・山伏・道しるべ・めり・やは」の十二語。

11、女の子はあまたもなし

11、た  
だ一人  
の女の  
子は、  
近くの  
女院に  
仕へて  
ゐる。  
院には  
、姫宮  
が一人  
で、お  
仕へも  
暇で、  
またこ  
の子は

自分(阿佛尼)にむすめは澤山はない。ただ一人であつて、  
女の子はあまたもなし。たゞ一人(ひと)に  
「それは」ほど近い所の新陽明門院にお仕へしてゐられる。  
「それは」ほど近い所の新陽明門院にお仕へしてゐられる。  
て、この近き程の女院(にやうめいもんゐん)にさぶらひ給ふ  
。この女院には姫宮がお一人お生れになつたばかりで(別に忙し  
院の姫宮(ひめのみや)一(ひと)とこころ生れ給ふばかり  
くなく)。「又このむすめは」心だても實直な方で、  
にて、心づかひもまことしきさまにて、  
しつかりしてゐられるから、  
おとなしくおはすれば、宮の御かたの戀  
いふことも、出發前に申し上げてくれと申して頼む序に、爲相や  
しさも、かねて申しおくついでに、侍従

11「ただ一人」阿佛尼の女の子(キクナイ)の女の子紀内侍。殘月抄に「父は爲家卿にはあらず」とある。兄弟中のかしら【程】あたり。邊。  
【女院】母后又女御・内親王などで、特に院號を獻じた方の稱。こころは龜山帝の女御新陽明門院。  
【さぶらひ】奉仕。宮づかへ。  
【「とこころ」一人。】「とこころ」は貴人を數へる時の接尾語。  
【心づかひ】心の用ゐ方。  
【まことしき】實直な。眞面目な。  
【おとなしく】おとなしく。しつかりして。  
【おはすれ】おはす、の已然形。  
【かれて】前以つて。(出發前に)

實直で  
しつかり者だ  
から、  
二人の  
兒の世  
話を頼  
むとて  
一首そ  
へてや  
ると、  
皆承知  
して返  
歌まで  
あつた  
と。や  
はり前  
節に次  
いで、  
今度は  
一人の  
女の子  
について  
記し

爲守などのことについても、世話をして養育すべき旨を  
・大夫(たうふ)などのこと、はぐくみおほすべ  
も、巨細に手紙に書きつけて、其終に、  
きよしも、こまかに書きつけて、奥に、  
そなたを朝日としてお頼します(ごうか)故郷に、  
君をこそ朝日とたのめふるさとに、  
残つてるなまじこの様な二人の子を霜に枯らさず育てて下さい。  
残るなでしこ霜に枯らすな。  
と申して上げたれば、御返事もこまやかに、  
と聞えたれば、御かへりもこまやかに、  
たいさう親切に書いて、返歌には、  
いとあはれに書いて、歌のかへしには、  
あなたが最後の事迄思ひおく切なる心が留めてあつたら故郷の、  
思ひおく心とどめば故郷の  
やまとなでしこの愛兒は霜に枯れるやうなことはありますまい。  
霜にも枯れじやまとなでしこ。  
とぞある。

【はぐくみ】羽含むの意で、親鳥が雛を羽でおほひそだてることか  
ら、養育する意となる。  
【おほす】成長させる。  
【奥に】「手紙の」終の方に。  
【君】紀の内侍をさす。  
【朝日とたのむ】なでしこを枯らすことこの霜をさかす朝日さたのむ。「と」は、としての意。  
【なでしこ】よく子供にたとへられる、こころは、爲相・爲守を指す。  
【霜に】「に」は、のために、の意。  
【聞えたれば】申し上げたれば。「聞」は、いふ、の敬語。  
【御かへり】御返事。  
【こまやかに】こまかに。  
【あはれに】情も深く。  
【歌のかへし】返歌。  
【思ひおく】出發後のこころを心配に思ふ。  
【やまとなでしこ】石竹のこと。(か)らなでしこに對していふ。無論爲相・爲守の二人を指す。)



【批評摘要】

何といつても婦人の出で立ちに際して、一ばん心配なのは、また年ほも行かぬ子供のことである。これは當然のことである。養育といふことについては、どうしても婦人でなければ細かい注意が行届かぬ。尼がたつた一人の女の子に、二人の養育を頼むは當然である。本節を「讀すれば其女の一人子をいかに信頼してゐたかよくわかる。「女の子はあまたもなし、ただ一人にて」といふ出かたはよく其心理が伺はれる。或は「女の子はあまたもなし」といふのは無用といふ人もあるかも知れぬが、それは婦人の心理を知らぬからだと思ふ。それからまた「女院にさぶらひ給ふ」おまなくおはすれば「聞えたれば」と敬語が用ゐてゐる。それはわが子ながらも院にお仕へしてゐるからだといへばそれまでであるが、それ以外にも、信頼するに足るといふ気分があふれてゐる様に感じられる。「君をこそ」の一首、愛兒の養育をたのむ情が強くあらはれてゐる。其返歌は別にいふこともない。

【若い讀者への希望】

(一) 本節は、特に御婦人女學生の方々に、よく味はつていただきたい。親子は手紙にも、こまごま記してお互にどんなに頼みあつてゐますが。又まこ

にこの應答が上品ではありませんか。なまけがあつてそして上品でいふのは、本當に人の心を引きつけます。かつて私がかういふことを聞きました。某中學の老校長でしたが「私は平民の女ばかりです、何かの時には叫びますから」と。私はつくづく思ひました。さうです、いかにつくりたててゐても、常はいかに上品らしい言葉づかひをしてもためです。いざさなるを叫びます。いざさいふ時が大切な時であるのに。それがだめであつたら全部がだめです。私は、本節を讀んで、そんなことを思ひます。

(二) 重要語句としては「ほご・女院・さぶらひ・ひところ・心づかひ・まこしき・おまなく・はぐくみ・おほす・に・聞ゆ・こまやかに・あはれに・やまこなでし」の十四語。

12、五つの子どもの歌

五人の子供の歌を、  
五つの子どもの歌、  
残らず書きあげたのも、  
残りなく書き続け  
ぬるも、  
ちよつと思ふさ馬鹿げておかしいやうだが、  
かつはいとをこがましけれど、

12、子供等の歌を皆あげたのは、

12【五つの子ども】社の内侍・慶融・源承・爲相・爲守の五人の子供。  
【かつは】一方から考へるこ。一面には。  
【なこがましけれど】をこがましの已然形。馬鹿らしい。笑ふべきだ。



變に思はれる。親の心さしては、  
かもし知らぬが、親心さしては、  
は、相當に思はれたのだ。  
は惜しいが、思ひ切つて出かけた。これが本段の終。

親の心さしては、「これも」相當よく思はれるので、  
親の心には、あはれにおほゆるままに、  
書き集めたのだ。 そんな意氣地なしではいけないと思つて、  
書き集めたり。 さのみ心弱くてはいかが  
とて、 つれなく振り捨てつ。

【振り捨てつ】「子供の慕ひよるのを」振り捨てて出かけてしまつた。

(四四)  
【あはれに】感じ深く。身にしみて  
【おほゆる】思はれる。  
【まにまに】に従つて。に依つて。  
【さのみ】それほご下(くだ)に打消を伴ふが常。  
【いかがさて】いかが「はせん」さて。どうしようだめださて。「さて」ば、と思つて。  
【つれなく】氣強く。平氣で。

### 【批評摘要】

親、殊に母親などは、わが子の事を話したいものだ。そしてそれを話すのに、いろいろ苦心するものである。「うちの坊やは、本當においたで困ります。それでも學校では級長だなんて、何が何だか。」まあこんな風である。  
して見ると、作者の子供の歌を残らず書きたてて、「親心にはあはれにおほゆるまに」と出てゐる。割合にさつぱりとしてゐる。  
これまでは、くどくどとわが子の事をも記して來たにも拘らず、「さのみ心弱くてはいか

がさて、つれなく振り捨てつ。」といったところ、いかにもけなげに、さつぱりさ、上品に、氣持よく感ぜしめてゐる。

### 【若い讀者への希望】

(一) 本節の「あはれにおほゆるまに」の「あはれ」などいふ言葉は、現今用ゐる言葉としては、つらい・かなしい意であります。これは、「ああ」と同じ調子の言葉で、ひろく感ずるについて發する聲なので、嬉しいにもつらいにも發する聲であります。言海には、其語原として「日の神、天の岩戸を出で給ひ、天始めて晴れたる時に稱へたる語に起る」とあるのでもわかります。感動詞としては、「あはれ今年も半を過ぎぬ」、名詞としては、「あはれと思ふふしぶし」、「あはれ」をはたらかしては、「あはれむ」とか「あはれぶ」とかいひ、又あはれむこととしては、「あはれみ」等があります。これ皆同一系統の語であります。これらを一つ一つ別々に覺えては大變です。根本の意義を徹底的に理解してゐれば、これと同一系統の語は、直ぐに理解せられます。だから、單語を覺えるのに落ちついて考へなければいけません。實力はさうして養はれます。かうした注意をせずには、お役目的に、其場かきりに、幾冊の讀



本を讀んでも實力はつきません。この點を考へるのはすなはち、勞少くして効多からしめる方法であります。

(二) 重要語句としては、「かつは、をこがまし、おはれ、おぼゆ、まきに、そのみ心弱くてはいかがさて、つれなく」の六語。

## 二、粟田口といふ所より

本段は第二段で、四十二節より成る。本段は、作者が、建治三年十月十六日いざよふ月にさそはれて、住みなれた都を立ち出で、日数は十四日、四十二箇所を経て、鎌倉に至るまでの紀行である。



1、粟田口といふ所より

粟田口といふ所から乗つて来た車はかへしてしまつた。  
粟田口(あはた)といふ所より車は返しつ。

問もなく逢坂山の關所を越えたが其時に「一首詠んだ」  
程なく逢坂(あさ)の關(せ)越ゆるほどに、

無常な命であるからいつ歸られるともわからぬ旅だが、  
定(あさ)なき命は知らぬ旅なれど、

ここは再び親しい人々に逢はれる逢坂ださ心頼りにして行く。  
またあふ坂とたのめてぞ行く。

1、粟田口で牛車心捨てて本當の旅気分になつた。逢坂山に名残を惜しんで足をすめた。

1【粟田口】京都三條通から東方へ、東國街道への出口(山城國愛宕郡)。  
【車】牛車だけば。「車」は牛車。  
【は】は物を區別する意の助詞。  
【程なく】いくほどもなく。間もな  
【逢坂の關】逢坂山は、太津市の南方で、近江と山城との國境をなしてゐる。「關」は、今の太谷驛附近にあつたといふ。  
【關】昔、全國各地の國境要害の地に設けて、往來の人を調べ、萬一に備へたもの。

【ほごに】頃。折に。  
【定なき命】いつ死ぬともわからぬ無常な命。  
【またあふ坂】再び歸つて来て逢ふの「逢ふ」を逢坂の「逢」にかけていつた。  
【たのめて】たのみにして。あてにして。「たのめ」は、他動下二段の「たのむ」の終止形で、頼みに思はせる。あてにさせるの意。

【批評摘要】

男々しさ女々しさ、いひしらぬ感じは、この二行さ一首の歌にあらはされてゐる。「粟田口といふ所よ」車はかへしつ」それから「程なく逢坂の關越ゆるほどに」何ささつぱりしてゐるではないか。「定なき」の一首、恐らくこれは一つの叫びであらう、住みなれた都をはなれ、いとしい子供を遺して、關のために、あらゆる危険を冒して老いたる婦人の身を以つて、旅の初日に逢坂山の「逢ふ」さといふ名を聞いた時の。

【若い讀者への希望】

(一) どうですか、この文章の簡潔さは、紀行文は殊に簡潔にしたいと思ひます。何で簡潔な感じがするでせうか。まあよく御覽なさい。「粟田口より車はかへしつ」このセンテンスが短いからです。それから、「程なく逢坂の關越ゆるほどに」さいつただけで、一首の歌が書いてある。詠んだことも、詠まぬことも、斷つてない。なくて十分わかるからなのです。それから、「車はかへしつ」の「は」は、物を區別する意の助詞だから、車だけばかへしたが、自分は引き続き旅行を續けてゐることになります。だから續けて行つたなごも、くだくだしく書く必要がありません。簡潔な文章に接したならば、先づそれを味ひ、それから、なぜ簡潔なのかを



よく其理由を知つて、文章を書く時の参考になくははいけません。國文を讀むには「は」さか、「も」とか、「だに」さか、「さへ」さかといふやうな助詞を、ゆるがせにしないやうにしなければ、面白味はわかるものではありませぬ。

(二) 重要語句としては、「車・程なく・逢坂の關・關・ほごに・定なき命・たのめて」の七語です。

### 2、野路といふ所は

野路のちといふ所は、前後に人通りもなく淋し

く、人も見えず、日は暮れかかりて、いと物

がなしと思ふに、時雨しぐれさへ打ち注ぐ。

打ち降る時雨の爲め又故郷を思ふ涙の爲めに袖がぬれて、

行く手も遠い野路の篠原しのはらを獨り淋しく行かねばならぬ。

【野路】近江國栗太郡老上村。

【こしかた行くさき】今来た方もこ

れから行く方も。

【物がなし】何さなくかない。

【思ふに】「は」の、の意。

【時雨さへ】時雨まで。「時雨」は秋

から冬に時を定め降る小雨。

【打ちしぐれ】時雨が降る。「打ち」は接頭語で調子をさこのへる。

【故郷思ふ】ふるさとの「ふる」に、時雨の「降る」をかけた。

【篠原】近江國野洲郡にあつて、野路とは別なるが並んでゐるため、古來歌に二つ續けて詠まれる。

2、ま  
だ近江  
にかか  
つたば  
かりな  
のに、  
時雨ま  
で降つ  
て故郷  
を思ふ  
情を切  
ならず

める、  
と旅の  
淋しさ  
を述べ  
た。

### 【批評摘要】

この一節を讀んで見ると、明い都のちまたを、そぞろあるきして、町はずれまで来た時の、まだ程遠き、行かねばならぬ田舎への暗路を思はせられる。都の人には、唯さへ田舎は淋しいのだ。人は見えず、日は暮れかかり、時雨まで降る。行く手は遠い野路の篠原、さへしぐれさきまふはれる上品な老女の姿よ。あゝわが身も知らずそのうちの一人となつてしまつた。

### 【若い讀者への希望】

(一) さうです、本當に繪にしたいやうな文章です。夕暮。野路の篠原。文章は、繪として眼に見えるまで、讀まねばなりません、味はればなりません。さうして始めて實力になつたのです。其文章内の一字一句皆繪として目に見えるやうになれば記憶はたしかです。應用もたしかです。さうかあらゆる字、句、文章を出来るだけ、それまでにして思ひます。それが本當の實力なのです。近頃から。世に記憶法といふものがあるとしたら、これが最上なものです。近頃批評鑑賞さかやかましくいはれますが、これが出来なかつたらそれこそ人



眞似です。人が面白いといふから自分も面白いといふのです。人がよくないといふから自分もよくないといふだけです。文章が繪になつて眼の中にはいつて居れば、よし其人の批評鑑賞が變であつても虚偽でありません。文章が繪となつて眼に見えるやうにつきさめることは、多くの點に於て必要なことです。

(二) 重要語句としては、「こしかた行くさき物なし。打ちしぐる」の三語です。

3、今宵は鏡といふ所に

3、今宵は、  
豫定の  
所まで  
も行か  
れず、  
時雨洩  
る守山  
へ宿ま  
つた。

今夜は鏡といふ所につかうと豫定はしたものの、  
**今宵(よひ)は鏡(かがみ)といふ所につくべしと定**  
めつれど、暮れ果てて行きつかず、**守山**  
いふ所にとまつてしまつた。  
**なほ慕ひ來にけり。**  
この守山にも時雨が  
追つかけてまゐ來たのだ。

【鏡】近江國蒲生郡鏡山村。  
【べし】推量の助動詞であるが、こ  
こでは、決意をあらはす。  
【守山】近江國野洲郡、野洲川の左  
岸にある。  
【なほ】やはりなほ。其上といふ意  
の時もある。  
【にけり】してしまつた。過去完了形  
【いさご】いと、の畧。いよいよ  
よ。ますます。  
【けむ】過去の推量の助動詞。たで

そして、  
あはれ  
深い  
一首を  
詠んで  
早く  
寝た。

只さへ涙でぬれてるのに其上益々ぬらせよきて宿つたらうかい  
**いとどなほ袖ぬらせとや宿りけむ、**  
絶間なく時雨がもるといふ其の守山といふ所にまゐ。  
**間(ま)なく時雨のもる山にしも。**  
今日は十六日の夜であるわい。  
**けふは十六日(じふろ)の夜なりけり。いと苦**  
れたので寝てしまつた。  
**しくて臥(ふ)しぬ。**  
大さう疲

あらう。  
【間なく】絶間なく。引續き。  
【もる山】守山(もりやま)は、時にも  
るやまと讀む。直ぐ上の「時雨  
の」を受けて「洩(も)る」なかけ  
ていつた。  
【しも】強く指定し、又語勢を強め  
るにいふ助詞。  
【なりけり】この「けり」は詠嘆の意  
【いさ苦しめて臥しぬ】なれぬ旅の  
第一夜なので、疲れて苦しかつ  
たらうか。

【批評摘要】

「時雨なほ慕ひ來にけり」なほ時雨について來られた。婦人の弱いやさしい氣分がよくあらはれてゐる。別に擬人法などしやれたのではなく、當時の上品な婦人の普通の語法であらう。  
「いさごなほ」の一首、旅愁のます／＼増してくるなさをけなさが、遺憾なく伺はれる。眞意を述べた歌である。「いとどなほ袖ぬらせとや」とはほんとに意地らしい。  
「けふは十六日の夜なりけり」これも作者の深い／＼思ひ出の一つ。其後毎日幾回か心の中に叫ばれたのであらう。ちよつとしたことであるが、日附なども感じのおもむくに任せて終に記したのも面白い。



【若い讀者への希望】

(一) 漸く思ひ切つて出かけた旅が、初日から豫定が外れました。文字通りの「日暮れて道遠し」です。守山も何のたよりにもならず、時雨の洩る山です。まこと、なほ其上に時雨もて袖をぬらせさて宿つたやうでいらしい。そこで「今日は十六日の夜なりけり」かういふ風に、はじめから事が齟齬していくほど、苦しいことはありませぬ。然し人の感じをひく上からいへば、さういふやうに書けた文章がよいのです。だから世渡りの事實としては、苦痛ないやなことでも、詩や文章の材料としては立派なことがあります。絵を畫くにも、田舎のみすばらしい家の方が、よく撰ばれるやうなものです。

詩や文章の材料として「面白いから、自分も一つそれを實行して見ようなん」と思つたら、そんな誤を引き起します。

(二) 重要語句としては「べし。にけり。いさど。間なく。しも。なりけり」の六語。

4、いまだ月の光は

まだ有明の月の光がほんのり残つて十七日の明け方に、  
いまだ月の光はかすかに残りたる曙(あけぼの)

守山を出かけた。

野洲川を渡る時分に、  
野洲川(のうすけ)を渡りて行く。

4【月の光はかすかに残りたる曙】十七日の月故明け方西に残つてゐる【かすかに】ほのかに。淋しく。  
【野洲川】近江國野洲郡にあつて、守山の東を流れて琵琶湖に入る。

4、十七日未明に守山を出る。野

洲川を渡るに、駒の足の音が川霧の中から聞えて来て面白い。

先へ行く旅人の馬の足音がはつきり聞えるだけで、  
ほど、さきだちて行く旅人(たびびと)の駒(こま)の足

の音(ね)ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人は皆一處に朝早く宿を立ちいでて、  
旅人は皆もろとも朝立ちて、

駒(こま)にうち乗って渡つて行くやす川の深い霧にかくれて。  
駒うちわたすやすの川霧。

【ほど】頃。時分。  
【駒】ひろく馬のことをいふ。  
【ばかり】それのみに限る意の語。  
【さやか】はつきり。  
【もろともに】そろつて。一處に。  
【うちわたす】うちわたるをいふに同じ。「うち」は接頭語で別に意味はない。

【批評摘要】

深くたちこめた川霧のうちから、もれ来る勇める駒のひづめのひびき、もうこれだけでよい。さても繪には書けない。この世のものでもない。それを聞きながら、いそいそと、あゝうらやましい。

【若い讀者への希望】

(一) うちしめつた昨日までの筆さは全く變つてゐます。朝またき有明の月をいただいて行く、何さすがすがしいではありませんか。そして川霧からもれ来るひづめの響、かうした繪のやうな一首で今日は筆をおいてゐます。實に



惜しいやうではありませんが、ここが誰も思ひ切れないところ。殊に若い女學生たちに望みます。この文を味はつて下さい。そしてこのさつぱりしたかうくしいところを學んで下さい。

尤もこれは歌人の紀行文であるから、歌を主として文は其詞書の長いのに過ぎません、いはば伊勢物語の形式に近いかは知りませんが、とにかくこの簡潔なところは一つのよい點だと思ひます。

(二) 重要要句としては、「かすかに・駒・ばかり・さやか」の四語。

### 5、十七日の夜は

十七日の夜は、

十七日の夜は、**小野(の)の宿(しゆく)といふ所**

にとどまる。

其内に月が出て、**山の頂上(の)にならび立ち**  
月出てて、**山の峯(の)に立ち**

5【小野の宿】近江國坂田郡。

【みれ(米)】「み」は發語、嶺(の)即ち山の頂の尖れる所。

【けちめ】區別。差別。「松の木の間

けちめ見えて」とは、月が出て松の木が一本一本、はつきりこ

5、十  
七日小  
野の宿  
へとま  
るこ、

月が出  
て、山  
の頂の  
松の木  
が一本  
一本數  
へられ  
るやう  
に見え  
て面白  
いと實  
景を述  
べた。

る松の木の間(の)間、**けちめ見えて**  
つづきたる松の木(の)の間、**けちめ見えて**  
て大さう景色がよ。この宿はまだ夜もあけやらす霧も深くて迷  
**いと面白し。ここは夜ぶかき霧のまよひ**  
ひ易いのにわからぬ道を探し〜出てしまつた。  
**にたどり出てつ。**

わかるやうになつて。

【ここは】小野の宿を指す。

【夜ぶかき】夜のふけた。

【霧のまよひに】霧が深くて迷ひ易いのに。

【たどり出づ】わからぬ道を探し求めながら出る。

### 【批評摘要】

「月出で、山の峯に云々」徒然草の「曉近く待ち出でたるが、いさ心深う、青みたるやうにて、深き山の松の梢に見えたる木の間影、打ちしぐれたるむら雲がくれのほごまたなくあはれなり。」の一節を思はず口ずさんでしまつた。

### 【若い讀者への希望】

(一) 文章は、偽てはだめです。實感・實景を叙したものにはどうしても心が引かれます。この文章などはそれでありませう。若い人などの中には、徒らに飾



つたり人眞似をしたりする人がありますが、それは大に慎しむべきことです、生きた文章が出来ないから。

(二) 重要語句としては、「みれ・けぢめ・たどり出づ」の三語。

### 6、醒が井といふ水

醒が井といふ水は「冷たい水なので」、もし夏であつたら飲まず  
醒(め)が井(ゐ)といふ水、夏ならば打ち過  
には通られまいと思つたが、徒歩の人たちは、「この冬」  
ぎましやと思ふに、かち人(び)は、なほ立  
でもやはりすくつて飲むやうである。  
ち寄りて汲(く)むめり。

醒が井の水をすくつた手で名利に汚れた心をすすぎ清めたらば、  
むすぶ手に濁る心をすすぎなば、

この世で夢みてゐるわるい欲望は去つてしまふであらう。  
うき世の夢やさめが井の水

こんな感じがした。  
とぞおほゆる。

6【醒が井】近江國坂田郡醒が井村  
にある清水の出る所。米原の東  
北一里餘、驛のある所。

【ましや】「何々し」ようや、決して  
しない。「まし」は、事實を假定す  
る想像をいふ助動詞で、時に稍  
願ひ思ふ意を含む。「や」は反語。

【かち人】馬に乗らぬ徒歩の人。

【なほ】でもやはり。即ち初冬の今  
でも。

【汲むめり】くんで飲むらしい。

【むすぶ手に】すくふ手に。即ち手  
ですくひ上げた水によつて。「に」  
は、によつて、の意。

【濁る心】清くない心で、この世の  
名譽利益を貪る心。

【うき世の夢】この世で名譽利欲などを貪ることを指す、これらは一場の夢に過ぎな  
いから。「うきよ」は、この世を憂いつらい事の多いにつけていふ語なれど、單  
に「この世」といふのと同じ。

【夢やさめが井の水】夢やさむらむさめが井の水。夢やさめを、さめが井にかけた。  
【とぞおほゆる】と思はれ「てそんな歌を詠んだ」。

【批評摘要】

突然大海に接するとか、高山に登るとか、非常によく澄みきつた水などに接するとか、一  
種言ふに言はれない、すがすがしい清い氣分に打たれるものだ。この歌などもさうした自  
然の心持の表現であらう。そしてこれは、かけ詞などがあつて自然を飲いてゐるやうであ  
るが、これは作者としては、むしろ自然のほとばしりであらうかと思はれる。歌も文章も  
皆こんな傾がある。

### 【若い讀者への希望】

(一) この文章は、醒が井の水を激賞してゐます。これを直接にいつたならば、  
「醒が井の水は、非常に清んでつめたい。心まで清々します。」といふだけで  
す。これを「今は初冬で寒いから仕方はないが、若し夏であつたなら、ただで  
は通られまい」といひ、其上に、「この初冬でも、徒歩の人は、汲むやうだ。」  
といひ、なほ一歩進めて、「この水では煩悩まで去るであらう」といつてゐま

6、醒  
が井の  
清水は  
實にき  
れいな  
ので、  
心まで  
清まる  
やうな  
氣がし  
た。さ  
一首を  
そえた



す。この賞め方の呼吸をちよつと味はつておくといひと思ひます。

(二) 重要語句としては、「ましや・かち人・むすぶ手に・濁る心・うき世」の五語。

### 7、美濃の國關の藤川

美濃の國の關の藤川をわたる程に、  
美濃の國關(き)の藤川わたる程に、まづ

何はき  
7 關の藤川石破郡にある。今は、藤子川(フチノガハ)といふと。

【程に】時分に。頃に。

【まづ】何はきておいて第一ばんに

【で】す・で」の約。ないで。

×【ましやは】「何々し」ようやしな

い。「やは」は反語。

わが子供が歌道を以つて君に仕へられるやうにとの爲めでなくて、

わが子供君に仕へむためならて、  
わたらましやは關の藤川

【参考】

【ましやは】「わが子供」の一首は、古今和歌集大歌所の歌の、「美濃國關の藤川絶えずして、君に仕へむ萬世までに」に依つたのである。一首の意。「美濃の國の關の藤川の流れの絶えないやうに、いつまでも、いつまでも、君にお仕へしませう。」

7、關の藤川へ来て、藤川を詠める「君に仕へむ萬世までに」の古歌を思ひ出し、一首詠んだのである。

### 【批評摘要】

ともすれば、燃え立たうとする懐郷の情は、わが兒のこゝが、關の藤川にちなめる古歌によつて火の手をあげたのである。「わが子供」わたらましやは「随分強くあらはれてゐる。さもあらむと思はる。」

### 【若き讀者への希望】

(一) 文は、わざと作つたのはためでありませう。自然に燃え立つて出来たものでなければなりません。古來有名な文章でも繪畫でも皆さうであります。いや必ずしも大家たるこゝを欲しないといつても、人を動かす人に感じさせるだけは必要であります。心にもないことを人真似して書いた文章は死んでゐます。

(二) 重要語句としては、「で・ましやは」の二語。

### 8、不破の關屋の

不破の關屋の板びさしは、  
不破(はふ)の關屋(せき)の板びさしは、  
今もか

8 【不破の關】今の不破郡關原村。桓武帝の延暦八年廢せられた。

【關屋】關守(せきもり)の住む家。

【板びさし】板ぶきのひさし。

8、相變らず

(六二)



荒れ果ててお  
る不破  
の關屋  
の様を  
述べた

極攝政が「荒れにし後はただ秋の風」を詠んだが、今も其通りである。  
はらざりけり。

「あれ果てて屋根に」すき間の多い不破の關屋はこの頃の、  
ひま多き不破の關屋はこの程の、

時雨も月もごんなに洩れ入ることであらう。  
時雨もつきもいかにもるらむ。

【参考】

「人住まぬ不破の關屋の板庇」の一首の意。「住む人もない不破の關の關守の番小屋の板ぶきの庇も荒れてしまつた後は、ただ秋風ばかりが吹いて淋しい。」

【批評摘要】

本節は、文もただ歌枕に過ぎない。そして歌もむしろ「人住まぬ」の本歌を、其まゝ記しておいた方が思はれるほどである。

【若い讀者への希望】

(一) 本節などは、讀んで興がありません。なせてせうか。即ち、文はただ歌枕に過ぎず、歌は本歌を繰りかへしたのみで、少しも清新さいふ所がありません。

X「今もかはらざりけり」昔、後京極攝政藤原良經が「人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はただ秋の風」と詠まれたやうに、今も其昔に變らず荒れてゐる。  
【ひま多き】すき間の多い。板庇の破れたすき間多きをいふ。  
【いかにもるらむ】ごんなに。「時雨も月も」洩ることであらう。「時雨もつきも」關守の「守る」をかけた。

9、不  
破の關  
から、  
雨にな  
やまさ  
れて、  
笠縫の  
里にと  
まつた  
ことを  
述べて  
一首を  
添へた

9、關よりかきくらしつる雨

んからなのです。同じ調子の文のやうであります。前節とは全く別ものです。これは大に注意を要する所でありませう。  
(二) 重要語句としては、「關屋・ひま」の二語。

不破の關を通る頃から暗くなつて降り来た雨は、時雨とは思はれぬ  
關(かき)よりかきくらしつる雨、時雨に過

ほご降り續いたれば、道もひごくわくなくなつて、  
ぎて降りくらしせば、道もいと悪しくて、

豫定がはづれて、笠縫の驛(かき)いふ所に、  
心より外(か)に、笠縫(かき)のうまやといふ所

に、暮れ果てねどとどまる。  
まだ日が暮れてしまつたのではないがさまることにした。

旅人は皆簑(か)うち拂ふほごひごく降る夕ぐれ  
旅人は簑(か)うち拂ふ夕ぐれの

雨のために自分も笠に縁ある簑縫の里に宿をかりる。  
雨に宿(か)かる笠縫のさと。

【關】不破の關。

【かきくらしつる雨】暗く降つた雨。

【かき】は接頭語。

【時雨に過ぎて】時雨は降つたり止んだりする小雨であるが、それよりひごくなくなつて。

【降りくらす】終日降る。

【心より外に】思ひの外に。豫定さはずが、つて。

【笠縫】美濃國安八郡。大垣に近い。

【うまや】驛。宿場。昔、街道の往來の便をよかつて、適當な距離の所に、馬や人夫を置いた所。

【簑うち拂ふ夕ぐれの雨】簑をうち拂つて雨の雫をより落すほご甚だしく降る夕ぐれの雨。簑、雨笠、皆縁語。



【批評摘要】

たださへ雨中の出ありきはよいものでない。まして都の老婦人のなれぬ旅においては、さこそ思はれる。然しかうして歌に見れば、ちよつと面白い。

【若い讀者への希望】

(一) 不平は男々しい。愚痴は女々しい。そしてこれほど精神や身體を害ふものはありません。然し殆んど誰しも愚痴を禁ずることは出来ません。逆境に逢つてヒステリーになる人が多いのです。ここに一つ、愚痴もいはず、この苦境から脱する唯一の法があります。それは、其愚痴や悲しみを歌や文章としてあらはすのです。かうしてあらはせば、身も心も軽くさらつとしてしまひます。大鏡といふ本には次のやうに書いてあります。「おぼしきこ言はぬは、げにぞ腹ふくる心地しけり。かかればこそ、昔の人は、言はまほしくなれば、穴掘りては言ひ入れけぬ。」作者阿佛尼も「旅人は」の一首を詠んで、この雨の旅のうさをすつかり忘れてしまつたのでせう。

(二) 重要語句としては、「心より外に、うまや」の二語。

10、十九日、またここを出でて行く

十九日、また笠縫の驛を出發して行く。夜通し

十九日、またここを出でて行く。夜もすがら降りける雨に、平野のいかやいふ

ほど、道いとわるくて、人通ふべくも

あらねば、水田の面をぞさながらわ

たり行く。明くるままに、雨は降らずな

りぬ。

【批評摘要】

10【夜もすがら】夜通しに。終夜。  
【雨に】に「は、のために、の意。  
【平野】美濃國安八郡。  
【かやいふは】「かや」は、疑問の「か」に感嘆の「や」の添はつたもの。「は」は、あたり。邊。  
【通ふべくも】通はれさうにも。  
【へく】は、可能の「べし」の變化  
【つら(面)】表面。水面。  
【さながら】そのままに、(すべて、丁度、の意の時もある。)  
【明くるままに】夜があけるに随つて。  
【なりぬ】なつてしまつた。「ぬ」は、きはだす知らぬうちにさうなつてしまつた意。

10、夜  
來の雨  
で、平  
野さい  
ふ邊は  
水田  
を渡つ  
て行く  
始末。  
さ前節  
に次い  
で雨を  
述べた



本段になつてから、五六頁の「十七日の夜は」の一節と本節とに歌がない。本節の文はさほどではないが、歌がないといふところが變化としてよい。又「水田の面をさながらわたり行く」は實況を思はせるよい一句である。

【若い讀者への希望】

- (一) いかによいものでも、多過ぎるとか、何の變化もなく続けられるとかすると、平凡になつてしまひます。又文章もあらゆる方面に於て變化を興へることは必要であります。本節の文章などは、これ一つだけ見ると、何でもないやうですが、讀み續けて來ると、本節に歌のないので、何かよい感じがします。
- (二) 重要語句としては、「夜もすがら・かや・通ふべくも・つら・さながら・なりぬ」の六語。

11、晝つ方過ぎ行く道に

11、結ぶの神さま聞いて一首詠んで

晝頃のこゝに、  
過ぎ行く道の傍に、  
晝つかた、過ぎ行く道に、  
目に立つ社  
人に聞けば、  
人に問へば、  
結ぶの神と聞ゆる

11【晝つかた】晝頃。「つ」は「の」の意で、「天の風」「下つ方」の「つ」に同じ。  
【目に立つ】目につく。  
【結ぶの神】美濃國安八郡結村の結

願ふ意を述べた。

の歌を詠んだ、  
といへば、

ただ約束通り守つて下さい契を結ぶさいふ神様であるならば、  
守れただ契(ちぎ)結ぶの神ならば、  
いつまでも解けない恨のために私を迷はさないで。  
解けぬ恨(みら)にわれ迷はさて。

【批評摘要】

思ひ込んだ一念で、無理はないさはいひながら、機會ある毎に、執念(シツネ)く、わが願のみ申し立てるのは、少々いやみを感じざるを得ない。熱心さいはば熱心、婦人故さいはばそれまでのこと。  
然し「守れただ」は随分強みがあらはされてゐる。よい一句である。

【若い讀者への希望】

- (一) 詩や歌になると盛に語句が轉倒せられます。それは限られた語句のうちで意味の深淺強弱を表はされなければならないからなのです。  
この歌なども、思想の順序に直したならば、「契結ぶの神ならば解けぬ恨にわ

大明神。

【聞ゆる】いふ、の敬語。申す。  
【守れただ】ただわれを守れ。  
【契結ぶの神】契は約束。契を結ぶの「結ぶ」を結の神の「結」にかけた。  
【迷はさて】迷はさないで。これは「守れただ」に、續く句。



れ迷はさでただ守れ」となつて、何の力もなく、従つて何の興も涌きません。原文の味も勢もない死骸同然です。だから、詩や歌を解しても譯しても、出来る限り原文の語句の位置を轉倒しないやうにしなければいけません。欲をいへば、詩歌は譯さずには味はひたいのですから、どこまでも假に譯して見るだけであるを、考へなければなりません。

(二) 重要語句としては、「晝つかた・間ゆ」の二語。

12、洲俣とかやいふ河には

12、洲俣川の浮橋と其川の片淵とについて、二首の感想を述べてお

洲俣さかいふ川には、  
洲俣すのたとかやいふ河には、舟を並べて  
まさきのかづらでつくつた綱であらうか、それで結び止め、  
まさきの綱なにやあらむ、かけとどめ  
た浮橋がある。  
甚だ危険ではあるがわたつた。  
たる浮橋はしあり。いと危あやけれどわたる  
この川は、堤に近い方は大層深くて、  
この川、堤つのかたはいと深くて、片

12【洲俣】美濃と尾張との國境を流れる川。  
【まさきの綱】真橋のかづらでつくつた綱。「まさきのかづら」は常磐なるつる草の稱。  
【浮橋】船橋とも云ふ、船を並べ結んで橋の代りにしたるもの。  
【堤のかた】堤によつた方。  
【片ふちの】片かたの深いふちのやうな。

る。

れでないか一方は浅いから「そこで次の歌を詠んだ。」  
方かたは浅ければ、

片方の淵のやうな深い心は持つて居りながら、  
片ふちの深き心はありながら、

誰も人目を憚るためにさぞや思ふやうにならぬであらう。  
人目づつみにさぞせかるらむ。

この世の世わたりだと思つて見るとまあなさけない氣がする、  
かりの世の往來ゆきと見るもはかなしや、

浮き舟を連れて浮橋を渡つて行くそれを。  
身をうき舟のうき橋にして。

【はかなし】たのみにならない。なさけない。  
【や】感動の意をいふ助詞。  
【身をうき舟】「うき舟」は、水面に浮んでる舟。これに身を憂きの「憂き」をかけていた。

【参考】

【人目づつみにさぞせかるらむ】さぞさいふ以上、他人のこゝを推量していつたのである。然し自分も其一人である意で、實は後者の方が重いのであらう。



【批評摘要】

いかに巧まはいへ、かう縁語・懸詞を並べられるを、それだけでもいやになる。然し、あれだけの責任ある身で、遠く獨り旅にある婦人の身としては、見るもの聞くものにつけ、かうした淋しい感じを起すのは、むしろ當然のこゝであらう。そしてこれらの縁語・懸詞は作者としてはむしろ自然で、口をついて出て来るのであらう。

【若い讀者への希望】

- (一) さきに、詩や歌は、語句が轉置してあるが、出來得る限り其まに譯したいといひました。然し、この「かりの世の」の一首などは、それでは、ちよつとわかりにくい歌であります。
- (二) 重要語句としては、「まさきのつな・浮橋・かたふち・人目づつみ・せかる・かりの世・はかなし・や」の八語。

I3、また一の宮といふ社を

また一(5)の宮といふ社を通り過ぎるをいつて、  
また一(5)の宮といふ社(6)を過ぐとて、

I3【一の宮といふ社】その國の第一の宮といふ意で、尾張一宮町に

I3、一の宮の

一を聞  
いて、  
でば、  
唯一無  
二の佛  
法を守  
られる  
であら  
う。こ  
の一首  
を詠ん  
だ。

一の宮といふ名までなつかしい(恐らく)二つとなく、  
一の宮名さへなつかし二つなく、

無論三つもない佛法を御守護なさるのであらう。  
三つななき法(5)を守るなるべし。

【参考】

【二つなく三つななき法】法華經方便品の次の句によつたであらう。  
「十方世界ソクニ中尙無ニ三乘ソクニ。何況有ニ三ソクニ。」又「十方佛土ソクニ中唯有ニ一乘法ソクニ。無ニ二方無ニ三ソクニ。」

【批評摘要】

この歌、一の宮について、二、三と詠み込んだだけなのであらう。然し、作者の境遇からいへば、眞に心の奥底から、「一」といふ詞に對して、自然に湧き出て來ると見るのが、本當かも知れない。たしかにそれであらう。

【若い讀者への希望】

(一) 餘程巧なものでも、こんな風に數字などを詠み込むと、何さなく縛ばられ  
たやうな感じがします。若い者はかういふ眞似はしないで、束縛を受けず、

ある眞墨田神社をいふ。

【さへ】まで。あるが上に更に添は  
る意の語。

X【二つなく三つななき法】ただ一つ  
の佛法をいふ。

【べし】であらう。推量の「べし」。



出来るだけ自由に多くの思想感情を生き生きと豚みだすやうに心掛ければ  
なりません。

(七二)

14、二十日尾張國下戸といふうまやを

二十日には、尾張の國の下戸といふ宿場を通り過ぎた。  
二十日(はつ)、尾張の國下戸(おろ)といふうま

やを行く。よきぬ道なれば、熱田の宮へ

まありて、硯取り出でて、書きつけてた

てまつる歌、

祈るぞよ我が思ふこと鳴海潟(なるみ)

かたひく潮(しほ)も神のまに(ま)く。

14【下戸】尾張國中島郡にある。今  
下津(おろ)村といふ。

【うまやを行く】宿場を通り行く。  
【よきぬ道】「ほかへ」よけない道。

【熱田の宮】熱田神宮、熱田は今名  
古屋市南區に入る。

【硯取り出でて】「硯」は、旅行中だか  
ら、所謂ヤタテのことであらう

【ぞよ】指し示す意の助詞「ぞ」に、  
感動詞の「よ」の添はつたもの。

【鳴海潟】熱田郡鳴海町の附近海の稱  
かたひく潮「干潟をあらはして引

14、熱  
田神宮  
に参詣  
して、  
四首の  
歌を奉  
つて、  
自分の  
願をの  
べた。

この鳴海潟邊の熱田明神が歌道を疎せられないならば、  
鳴海潟和歌の浦風へだてずば、

神様も御同情なされてわたしの願をお受け下さるでせう。  
同じ心に神も受くらむ。

満ちて来る潮のやうにこの鳴海潟を指して来たのは、  
満つ潮(み)のさしてぞ來つる鳴海潟、

神やあはれとみるめたづねて。  
神様も御同情を日あてとしたからなのです。

雨を降らすも風を止ますも神様の御自由でせうから、  
雨風も神の心に任(ま)すらむ、

わが行くささきの障(さ)り、あらすな。  
私の前途將來に故障のないやうに御願いたします。

の、見る、をかけた。即ちこれは、満つ潮がみるめといふ海草をたづねて、鳴海  
潟に指して来る意。裏面に、神様が自分をあはれと思つて下さるか、自分も鳴  
海潟を指して来たの意がある。

【雨風も神の心に任(ま)す】雨を降らすも止ますも、風を吹かすも止ますも神の御心の  
ままになる。

【わがゆくささきの障(さ)り】わが旅の前途に、身の將來をかけた。  
【あらすな】「す」は、使役の助動詞。「な」は禁止の意の助詞。

(七三)



【批評摘要】

旅立ちしてからもう五日目、故郷を離れるに従つて、益々將來を思ふ情の切なるものが伺はれる。女性として、しかもかかる境遇にある身としては、無理ならぬ點はあるが、今少し、ゆつたりしてほしいと思ふ。四首とも例の調子で、別にさりたてていふべきことはない。然し、相當熱のあらはれてる點がいい。

【若い讀者への希望】

(一) 單に熱田神宮には限りません、いつれの神社の參詣人を見ても、老婦人の顔は、皆か、したもののやうに思はれます。神前にひれふす作者が、目に見えるやうです。かう作者に同情して見ると、四首の歌は、いづれも相當に思はれます。神の自在力を信じて、眞剣に祈るところ、實に美しい心です。又一面から見ると「でもあまりに」といふやうに思はれて、いやな氣にもなります。どうかこのやうに、他人のためにもと思はれます。かういふわけですから、文章でも歌でも、とにかく作者の境遇を知り作者の立場になつて見ることは随分必要なことで御座います。

(二) 重要語句としては、「ぞよ・まにまに・みるめ」の三語。

15、鳴海の潟を過ぐるに

鳴海潟を通るに、  
鳴海の潟(か)を過ぐるに、潮干(ひ)のほど  
なれば、さはりなく干潟(かた)を行く。折し

も濱千鳥(はまぢり)いと多くさきだちて行くも  
、しるべ顔なる心地(こころ)して、  
濱千鳥鳴きてぞさそふ世の中に、

あととめむとは思はざりしを。

14、鳴海の千潟を通る濱千鳥を見ても、又都鳥さいふ鳥もゐるの故郷なつかしき詠んだ

15【潮干のほど】潮が干てゐる時。

【さはりなく】故障なく。無事に

【干潟】潮の干てゐるかた。【かた】

は、潮の満ち干て、かくれたりあらはれたりする遠淺の海岸。

【折しも】折も折。丁度其時。

【しるべ顔】道案内をしてゐる様子。

【心地して】氣がして。思はれて。

【鳴きてぞさそふ】鳴きながらさそふ。鳴きながら道案内をする。

【あそこむ】この世に生きながらへる。千鳥が足跡をさめる意にかけた。

【思はざりしを】思はなかつたのに。「を」は、のに、の意。



墨田川の邊にだけ居るものやうに聞いたが、  
墨田川(すみたがは)のわたりにこそありと聞きし

都鳥といふ鳥の、

口ばしと脚の赤

かど、都鳥(みやこどり)といふ鳥の、はしとあし

いのば、この鳴海潟にもあるわい。

と赤きは、この浦にもありけり。

こと問はむ嘴(くちばし)と足とはあかさざりし、

わが住む都の方の都鳥かど(名さへなつかしいから)  
わが住むかたの都鳥かと。

【この浦「浦」は、海や湖の曲つて陸地に入りこんだ所。ここでは、鳴海潟をいふ。

【ありけり】この「けり」は詠嘆の意をあらはす。

【こと問はむ】尋ねよう。聞かう。

【あかさざりし】あかに、嘴とあしとの赤きをいひかけ、「飽かず住む」に續けた。

【わが住むかたの都鳥】わが住むかたの都と、都鳥とをかけた。

【参考】

【墨田川のわたり云々】本節は、伊勢物語の次の文によつて書いたものだ。

「武藏國と下總國との中に、いと大きな川あり。それを墨田川といふ。……白き鳥のはし  
さあしと赤き、しぎの大ききなる、水の上にあそびつつ、いをなくふ。京には見えぬ鳥  
なれば、皆見知らず。渡守に問ひければ、『これなむ都鳥』といふを聞きて、『名にし負は  
ば、いざこころはむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやぞ。』……。」

【批評摘要】

干潟を傳ひ行くさま面白く讀まれる。さぞ都人には、面白かつたらう。歌は、何の面白  
味もない。又後半は、古人の眞似をしただけで、何の興味もおこらない。

【若い讀者への希望】

(一) 古人の眞似をするのは、よほどすぐれた筆でないさ、よく思はれません。  
自らは相當に思はれるかは知りませんが、若い人たちは氣をつけべきことで  
あります。さうがさういって別に新しきを見てらふのも見苦しいことです。要す  
るに、自分の見聞、自分の心のままをうつすやうにとめるのが「ばんよい  
のでありませう。」



(二) 重要語句としては、「潮干のほご・さほりなく・干潟・折しも・しるべ顔・思はざりしな・わたり・こそ・都鳥・はし・浦・こゝ問はむ」の十二語。

16、二村山を越えて行くに

16、野山は遠く、行きはてぬうち暮れに暮れつた。

二村山を越えて行つたが、  
二村山(ふたむらやま)を越えて行くに、山も野も  
野邊もひろくて、つひ日も暮れてしまった。  
いと遠くて、日も暮れはてぬ。  
はるばる二村山を通り過ぎて行つても、  
はるばると二村山を過ぎ行きて、  
なほ末たどる野邊のゆふやみ。

16【二村山】尾張國愛知郡沓掛<sup>ツツカケ</sup>の邊。  
【山も野もいと遠くて】山は遠い所に見え、野は廣い。  
【なほ】まだ。やはり、其上、の意の時もある。  
【末たどる】野末を迷ひ行く。  
【野邊】野のあたり。  
【ゆふやみ】夕暮のうす暗い時。よひやみさもいつて、宵のまだ月の上らぬ間のやみ。

【批評摘要】

讀んで本節に來た時、長い熱いトンネルでも、通りぬけたやうな氣がする。窓を明けて眺めるさ、野も山も、遠くてはてしがたい。そこを悠々さ、夕やみをたどる一人がある。何

さ心持のよい繪ではないか、かうした氣分を與へる文も歌も、本書に於てはこれがはじめである。

【若い讀者への希望】

(一) 本節に於ては、飾りのない、素朴な、單純な、文や歌の、いかに美ばしいものかといふことを、味はつていただきたい。作つたやうな、こらした點の見えるやうな文は、見苦しく、いやな感じを、與へられるものだといふことを、知つていただきたい。自然に動いた感じ自然に走つた筆ほどたふとい美しいものはありません。

(二) 重要語句としては、「なほ・末たどる・野邊・夕やみ」の四語。

18、八橋に止まらむといふ

17、夕暮の八橋を叙した。

八橋に泊らうといふことになつた。  
八橋(やっし)に止(とど)らむといふ。暗きに橋も  
見えずなりぬ。

17【八橋】三河國碧海郡知立町<sup>チリフ</sup>の東の大字の名。  
【暗きに】くらいために。「に」は、のたために、によつて、の意。



蜘蛛手に流れる水の上に危くかつた八橋を、  
ささがにの蜘蛛手でも危き八橋を、  
夕暮にかけて渡つたがよくも渡つたものだ危いのに。  
夕暮にかけて渡りぬるかな。

【ささがにの】蜘蛛にかかると枕詞「ささがに」を蜘蛛の異名とする時もある。  
×【蜘蛛手危き八橋】八方へ出てゐる蜘蛛の足のやうに流れてゐる水の上に、危げにかかつた八橋。

【参考】

【蜘蛛手危き八橋】これは次の伊勢物語の文によつて書いたのである。

「三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水行く川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。」

又橋の桁・梁を受けるために材木を交叉したものを蜘蛛手といふ。こゝも、この意に取る説もある。

【批評摘要】

本節は文から歌への無理のない自然のうつりがたがよい。  
前節に次いであつさりしてゐる。今少し、こんなにして進みたい気がする。

【若い讀者への希望】

- (一) 折々、伊勢物語の文によつて書かれものが出て來ますが、歌人である作者の文としては、自然の勢であること知らなければなりません。伊勢物語は、物語とはいへど、詞書の少し長い、一つの歌集で御座います。昔から歌を學ぶ者の、どうしても、讀まればならぬ本の一つであつたのです。だから、伊勢物語に關係あるといふことが、昔の人には、云ひ知らぬ嬉しさといはうか、誇といはうか、まあそんなものがあつたので御座いませう。
- (二) 重要語句としては、「ささがにの蜘蛛手」の二語。

18、廿一日八橋を出でて行くに

18、廿一日は、  
廣野を  
過ぎて  
紅葉

廿一日には、八橋を立ち出でて行つたが、  
廿一日、八橋を出でて行くに、いとよ  
く晴れたり。山遠き原野(は)を分け行く。

18【山遠き原野】山が遠い所に見えてる原野。  
【分け行く】原野など行くには草を分け行く故、たまへ草は分けなくとも原野に行くにいふ。



の宮地  
山に向  
ふ。こ  
こで昔  
の旅も  
思ひ出  
した。  
山の麓  
に床し  
い家が  
あつた  
。いか  
なる人  
の住家  
であら  
う。

晝頃になつては、紅葉の大層多い山に向つて行く。  
晝つ方になりて、紅葉いと多き山に向  
ひて行く。風にも散らされない所々(の紅葉は)、朽葉色  
にかはつてしまつた。  
〔其中には〕常緑樹なども交  
つてゐるので、丁度青地の錦を見るやうである。  
ち交りて、青地の錦を見る心地す。  
聞いて見ると、ここは宮地山だといふ。  
人に問へば、宮地山(みやぢやま)といふ。  
よくもまあしぐれたものだ幾度も幾度も染めかへた後はまた、  
しぐれけり染むる千入(せんい)の果はまた、  
紅葉の錦が朽葉色にかはつてしまふまで。  
紅葉の錦いろかへるまで。  
この宮地山までは昔も見た心地がするのに、  
この山までは昔見し心地するに、  
頃さへ  
までは同じだから、  
かはらねば、

〔晝つ方〕この「つ」は、の、の意。即ち「晝の方」は晝頃。  
〔紅葉〕もみぢ葉の畧。  
〔風につれなき所々〕風のためにも平気で散らずに居る所々(の紅葉)。「つれなし」は、平氣、氣強い意。  
〔朽葉に〕くちげ色に。黄色い、赤黒い色に。  
〔てけり〕過去完了形。てしまつてゐた。  
〔常緑木〕常緑樹とも書く、年中葉の色を變へず落葉せぬ木。  
〔青地の錦〕青い地色の中にいろいろの模様のある錦。  
〔宮地山〕三河國寶飯那にある山。  
〔しぐれけり〕「しぐる」は動詞。「けり」は、詠嘆の意の助動詞。  
〔千入〕「しほ」は色を染める時、浸す度数をいふ語故、「千入」といへば幾度も染めて色の濃いこととなる。  
〔果は〕しまひには。最後には。  
〔色かへる〕色をかきめて變はる。  
〔この山〕宮地山。

まで待つてたでせうよ昔も一度越えた宮地山は、  
待ちけりな昔も越えし宮地山、  
同じ時雨のめぐりあふ世を。  
山の麓に、竹のある所に、萱屋(あや)の  
一つある、  
一つ見ゆる、いかにして、何のたよりに  
かくて住むらむと見ゆ。  
主人はごういふ人であらう山の麓に家を構えてゐる、  
主(しゆ)や誰(たれ)山の裾野(すそ)に宿占めて、  
あたり淋しき竹の一むら。  
周囲は淋しい竹藪(たけくさ)でまあゆかしい(ことよ)。

〔何のたよりに〕何をたよりにして。何をたのしみに。  
〔かくて住むらむ〕かくて「は、かくしてで、この淋しい生活をいふ。  
〔宿占めて〕住家を定めて住むをいふ。  
〔竹の一むら〕一むらの竹藪。「一むら」はむらがつてるものが一つ。

〔昔見し心地するに〕これは次のことを指していつたのである。「思ふこそ侍る比、父平度繁朝臣遠江の國にまかれりけるに、心ならず伴ひて、鳴海の浦を過ぐると、よみ侍りける。」さて、我いかに鳴海の浦なれば、思ふ方には遠ざかるらむ(續古文集)  
〔頃さへ變られば〕今と、昔父と共に通つた時と、同じ時節だから「待ちけりな」宮地山が自分を待たであらうよ。「けり」は、詠嘆の助動詞。「な」は、感嘆詞。  
〔同じ時雨のめぐりあふ〕同じ時雨の降る期節をめぐりあふことこそ、作者と山とめぐりあふことこそをいふ。  
〔萱屋〕かやぶきの粗末な家。



【批評摘要】

別にここがさういふ所もないが、何さなく、ゆつたりした感じのする文章である。「山の裾野以下」文も一層ゆかしく思はれる。

【若い讀者への希望】

(一) ここで「晝の方」染めかへてけり」の「つ」てけり」などは、古い用ゐ方で、今では全くつかひませぬ。それから「青地の錦を見る心地す」といふやうな句は、若い人々には、何の感じもしないかもしれませぬ。「錦」といふものの、最も美しい時代でなければ、ほんたうの感じは起らないのです。だから古い文章を味ふには、その時代を知るが必要であります。

(二) 重要語句としては、「わけ行く・晝の方・紅葉・つれなし・朽葉に・てけり・常磐木・青地の錦・千入・待ちけりな・竹の一むら」の十一語。

19、日は入りはてて

19、暗く  
なつて、  
度津に泊  
つた。

日が暮れてしまつて、

其上暗くてあたりの物も何が何か

日は入りはてて、なほ物のあやめもわ

區別もつかぬ時分に、

度津さかいふ所に泊つてしまつた。

かぬほどに、わたうどとかやいふ所にと

どまりぬ。

19【なほ】その上。一層。

【あやめ】區別。すぢめ。

【わかぬ】わからぬ。はつきりしない。

【ほご】頃。時分。

【わたうど】度津で、三河國寶飯郡にある。國府の東南で、海濱に沿ひ、吉田川の河口に至る地と。

【批評摘要】

短くて要領を得てゐる。歌のないのもいい。

【若い讀者への希望】

(一) また申します。變化といふものはよいものです。前節の十八行、歌三首の後に、二行半にも足らぬ、しかも歌もない一節に接した心持は、またよいものです。それに文としても、この作者としては、割合さつぱりしてゐます。  
(二) 重要語句としては、「あやめ・わかぬ」の二語。



20、二  
十二日

は、有  
明の月  
をたよ  
りに旅  
立つた  
が、今  
朝はい  
つより  
も悲し  
いとい  
つて、  
二首を  
添へた

二十二日のあけがた、

また夜も深く、有明の

二十二日のあかつき、

夜ぶかく、有明

月影をたよりに出でて行く。

〔今朝は〕いつよりも悲し

(あり)の影(か)に出でて行く。

いつよりも物が

いやうな気がする。

なし。

もう住みわいて京都を出て来たものの、

住みわびて月の都を出てしかど、

ここでも有明の月が悲しいこの身のうさが離れないで。

うき身離れぬ有明のかけ。

さ思ひつづける。

〔有明の月まで

とぞ思ひつづくる。供なる人、有明の月

笠をかぶつた。』

といふのを聞いて、

さへ笠きたり。』といふを聞きて、

旅人と同じい旅の道に出たのであらうか、

旅人の同じ道にや出てつらむ、

20「夜ぶかく」まだ夜が深く、明け

ぬうちに。

〔有明の影に〕有明の月影によつて

。「有明の月」は、まだ月が空に

ありながら夜のあける頃の月。

〔いつよりは物がなし〕廿日過の月

であるから、だんだん細くて悲

しげに見えるであらう。

〔住みわびて〕住むがいやになつて

。「わび」は、思ひわづらふ意。

〔月の都〕月の中にあると思はれた

宮殿、即ち月宮殿。ここは京都

を指す。京都はよく月の都にた

さへられる。

〔うき身〕ういつらいこの身。

〔供なる人〕供である人。供びと。

〔笠きたり〕笠をかぶつた。

〔いふを〕いふ(の)を。

〔旅人の同じ道〕旅人と同じ道。

〔つらむ〕たであらう。未来完了の

助動詞。

この有明の月もかさをかぶつてゐる。

笠打ち着たる有明の月。

〔笠打ち着たる〕「打ち」は、調子を

整へるための接頭語。

【批評摘要】

十七日の朝は、ゆかしく残れる月に守山を出ていつた。今日は、もう二十二日、何さな  
くあはれを誘ふ月影であらう。「夜深く、有明の月影に出でて行く。」「いつよりも物がな  
し。」「美しい、上品な、簡潔な、そしてしぶい、いくら讀んでも、あかない句だ。  
二首、取りたてて、いふべき」とはない。

【若い讀者への希望】

- (一) 望月さか、十六夜の月とか位なら、さほごでもありませんが、廿日過ぎ位  
の月、有明の月なごになるさ、いろくこ、理窟を考へれば頭に浮びません  
。これでは、文章が十分には味はれません。若い讀者に於かれては、一層この  
感じが深いと思はれます。つまらないやうであるが、誰でも、自然の詩であ  
る月をよく觀察して置く必要があります。
- (二) 重要語句としては、「有明の月に。住みわびて。わぶ。月の都。うき身。つら  
む」の六語。



21、高師の山も越えつ

21、高師の山、海の見えろあたりは、高師(たか)の山も越えつ。海見ゆるほど、大層景色がよい。濱風が吹きあれて、松吹く風の音もいと面白し。浦風(うら)荒れて、松のひびき物すごく、浪も非常に高い。わがためや浪もたかしの濱ならむ、袖(そ)の湊(みな)の浪は休まで。白砂の上に黒い鵜が群れてるがそれは、黒い鳥の群れてるがそれは、白砂の上に黒い鵜が群れてる「景色のよさ」、白濱(はら)に墨の色なる鳥つどり、

もう高師の山も越えてしまった。海の見えろあたりは、高師(たか)の山も越えつ。海見ゆるほど、大層景色がよい。濱風が吹きあれて、松吹く風の音もいと面白し。浦風(うら)荒れて、松のひびき物すごく、浪も非常に高い。わがためや浪もたかしの濱ならむ、袖(そ)の湊(みな)の浪は休まで。

わたしの涙のせいでこの高師の濱の浪は高いのであらうか、わがためや浪もたかしの濱ならむ、

この袖には始終涙の浪がたつてますから。袖(そ)の湊(みな)の浪は休まで。

洲崎の大層白い所に、黒い鳥の群れてるがそれは、いと白き洲崎(すき)に、黒き鳥の群れぬたる

は、鵜(う)といふ鳥なりけり。

白砂の上に黒い鵜が群れてる「景色のよさ」、白濱(はら)に墨の色なる鳥つどり、

21【高師の山】遠江三河との間の山。東に濱名湖、南に太平洋、風景頗るよい。この一帯を今高師原といふ。

【ほご】あたり。邊。

【浦風】浦を吹く風。

【松のひびき】松風の音。

【わがためや】わたしのせいでありませうか。

【浪もたかしの濱】浪の「高い」を高師の濱の「高師」にかけた。

【袖の湊】筑前博多の浦。ここはただ袖のこさを袖の湊といつた、袖にかかる涙の多いの湊の波の多いのになさへて。

【休まで】休まないで。

【白き洲崎】この邊は打ち寄せる浪の爲めに白砂の洲が出来、その時になつたものが洲崎。

【なりけり】「けり」は詠嘆の意の助動詞。

書けるものなら繪に書いて見たいものである。筆も及ばば繪に書きてまし。

【まし】事實を假定する想像をいふ助動詞で、稍願ひ思ふ意を含む。

【鳥つどり】鵜の古名。【筆も及ばば】筆でかくことが出来るならば。

【批評摘要】

本節は、あつきりした實景にふさはしい文章である。短けれども盡してある。けれども「わがためや」の一首は、なくもがなと思はれる。

【若い讀者への希望】

(一) 東海道は白須賀町から新居町と、海岸から湖岸、それが濱名の長橋なるのです。鐵道は、ここを通らず、豊橋市から二川町、鷺津驛、それから、はじめて新居町となります。昔濱名の長橋といつた所に鐵橋がかかつて、中央の辨天島には驛もあつて、海水浴場として随分盛なものであります。やはり昔の地理を知らねばわかりません。

(二) 重要語句としては、「浦風・松のひびき・袖の湊・鳥つどり」の四語。



22、鷗の  
世界  
である  
濱名橋  
からの  
眺めを  
叙して

22、濱名の橋より見渡せば

(九〇)

濱名橋の上から見渡して見ると、鷗（あし）といふ鳥が大層  
濱名（なま）の橋より見渡せば、鷗（あし）といふ  
多くあちこち飛んでゐて、中には水中へ入るものも  
鳥いと多く飛びちがひて、水の底へも入  
る。岩の上にもゐるものもある。

鷗のゐる洲崎の浪のかかつてる岩も人ごころは思はれない、  
鷗（あし）ある洲崎の岩もよそならず、

涙の涙の注ぎかかつて越してゐる袖に見馴れてるから。  
浪のかけ越す袖に見なれて。

【批評摘要】

昔の濱名橋から眺めたところの景色は、かうであつたであらう。海水浴場として有名な  
今の濱名湖口の辨天島も、今より三四十年前は、鳥のねぐらに過ぎなかつたといふ。  
この歌も、なからましかげと思はれる。

【若い讀者への希望】

(一) 若い讀者諸君から見ると、何だ、あの濱名の景を、たつた鷗の世界を見て  
しまつて。と、物足らなく思はれるかも知れません。然し、よくよく考へて  
見ると、さうではないのです。湖水は、たつた一筋の濱名川で海に通じてお  
た淡水湖でした。其橋は長いといつても五十六丈、路傍は、丈なす草でおほ  
はれてゐたのです。人通りは少なく。物思ひに沈んだ老婦人の目からは、こ  
の位が實況でせう。この文は、一は以て昔を知ることが出来ます。當時を知  
ることが必要であります

(二) 重要語句としては、「よそならず」の一語。

23、今宵は引馬の宿といふ所に

23、引  
馬の宿  
にさま  
つて、  
昔を偲  
んだこ  
さを記

今晩は、  
今宵（この）は、引馬（ひま）の宿（しゆく）といふ所にと  
どまる。この所のおほかたの名をば濱松  
とぞいひし。親しといひしばかりの人人

(九一)

23【引馬の宿】今、濱松市といふ。其  
北部に濱名郡曳馬（ひくま）村があ  
る。

【おほかたの名】總名、總稱。「おほ  
かた」は、だいたい。  
【親しといひしばかりの人人】親し  
いといへばいはれる位の人々。  
名ばかりの親しい人々。



した。

なども住む所なり。住み來(三)し人の面影  
人もあらうが以前の面影もいろいろと偲ばれて、また再會した  
(おち)もさまざま思ひ出でられて、又めぐり  
存命の(こころ)、  
あひて見つる命のほども、かへすがへす  
あはれなり。

濱松のかはらぬかけを尋ね來て、

昔見知つた人がぬないので只だ波に昔のこころを尋ねる。  
見し人なみに昔をぞとふ。

その當時お日にかかつた人の子や孫などをお呼していることも  
その世に見し人の子・うまごなど呼び出  
ててあひしらふ。

【批評摘要】

(九二)

【住み來し人の面影】其後すつと此  
の地に住んで來た人の面影。  
【さまざまに思ひ出でられて】「あ  
あであつた、かうであつた」とい  
る思ひ出されて。  
【又めぐりあひて見つる命のほども】  
再びあふこころが出来るやうにな  
がらへて來たこころ。  
【かへすがへす】くれぐれも。實に  
【あはれなり】感じ深い。感慨無量  
である。  
【濱松のかはらぬかけ】濱松の松の  
縁のかはらぬやうにかはらない  
面影。「濱松」は無論地名。  
【なみに】なさに。ない故に。この  
意を波にいひかけた。  
【その世】その當時の世。  
【うまご】孫。  
【あひしらふ】もてなす。款待する

ただ、感慨に満たされてある文章と歌とである。いかなる関係かは知らぬが「子・うま  
ごまで呼び出でてあひしらふ」など實況を寫したに違ひない。ただ實況が伺はれる點だけ  
に命がある。

【若い讀者への希望】

(一) 作者阿佛尼も、都をたち出でて八日目、六十里、これを思つてこの文章  
に接して御覽なさい。ひし／＼と作者の一言一句が身にしみます。少しでも  
、親しみのある人にはあひたいが人情で御座います。そして、昔の人の子や  
孫なりさもこ、呼び集めて昔を語つたのでせう。さう思つて見ると、この文  
章などは、眞面目でよい文章です。筆にまかせて思はぬことまで走らせたの  
と、同じに見たり、批評したりしてはすまないやうな氣がします。どうもこ  
の文章は、さういふ風に見ていただきたいと思ひます。  
(二) 重要語句としては「おほかた・かへすがへす・あはれなり・なみに・うまご  
・あひしらふ」の六語。

(九三)



24、二十三日天龍のわたりといふ舟に

24、た  
だ一艘  
の舟で  
天龍川  
を渡す  
忙しさ  
に、こ  
の世の  
生活を  
さとし  
て、一  
首詠ん  
だので  
ある。

二十三日、天龍の渡さいふ〔所の〕舟に乗つたのに、  
二十三日、天龍のわたりといふ舟に乗

るに、西行(さいぎやう)が昔も思ひ出でられてい

と心細し。二艘(ふたふね)組み合はせたる舟(ふね)ただ一つに

て、多くの人のゆききに、さし歸るひま

もなし。

水の泡(うぶ)のやうな定めない世を渡る人の様を御覽なさい、

早瀬(はやせ)の小舟(こふね)棹(こ)もやすめず。

24【天龍】遠江國、濱名磐田兩郡の境

をなす急流。

【わたり】渡し場。

×【西行が昔】西行法師が、昔こ  
で武士にいちめられたさいふ昔  
話。

【組み合はせたる舟】舟を二艘組み  
合はせたる舟、渡し場などよく  
あること。筏ではない。

【ゆきき】往來。

【さし歸る】往つて返る。往復する。

【水の泡】水の泡のやうな定めな  
い。(次のうき世にかかる)

【うき世に渡る】この世を渡る。生  
活をする。

【早瀬の小舟】早瀬をわたる小舟

。【早瀬】江流の早い瀬。

【棹もやすめず】こぐ棹も休めるひ  
まのないほど忙しい。

【参考】

【西行が昔】西行物語に「遠江國天の中川(天龍川のこゝ)のわたりさいふ所にて、武士の乗  
りたる船に便船をしけるに、人多く乗りて船のあやふくありけむ、あの法師おりよ、おり  
よ。」といひけれども、渡のならひと思つて、聞き入れぬさましてありけるに、情なく、む  
ちをもて、西行をうちけり。血なご頭より出でて、よにあへなく見えけれども、西行少  
しもうらみたるけしきなくして、手を合せ、舟よりおりにけり。」とあることを指す。

【批評摘要】

文章も歌も、何の感じも起らないが、然しこの三急流の一つなる天龍川を渡る小舟を見た  
者には、「水の泡」の一首のやうな感想は浮ぶが當然である。「早瀬の小舟棹もやすめず」、た  
しかに實況を寫したものである。そこにいのちがある。

【若い讀者への希望】

(一) この「組みあはせたる舟」の解には、筏のやうなものだを解した本もありま  
す。なるほどこの文句だけではそれで差支ないやうです。これは、ただ其處の  
渡し場の習慣を知らなければわかりません。だから或種の解釋は、事實習慣



をしらべて見ることは大切であります。天龍川の或渡し場では今もかうした二艘の組み合せたのを使用しておます。  
(二)重要語句としては、「わたりさし歸る」の二語。

25、今宵はとほつあふみの見付の國府

今晩は、遠江の國の見付の里の國府といふ所に泊る。

今宵は、とほつあふみの見付(つひ)の國府

(三)といふ所にとどまる。さとあれて物お

そろし。この近くには水の井(ゐ)あり。

「旅は恐ろしいのに」誰か来て見張をするといふ見付の里(み)聞いたから、

たれか来て見つけの里と聞くからに、いとど旅寝のそらおそろしき。

25×「とほつあふみ」遠江國。

「見付」今、遠江國磐田郡見付町。

郡役所の所在地。

「國府」「こふ」と讀む、「こくふ」の

音便。王朝時代以後國司の役所

のあつた所。

「さと荒れて」里が荒廢して。

「物おそろし」何さなく、おそろし

い。

×「水の井」水の湧く泉のことで、今

いふ井戸のことではあるまいと

思ふ。又「水の江」で、入江のこ

まともいふ。

25、見付の里の、荒れて淋しいさまを叙した。

【見つけの里】「見つけ」は、見はりをする意「誰か来て」から續く。無論見付の地名に、いひかけたのである。

【からに】「から」は、によつての故に、の意の接尾語。

【いとど】「いとど」の略。いよ／＼。殊更。

【そらおそろしき】何さなくおそろしい。

【参考】

【とほつあふみ】「とほつあほうみ」の約。更に約したのが「とほたふみ」(遠江)である。これ

は、「ちかつあほうみ」(略して「あほうみ」、更に約して「あふみ」(近江))に對していふの

である。即ち「ちかつあほうみ」が、琵琶湖で、それが國名となつた。京都に近いからだ

。「とほつあほうみ」は濱名湖で、京都から遠い故か、いふ。それが國名となつたのだ。

【水の井】一本、「里」あれて、ものおそろし。かたはらに水の江あり。「水の江」は、今の浦と

いふ入江を指したものと解する。「水の井」は八幡宮の後に、神水の湧く池、即ち泉、即ち

「井」はあつたが、こゝに書いたものは、今の浦といふ大きな昔の海の入江を指したものと

解するがよからう。又、「國府」は、舊き國府は、今の八幡宮の社地がその跡に當り、新し

き國府は、今の浦の東南、高臺の端、城之崎(キノサキ)に當る、それである。(見付高女の古田氏調

査の一部、松下氏も賛す)



【若い讀者への希望】

(一) 参考欄にもあげてある通り、國名さほたふみ(遠江)・あふみ(近江)などもかうして出來たのです。かういふ風に、國名や地名は歴史を物語るもので御座います。注意して見るに利益もあり、且つなか／＼興味深いものです。

(二) 重要語句としては、「さほつあふみ・國府・物おそろし・からに・そらおそろし」の五語。

26、二十四日晝になりて

26、晝頃、紅葉の小山を越え、麓の菊川の音もすこ

二十四日、晝頃になりて、小夜の中山を越えた。  
 二十四日、晝になりて、小夜(や)の中山(なか)越ゆ。このままとかやいふ社(や)のほ紅葉が真さかりで景色がよい。  
 ど、紅葉いとさかりに面白し。山陰(やまかげ)に

26【さやの中山】「小夜」は、さよ、さよむ。遠江國小笠・榛原二郡の境をなす坂路。  
 【このままと】「仕事」と書く。小笠郡にある。今、養田八幡社といふ。  
 【社(や)のほ】社の近邊。  
 【紅葉いとさかりに面白し】風も吹いて來ない。

に泊つた。未明に起きて見ると、月が出てゐる。川音もすこ

かげで、嵐も吹いて來ないらしい。次第に深く分け入れれば、て、嵐も及ばぬなめり。深く入るままに、をちこちの峯つづき、こと山に似ず、心細い所が捨てがたく面白い。「中山の」麓の里に菊川といふ所心細くあはれなり。麓の里に菊川(がは)といふ所にとどまる。  
 一日中山を越え麓の里に夕闇傾着いたがそこへ、越え暮らす麓の里の夕やみに、松吹く風が吹いて來る小夜の中山から、松風(まつかぜ)おくる小夜の中山。  
 明け方に起き出でて見るに、月も出てしまつてゐる。曉(あけ)起きて見れば、月も出てにけり。  
 「私が今日」雲かかる小夜の中山を越えてしまつたよ、雲かかる小夜の中山越えぬとは、都の人に告げて安心させてくれ有明の月よ。  
 都につげよ有明(あり)の月。

【なめり】「なるめり」の畧。であるらしい。  
 【ままと】に従つて。  
 【なちこち】「遠近」とあてる。あちらこちら。「こちかしこ」。  
 【こと山に似ず】他の山とはちがつて。  
 【菊川】榛原郡金谷町の西の大字。昔は東海道(東海道)の宿驛、小夜の中山の麓、菊川といふ川の西岸。  
 【越え暮らす】山を越えて、途中で日がくれる。  
 【夕やみ】宵の間に、まだ月も出ず暗いこと。  
 【にけり】過去完了形の助動詞。てしまつた。  
 【雲かかる】雲がかかるほど高い。  
 【越えぬと】「ぬ」は、現在完了の助動詞。  
 【都に告げよ】都の人に告げよ。



菊川の流の音が、大層物すごく聞える。  
川音(かわおと)いとすごし。

渡らうなんて、どうして思ひがけませうか東海道に、  
わたらむと思ひやかけし東路(あづまぢ)に、  
あるさいふことだけは聞いたその菊川を。  
ありとばかりはきく川の水。

【川音】川の流れる音。「川」は菊川。  
【思ひやかけし】思ひがけようと思はなかつた。「や」は反語。  
【東路】東海道。  
【ありとばかり】あるさいふことだけ。  
【きく川の水】「ありと」「聞く」を菊川の「菊」にかけた。

【批評摘要】

文章は、どこことなく角がされてゐない。第一段の文章などを思ふさまよほど見劣りがする。「越え暮らす」の一首は、まづ宿へ着いて、來し方を見かへつての實感で面白い。「雲かかる」の一首、これも有明の月に、かうした思を寄せたところ、自然の心の動きであつてよい歌である。「わたらむと」の一首、とりたてていふほどのものでもない。

【若い讀者への希望】

- (一) 「社」のほご、紅葉いささかりに面白し。山陰にて、嵐も及ばぬなめり。「こ」の文など、前後の二文を各口語に譯しただけで、二文の關係を考へずに平氣でゐるやうな方が折々あります。それでは本當に面白くないのです。これは「社の近邊は紅葉が盛りできれいだ。これから察して見ると、この紅葉は、山のかげになつてゐるから、嵐も吹いて來ないらしい。それだから紅葉が、こんなきれいなのだ」といふやうに關係を明かにして、はじめてこの文章ははつきりするのです。これはほんの一例ですが、文章は、はつきり理解するといふことが大切です。理解しなければ鑑賞どころではありません。それから「心細くあはれなり」だつてさうです。前からの關係上決して「淋しくあはれつほい」ではありません。これは、「心細いやうな感じがするが、そこが身にしてみても捨てがたい景色だ。」といふことです。
- (二) 重要語句としては、「なめり・をちこち・こま山に似ず・雲かかる・思ひやかけし」の五語。



27、二十五日菊川を出でて

27、二十五日、菊川を出て、今日は大井川と

二十五日は、菊川を出て、今日(28)は大井川を出て、

井川といふ川を渡る。水いとあせて、聞評

判ほごの難儀もない。河原(かは)の廣

きしにはたがひてわづらひなし。成程出水の折

幾里とかや、いとほるかなり。水の出

思ひ出づる都のことは大井川、

幾瀬の石の数も及ばじ。

【批評摘要】

常の大井川をうつす文章として、何の飾もなく、すら／＼として立派なものである。「思ひ出づる」の一首、別に面白い歌でもないが、大井川の名のおほ(大)で多いを思ひ、河原の小石の多いことから、都を思ふこととの多いのを關聯せしめて考へるのは、何の洒落でもなく自然の聲であらう。

【若い讀者への希望】

- (一) この節などは、まことにあつきりとしてゐます。大井川に臨んでの實感で御座いませう。御旅行の時は、車中からでもよい、このことを心の中においてこの大井川を眺めていただきたい。そしてよく味はつていただきたいものです。自分は、學生時代に、大井川は汽車でわたり、金谷町から、徒歩で、しかも夜の八時過ぎ、小雨を冒して、小夜の中山に登り、大井川の漁火をながめ、菊川を越えたことがあります。爲めに前節から本節にかけては、一層面白く讀むことが出来ます。そのいふすから「幾瀬もあつても行つても、面白く讀むことが出来ます。そのいふすから「幾瀬もあつても行つても、面白く讀むことが出来ます。」
- (二) 重要語句としては、「あす・わづらひ・面影・幾瀬」の四語。

27、二十五日、菊川を出て、今日は大井川と

27【大井川】遠江・駿河の國境を流れて南太平洋に注ぐ。この川は、川原が二十丁もあつて、水の溢れ出る時は、金谷から島田まで、一里の間一面の川となり、旅客は兩驛に逗留したものである。【あせて】「あす」は、水量が減じて淺くなる。

【わづらひ】困難。難儀。

【水の出でたらむ面影】出水の時の様子。「面影」は、心に思ひ浮べられた姿。

【都のことは大井川】「都のことは」多いを大井「川」にかけた。

【幾瀬】幾つかの瀬。数多い瀬。



28、宇都の山越ゆるほどにしも

宇都の山を越ゆる時丁度、  
阿闍梨の  
宇都(う)の山越ゆるほどにしも、

知人の山伏に行きあつた。

「夢(りき)の見知りたる山伏(やまぶし)行きあひたり。」

にも人を「など、昔をわざとまねびたら

にも人を「など、昔をわざとまねびたら

む心地(ち)して、いとめづらかに、をかし

くもあはれにも、やさしくもおぼゆ。急

ぐ道なりといへば、文(ふみ)もあまたはえ書

かず、ただやむごとなきところ一(ひと)つに

ぞ、おとづれ聞ゆる。

28、宇都の山  
都の山  
で山伏  
にあつ  
て、都  
へたよ  
りをし  
たその  
心の中  
を記し  
た。

28【宇都の山】静岡市の西、安倍川を

渡る丸子(まりこ)といふ所があ

る。ここが阿部といふ所との間

の峠で、宇津谷峠ともいふ。

【ほどにしも】頃丁度。「しも」は、

語調を強める語。

【阿闍梨】はじめから同行の慶融阿

闍梨。

【山伏】山野に起臥して行をする僧

×【夢にも人をなぞ昔をまねびたら

む心地して】昔、業平がこの山

を越える時、都へこぼづけると

て「駿河なる宇都の山邊のうつ

つにも夢にも人にあはぬなりけ

り」と詠んだ。その昔のことを

わざとまねた心地がして。

【まねび】「まねび」に同じ。眞似を

する。

【めづらかに】めづらしいやうに。

【をかしくも】面白くも。

【あはれにも】感じ深くも。しみじ

みと。

【おぼゆ】思はれる。

【急ぐ道】急ぎ行く旅行。

【ふみ】手紙。

【え書かず】よう書かない。「え」は

「得」の意、下に打消の助動詞を

伴ふ。

【やむごとなき】たふとい。

【おとづれ聞ゆ】たよりに申し上げ

る。

【うつつともなし】正氣でない。悲

しくて心がぼんやりしてゐる。

次に「宇都の山」と續けたば、音

をそろへて調子よくしたのだ。

わたしの心は亂れてぼんやりしてゐます宇都の山で、  
わが心うつつともなし宇都の山、

夢にも見られない遠い昔即ち都のこゝを戀ひ慕ふので、  
夢にも遠き昔戀ふとて。

宇都の山のつたかへでに時雨の降らぬ時でもわたしの袖は、  
つたかへでしぐれぬひまも宇都の山、

涙の時雨でその色がこげるやうに變ります。  
涙に袖のいろぞこがるる。

【遠き昔】京都のこゝを指してかういつたのだ。

【つたかへで】宇都の山は、つたかへでの名所である。「つた」は、蔓草で、葉は心臓形、

秋に紅葉する。「かへで」は、「かへる手」の畧。もみぢ(槭樹)に同じ。

【しぐれぬひま】時雨の降らない時。

【こがるる】火にこげたやうな色になる。

【参考】

【夢にも人を】次の伊勢物語の文によつて書いた。

「ゆきゆきて、するがの國に至りぬ。うつの山に至りて、我が入らむさする道は、いと暗



う細きに、つたかへではしげり、物心細く、すずるなる目を見ることと思ふに、修業者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京にその人の許にきて、文かきてつく。「するがなるうつの山へのうつつにも、夢にも人にあはぬなりけり」

即ち、昔業平朝臣が、東下りの際、宇都の山で、修業者に出あつたことがあつた。今また、阿佛尼が、同じ山で、山伏に出あつたから、昔の業平を今わざと真似たやうな心地していつたのだ。

【批評摘要】

作者は、何か事があると、もう四圍の景色も、眼に入らぬやうである。ここも、山伏に出あつたので、業平の昔を偲んで、都戀しい情を述べて終つてゐる。人に見せようと書いたのではないから、よいさいへばいふもの、さにかく作者にはさうした傾がある、二十一日の八橋の紅葉などは、よく書いてあるのに。

然しこの文は、山伏にあつたことによつて、作者の心は躍つてゐる。「宇野の山越ゆるほどにしも」といひ、「いさめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくもおほゆ。」といひ、その邊がよく伺はれる。生き／＼した文章である。歌は二首とも、こりたてていふほごでもない。

【若い讀者への希望】

(一) この節は、作者が思ふままを書いたのですから、文章が生きてゐます。久しぶりで、間接にでも、知人にあつて、ことづての出来るのなら、婦人として、どんなに嬉しいことぞせう。

然し、それがために、つたかへでの名所である宇都の山の、その景が、少しも叙してありません。讀者からいへば物足りません。

いかに勝手さはいへ、言語文章は、思想感情を人に傳へるものである以上、ある程度まで、聞手も讀者も、考へることは必要であります。然し、それがため、自己を失ふやうなことがあつては、無論いけません。この邊は若い人たちは、相當注意を要すること存じます。

(二) 重要語句としては、「ほごにしも・まれび・めづらかに・をかしくも・あはれにも・文書かず・やむことなき・おとづれ聞ゆ・うつつともなし・つたかへで・こがる」の十二語。



29、こよひは手越といふ所に

今晩は手越といふ所にさまつた。

こよひは手越(てし)といふ所にとどまる。

何さかおつしやる僧正(しやう)が京へ上られるといつて、

なにがしの僧正(しやう)とかやの上(の)り給ふ

大層人出だ。

「ために」宿もさりかれた然

とて、いと人しげし。宿りかねたりつれ

し、さうはいふもの客のないやうな宿もあつた。

ど、さすがに人のなき宿(や)もありけり。

29【手越】静岡市の西を流れる安倍

川の西に在る。

【僧正】僧正・僧部・律師が僧官で、

「僧正」は其第一位。

【上り給ふ】京都に行くを「上る」といふ。

【人しげし】人出が多い。

【たりつれ】「たりつ」の已然形。

【さすがに】さうはいふものの。だが。

29、手越の宿の、人ごみの様を、ちよつと記した。

【批評摘要】

これは、何でもないやうな文章ではあるが、僻がなく、さら／＼と其ままた記したところが多い。

【若い讀者への希望】

(一) どうですか、叙し方がいかにも自然的ではありませんか。わざ／＼作りましたといふやうな所は、少しも見えません。引つきりなしのあの歌さへもあ

りません。そしてこの事實は、真に迫つてゐます。理屈からいふと「人いさしげし」といふと、もう「人もなき宿もありけり」といはれぬわけですが、田舎の常として、何かの事で、人込みのする所があると思へば、また人のない所もあるのです。これが事實です。この文章には事實其まま寫したところに生命があります。

(二) 重要語句としては、「僧正・上る・さすがに」の三語。

30、二十六日薬科川とかや渡りて

二十六日には、薬科川(やくか)をかを渡つて、

二十六日、薬科川(やくか)とかや渡りて、

息津(おき)の濱に出た。

「ことごとへ」思ひおきつ

息津(おき)の濱に打ち出づ。「なくなく出てし

濱千鳥(はら)をなく出でし云云」の歌など、

あとの月影(つき)など、まづ思ひ出でらる

晝頃に立ち入つた家に、

つまらない黄楊(わう)の枕(まくら)があ

。晝立ち入りたる所に、あやしき黄楊(わう)

30、息津へ来て、ちよつとくたがれたか、黄楊の枕で打ち臥して

30【薬科川】駿河國安倍川の上流。

【息津の濱】今の興津町。ここは駿河灣に臨んでゐる。

【打ち出づ】出る。「打ち」は接頭語で意味はない。

×「なくなく出でしあとの月影」泣きながら別れて出て来た故郷の

月よ、の意。定家の歌。

【あやしき】賤しく見苦しい。

【黄楊の小枕】黄楊の木製の枕。



戯れ  
に一首  
障子  
に書き  
つけた

つた。  
のこ枕まくらあり。いと苦しければ打ち臥ふしたるに、硯すずりも見ゆれば、枕まくらのしやうじしやうじに、臥ふしながら書きつけた。

ただにかりそめにちよつこだけ借りた枕だから、  
なほざりにみるめばかりをかり枕、

契くわいを結びおいたなごも他人に告げてくれるな。  
むすびおきつと人に語るな。

【むすびおきつ】地名の興津に、契を結びおきつ、をかけた。  
【人に語るな】枕に對していふ語。

【参考】

【なくなく出でし】「こまこへよ思ひおきつの濱千鳥なくなく出でし跡の月影」(新古今集、定家の歌)

一首の意は「わたしが思ひを残して泣く泣く別れて来た故郷の月影よ、わたしのこの旅のつらさを慰めるためにたづねて来てくれよ。」

【いと苦しければ】旅の疲労のためであらう。

【枕のしやうじ】まくらへの障子。

【障子】は、多く「ふすま障子」即ちからかみをいふ。今の障子はあかり障子といつた。

【なほざりに】かりそめに。いたづらに。

【みるめ】海藻の海松布(みるめ)に

【なほざりに】見る、をかけた。

【かり枕】假りにれる枕。これに「みるめを」刈り、をかけた。

【批評摘要】

さほごな文ではないが、作者にとつては、旅の疲れをうつつして、相當の慰になつたのであらう。

【若い讀者への希望】

(一) 旅に疲れた時などに、いたづらに愚痴をこぼして、人もおのれも、不快に苦しむことがあります。この作者のやうに、いと苦しくて打ち臥したをり、かうした歌にそのうさをやる、實にゆかしい。常のたしなみのほごが、察せられてうれしう御座います。

(二) 重要語句としては、「打ち出づ・あやしき・障子・なほざりに」の四語。

31、暮れかかるほど

日暮ひぐり頃ころに、  
暮れかかるほど、清見しみが關せきを過ぐ  
岩いわの上うへを打ち越す浪なみが、岩いわに白衣びやくいを着せるやうに見えるそれ  
岩越す浪いわこえすなみの白しろき衣きを打ち着うちきするや

31、暮  
頃清見  
が關で  
の白浪  
の中の

31【暮れかかるほど】日が暮れ始める頃。

【清見が關】駿河國庵原郡の海濱、清見寺の邊。

【岩越す浪】岩をのり越す浪。



、古い  
岩を見  
て一首  
詠んだ

が、  
うに見ゆる、いとをかし。  
大層よい景色だ。

さわ清見灣の年経た古い岩に一つ尋ねよう、  
清見潟(きよみ)年ふる岩にこととはむ、

お前は長い間さうして涙のぬれ衣を幾枚着たか。  
浪のぬれぎぬ幾(い)かさねきつ。

(一一二)

【見ゆる】見ゆる「の」。  
【清見潟】清見が關の南方の入海をかくいふ。  
【年ふる岩】年を経た古い岩。「ふる」は、經る古とをかけた。  
【こととはむ】たづねよう。  
【ぬれぎぬ】無實の罪名を蒙るこ  
と。ここでは、岩にかかる涙を  
いふ。「清見」の縁語。  
【幾かさね】幾枚。

【批評摘要】

歌は戯れだが、婦人にはふさはしい。成程この海は、今も巨岩が岸邊にあつて、白浪の打ち寄るにまかせてゐる。夕暮の事なれば、一層白い浪が、目についたのであらう。

【若い讀者への希望】

(一) 作者の目には、大きな景はあまり映らぬやうです。然し、或る一部の實況は、こくうつされてあります。かうした岩と白浪とは、汽車で通つても、脚もとにいつも見られます。實に事實はたふといものです。

(二) 重要語句としては、「年ふる岩・ぬれぎぬ」の二語。

32、程なく暮れて

間もなく日も暮れて、  
程なく暮れて、そのわたりの海ちかき

里(さ)にとどまりぬ。浦人(うら)のしわざにや

隣(りん)よりくゆりかかるけぶり、いとむ

つかしきにほひなれば、「夜(よ)の宿なまぐ

さし。」といひける人の言葉も思ひ出でら

る。よもすがら風いと荒れて、浪ただ枕

の上になちさわぐ。

32【程なく】間もなく。

【わたり】あたり。邊。

【浦人】海岸に住む人。漁をする人

【しわざにや】しわざにや「あらむ」

するこゝであらうか。

【くゆりかかる】けむがかかつて來

る。「くゆる」は、くすぶる。

【むつかしき】むさくるしい。いや

な。

【夜の宿はなまぐさし】白氏文集第

三の「縛戎人」といふ詩の中の

「朝喰シテ飢渴シテ三杯盤シテ。夜宿シテ腥臊シテ

汚ス三牀席シテ」による。こは和漢朗詠

集中にあつて、人のよく知る句

である。

【よもすがら】夜中。終夜。

【枕の上】まくらの上。

(一一三)

32、濱  
邊の宿  
りの、  
いやな  
句に、  
白樂天  
の詩句  
を思ひ  
出し、  
枕邊の  
浪の音  
に、一  
首詠ん  
だ。



まあ少しも知らなかつた。これまでよそ事を聞いてた清見湯の、  
ならばすよよそに聞きこし清見湯、

荒い磯邊の浪が身にかかるやうなかういふれざめは。  
あら磯なみのかかるねざめは。

【かゝるれざめ】かかる「は、このやうなに、「浪のそそぎ」かかるをかけた。「れざめ」は、寝てから目のさめたこと。

【ならばすよ】経験したことはないよ。  
【よそに聞きこし】よそ事として聞いて来た。「よそに」は自分には関係のないこととして。

【批評摘要】

あまのしわざのわるい句などは、文章の材料としてはよくない。然しこれによつて、白樂天の詩句を思ひ出したと、轉じてしまつたところ、まことによい。

この歌も、實感そのままであらう。都にばかり住める人が、浪音荒い海濱の一夜、さぞ寝苦しかつたらう。その趣がよくあらはれてゐる。無論きれいな歌ではない。

【若い讀者への希望】

(一) 私は、この文章の中に、いやな句の煙があらはれたのを見た時、どうしようかと思ひました。作者はさうしてこれを奇麗にかたつけるであらうか

と。それから續いて、自分がかつてこの邊の海岸を歩いた時、鼻がいたい程のわるい臭を思ひ出して。

歌なども作者の日常生活を思つて見るに、單調な歌でよいと思ひます。この文章などは、決してよいものではありませんが、學ぶところは多いのです。よく味はつて下さい。かくどんな材料も美化してしまふのがたふとい。

(二) 重要語句としては、「浦人・しわざにや・くゆりかがる・むづかし・よもすがら・枕の上・ならばすよよそに聞きこし・れざめ」の九語。

33、富士の山を見れば

富士の山を見るとき、  
富士の山を見れば、煙も立たず。昔

父平度繁朝臣につれられて、  
父の朝臣（あそん）にさそはれて、「いかになるみ

の浦なれば」など詠んだ頃のこと、  
の浦なれば」などよみし頃、遠（と）つあふ

み、  
みの國までは見しかば、「富士の煙の末も

33、富士の山に見るとき、煙が立たない、昔を偲び、歌三首詠んだ。

33【父の朝臣】平度繁朝臣。

×【朝臣（あそん）】「あそみ」の音便。他人を親しみ呼ぶ語。四位以上の爵位ある人の敬稱。

×【いかになるみの浦なれば】阿佛尼が、かれて鳴海の浦を過ぐして詠んだ歌の句。

【遠つあふみの國】遠江國  
【煙の末】なびくけむりの先の方をいふ。



毎日のやうにたしかに見えたのに、  
 朝夕(あさ)たしかに見えしものを、いつの年よりか絶えし。」と問へば、さだかに答ふる人だになし。

誰の方に靡いていつてしまつて富士山の、  
 たが方に靡(な)きはててか富士の根の、  
 煙の先が見えないやうになつたのであらうか。  
 煙の末の見えずなるらむ。

古今集の序の詞まで思ひ出されて、  
 古今(きん)の序の詞まで思ひ出でられて、  
 一つの世の麓のちりか富士の根を、

雪まで届く高い山にしたのであらうか。  
 雪さへ高き山となしけむ。  
 共に世の變遷の例に引かれるくちは長柄の橋も造りかへたものである、  
 朽(く)ちはてし長柄(なが)の橋を造らばや、

【朝夕】あさも晩も。常に。  
 【さだかに】はつきりき。分明に。  
 【だに】今いふすら。軽い方をい  
 つて、重い方を言外にささらせ  
 るさいふ意の語。

【たが方に】たれの方に。  
 【根(ち)】のうへ」の約であらうさ  
 いふ。やま。みれ。

【古今の序の詞】「遠き所も出で立  
 つ足許より始まりて年月を渡り  
 、高き山も麓の塵(ちり)ひちより成り  
 て、天雲棚引くまでおひ登れる  
 如くに云々」又「或は云々吉野  
 川を引きて世の中を恨み來つる  
 に、今は富士の山も煙立たずな  
 り、長柄の橋も造るなりと聞く  
 人は、歌にのみぞ心を慰めける」  
 【さへ】まで。あるが上に更に添は  
 るの語。

【朽ちはつ】くち終る。

×【長柄(ながら)の橋】攝津國西成郡  
 に在る。この橋は造り改められ  
 なかつたので、古歌にも古い例  
 に引かれて、古今集併譜に難波

この富士の煙も立たなくなつてしまつたこれ程の世の中ならば、  
 ふじの煙も立たずなりなば。

【参考】

【あそん】1、「あそみ」の音便でかばれの名で、神別の人に賜つたもの。後世位階の法が定め  
 られてから、「親房朝臣」のやうに、四位の参議に限り、名の下に添へていふ名字朝臣と、  
 「藤原朝臣」のやうに、位階の有無にかかはらず、一般に姓の下に添へていふ姓朝臣とに  
 分れた。2、他人を親しみ呼ぶ稱。「あやしく失せぬる朝臣だちかな」などいふ。

【いかなるみの浦なれば】續古今集、羣旅の部に「思ふこと侍りける頃、父の平慶繁朝臣  
 とまたふみの國にまかりけるに、心ならず伴ひて、鳴海の浦を過ぐとてよみ侍りける。  
 『さてもわれいかなるみの浦なれば、思ふ方には遠さかるらむ』(さても自分ほどのや  
 うになる身の上なれば、自分がなつかしく思ふ故郷の方に遠くはなれて行くことであら  
 う)さあるによる。

【長柄の橋】この歌については、古來諸説あるが、自分は、今かやうに解いておく。

【批評摘要】

例によつて、またも懷舊の情に捕へられてしまつた。そして古今集の序などをくりかへ



してしまつた。富士の絶景に對して一筆をも費さない。宇都の山の叙事と同一筆法である。歌に關する古いことを知つてゐるといふ小さい誇が、かう邪覓をするのではあるまいか。まさかさうでもあるまい。またこの三首、なくもがなと思はれる。

【若い讀者への希望】

(一) 紀行文として、叙景の少ないのは面白くないといふことはたしかでありませぬ。然し、また一面から見ると、作者は懐舊の情さか、故事さかに捕へられて、景色を見ることが出来ませぬ。景色も大きな景色は少しも見えないやうです。いつも一局部だけをぼつりぼつり叙してゐます。富士山に對しても、宇都の山の記事と同一筆法です。して見るとこれがこの作者なのです。この文章も、この歌も、他の人ではないのです。作者が、そのままあらはれてゐるかと思ふと、この文章にいひ知らぬなつかしみが出来て來ます。この文章ではこの點を見ていただきたいと思ひます。勿論缺點は缺點として。

(二) 重要語句としては、「朝臣・さだかに・根(ね)・ばや」の四語。

34、今宵は波の上といふ所に

34、波の上の一夜を叙した。

今晩は波の上といふ所にまよつて、  
今宵は波の上といふ所にやどりて、  
荒波の上といふ所にまよつて、  
の荒れる音で、少しもれむられない。  
たる音(ね)、さらに目もあはず。

34【波の上】いづこか不明。然し富士川に近い海岸のやうである。  
【さらに】少しも。(下に打消の語を伴ふが常。)

【目もあはず】眠られない。

【批評摘要】

簡潔。

【若い讀者への希望】

(一) 無論簡潔は、文章の最もたふさぶべき条件の一つですが、若い方は簡潔を期するよりも、思ふ存分に想を述べることにつとめなければなりません。然しあまりくだくだしきに流れた方は、本筋などで、大に反省していただきたいものです。

(二) 重要語句としては、「さらに・目もあはず」の二語。

35、二十七日明けはなれて

35、富士の朝

二十七日には、  
夜が明けてしまつてから、  
二十七日、明けはなれて後、  
富士川を渡つ  
富士川を渡つ  
富士川を渡つ  
富士川を渡つ  
二郡の境を流れる急流。



川を渡  
つて、  
来し方  
が追想  
せられ  
たのだ

た。朝の川は大層寒い。數へて見ればもうこれで  
渡る。朝川(あさ)いと寒し。數ふれば十五瀬  
川瀬を十五も渡つて来た。  
をぞ渡りぬる。

冷えるには困つてしまつた雪から吹き下す富士川の、  
さえわびぬ雪よりおろす富士川の、

こぼる川風に冬の旅衣の袖の。  
川風こぼる冬のころもで。

【参考】

【さえわびぬの歌】思想の順序にすれば、「富士山の雪から吹きおろして来る、富士川の、こぼる川風のために、冬の旅衣の袖の冷えるには、大に困つてしまつた。」となる。

【批評摘要】

文も歌もすらくとして、相当力もある。「數ふれば十五瀬をぞ渡りぬる」なんて、實に眞にせまつてゐる。

【若い讀者への希望】

(一) 短い、よい一節です。「明けはなれて後富士川を渡る」、明けはなれなければ

36、田  
子の浦  
の海士  
を見て  
、感じ  
を述べ  
た。

今日のはごかな日なので、  
今日は日いとうららかにて、田子(たこ)の  
浦に打ち出づ。海士(あ)どものいさりする  
を見ても、

農夫が進んで田に入ったやうに海に入った漁士は着物が濡れたとて、  
心からおり立つ田子の鯉衣(こま)、  
ほさぬうらみと人に語るな。

36、今日は日いとうららかにて

ば、寒くて渡られません。「朝川いと寒し」、その通りです。あまりに寒いから、自然川を渡ることにして過去も將來も考へられます。それで「數ふれば云々」としてあります。そして歌が添へてあります。「一言一句むだのない文章です。よく読んで参考になさるがよいのです。」

(二) 重要語句としては、「さえわびぬ、ころもで」の二語。

36【うららか】天が晴れてのどやか。  
【田子の浦】富士川河口附近一帯の海岸。

【打ち出づ】出づ。「打ち」は接頭語で別に意味はない。  
【あま(海士)】濱邊に住んで、漁をし、鹽をとりなごする者。  
【いさりす】漁をする。  
【心から】わが心から進んで。  
【おり立つ】おりて行く。「蟹衣を」織り裁つと續く縁語。  
【田子】農夫。  
【蟹衣】漁士の着物。  
【ほさぬうらみ】わがわがす暇もなくいつも濡れてる恨。



さまあいひたくなつた。  
とぞいはまほしき。

【いはまほしき】いはまほし」の連  
體形。いひたい。いふことを欲  
する。

【批評摘要】

此の文もあつさりしてゐていい。歌もかういふ時、婦人の口からほさばしりさうなこ  
ばである。

【若い讀者への希望】

(一)「いさりするを」この語法がわかりますか。女學校では、二學年から文法を  
始めて、三學年で終ります。四年の方に尋ねても、わかり兼ねる時がありま  
す。文法は講讀の時、作文の時と離れては無意味です。念のためにいつて見る  
と、「いさりする」は、動詞の連體形ですから、その下に名詞が畧されてあり  
ます。即ち「いさりする」の「を」なるところは「いさりする」もよく見る  
と「いさり」といふ名詞と「する」といふ行變格の、セ・シ・ス・スル・スレ・セ  
の「スル」なので一つの熟語です。佐變の熟語は非常に多くなります。ゆるが  
せに「いふ副詞と合して「ゆるがせにす」となり、字音と合して「論ず」考  
慮す」などなる類です。どうかすると、「いはまほしき」の「き」を過去の助  
動詞のやうに思ふ方なごさへあります。

こんなつまらないことで恥をさらすのは、文法はいやなものだとして避けて  
ゐるからなのです。文法はちよつて注意すれば面白く覺えられるものです。  
少し古い文章になると、文法がわからないと正しい解釋も出来なければ、ま  
た文章の面白味も味ふことが出来ません。  
(二) 重要語句としては、「うららか・海士(あま)・いさりす・田子・蛭衣・いはまほ  
し」の六語。

37、伊豆の國府といふ所に

37、伊豆の國府といふ所に  
三島の國府で、  
三島の  
明神に  
歌を奉  
つて、  
今度の

「伊豆の國府といふ所にままつた。  
伊豆の國府(いづのくにのみら)といふ所にとどまる。い  
だ夕日も入り切らぬ頃に、三島の明神へ奉るまいつて、  
まだ夕日残るほど、三島(しま)の明神(あきみ)へ  
まあるとて、よみて奉る。  
〔次の歌を〕よんだ。

37【伊豆の國府】今の三島町の中に  
あつた。

【三島の明神】三島町にある。今は  
官幣大社。

【まいつて】まいつて。  
【よみて】歌を作つて。



訴訟の  
勝利を  
祈る。

わたしをあはれと御覽なさることでせう三島の神様をたよって、  
あはれとや三島の神の宮ばしら、

ひたすらここまで来たので御座いますから。  
ただここにしもめぐり来にけり。

父祖以来わが家に傳へられて来た跡のあるものを、  
おのづから傳へし跡もあるものを、

神様は御存じで御座います。この和歌の道の。  
神は知るらむ敷島(しき)の道。

はるばる歩いて来て今越えようとする箱根の坂路を、  
尋ね来てわが越えかかる箱根路(はね)を、

この山にかひがあるやうに今度の訴訟にかひのある道しるべと思ふ。  
山のかひあるしるべとぞ思ふ。

【山のかひある】「かひ」は、山と山との間のたにあひ。山の「かひ」を訴訟のかひがあるといふ「かひ」にかけた。  
【しるべ】道しるべ。手びき。

【批評摘要】

またも訴訟の勝利を神に祈る。いつもながら、目的に燃えてる老婦人の神前にぬかづく様が、見えるやうである。「切角来ましたから、歌道のため、勝利を得させて下さい。」と、こ

(一一四)

【あはれとや三島の】「あはれとや見るの」見を三島の「三」にかけた。

【宮ばしら】宮のはしら。伊弉諾、伊弉册の二神が、宮ばしらをめぐって契り給はれたといふ故事から、下の「めぐる」の縁語とした。

【おのづから傳へし跡】父祖以来自然と傳はつて来た歌道といふ。  
【敷島の道】和歌の道。敷島の大和歌(やまとうた)の道の畧。

【箱根路】伊豆の三島の驛から箱根山を経て、相模の酒匂川の川口に通ずる山路。

の三首を、祈つてゐる。

【若い讀者への希望】

(一) 天下の險と歌はれてゐる箱根の山を、すぐ前にひかへながら、その險は眼中にありません。「歌道のためわが兒の勝利となるやうに」、これより外に何、ありません。英雄ナポレオンは、「豈、われを妨ぐるアルプスあらむや」と呼びました。若い讀者の方々は、ここで意外な獲物のあることを忘れてはなりません。

(二) 重要語句としては、「宮ばしら・敷島の道・山のかひ」の三語。

38、二十八日伊豆の國府を出でて

二十八日には、伊豆の國府を立ち出でて、箱根を  
二十八日、伊豆の國府を出でて、箱根

登りかけた。まだ夜も深く明けないから(とて一首)、  
路にかかる。いまだ夜ぶかければ、

なんば箱根山を急いで登つて、  
玉くしげ箱根の山を急げども、

東の空には横雲がたなびいてゐた夜が明けさうもない。  
なほ明けがたき横ぐもの空。

(一一五)

【夜ぶかければ】まだ夜が深くて明けない。「夜ぶかし」の已然形。  
【玉くしげ】糞ふ。明く。臭なご箱に縁ある語の枕詞。「くしげ」は、櫛笥(くしげ)で、櫛を入れる箱だからなのです。「玉」はその美稱に過ぎない。  
【箱根の山】駿河・相模・伊豆三國の境に横はつてゐる山。  
【なほ】やはりまだ。

38、二  
十八日  
、まだ  
、夜深き  
箱根路  
の空に  
一首を  
詠み、  
足柄山  
に思ひ



なよせ  
た。

足柄山の方は道が遠いからといって、箱根路を登るこころ  
足柄がしの山は道遠しとて、箱根路にかか  
したのである。  
るなりけり。

何とゆかしいこよかなたの雲をそばだてて、  
ゆかしさよそなたの雲をそばだてて、

よそになしぬる足柄の山。

【横雲の空】夜明けがた雲の横にた  
なびいてゐる空。  
【足柄の山】相模・駿河兩國の境に  
跨れる山。箱根路が開かれない  
時は、東海道は箱根山をまはつ  
て足柄山を越えた。  
【さて】といつて。と思つて。  
【ゆかしさ】奥ゆかしさ。したはし  
さ。  
【そなた】彼方。  
【そばだてて】そばだたせて。一方をあげ起して。傾けて。  
X【よそになしぬる足柄の山】「よそになす」は遠ざける。「足柄山」はその「足」に「悪し」  
がかけてある。

【参考】

この歌の解は、佐野氏のに従つた。足柄の「足」に「悪し」がかけてあるので、この足柄  
山を遠ざけると見るが隠かである。それから足柄山は、道が遠いからさけた點からいつて  
もさうである。他の數書の註は、やはり佐野氏の本に集めてあるが、皆「あちらの雲を  
そばだたせて悪しきを遠ざけてしまつた足柄山がゆかしい」といふやうに解してある。

【批評摘要】

この二首、まだ明けやらぬ箱根路を詠める歌として、一つはその實景を、一つはその實感  
を、すらくと述べてよい歌である。

【若い讀者への希望】

- (一) 「ゆかしさよ」の一首の解などは、餘程落ちついて考へないさ、はつきりし  
ません。これを思想の順序に置きかへるこ。
- 1、「足柄の山」を、「そなたの雲をそばだててよそになしぬる」「は」ゆかしさ  
よ」ともなり、
- 2、「そなたの雲をそばだててよそになしぬる足柄の山」「は」ゆかしさよ」を  
もなります。

然しこの1・2は意味において大變な差です。1では、足柄の山が悪いもの  
になり、2ではゆかしいものになるからです。  
だから、解釋が二様に分れるのです。私は、参考にも書いておいた通り、1  
の方が前後の關係上穩かであるやうに思ひます。困難な點になるさ、前後の  
關係やら作者の思想やら道理やら、十分に考へなければなりません。

(二) 重要語句としては、「玉くしげ・ゆかしさ・そばだて」の三語。



39、いとさかしき山を下る

大層險阻な山を下る。

足をふむ所もない

いとさかしき山を下(さ)る。人のあしも

ほどである。

「ここは」湯坂さいふのだ。

とどまり難し。湯坂(ゆか)とぞいふなる。か

つと越えてしまつたれば、

また麓に早川といふ

らうじて越えはてたれば、また麓に早川

川がある。

實に早い。

「それには」

(かは)といふ川あり。まことに早し。木の多

木が澤山流れてゐる尋ねて見るさ、

海邊の人たちが

く流るるをいかにと問へば、海士(うし)の藻

鹽(しほ)をやくたき木を濱へ送り出すのであるといふことである。

鹽(しほ)木(き)を濱へ出ださむとて流すなりとい

ふ。

東海道の湯坂を越えてきて見渡すさ、

あづまぢの湯坂を越えて見渡せば、

39「さかしき」けはしい。險阻な。

【湯坂】箱根の蘆の湯から鷹栖山を

經て、湯本に下る坂路。

【からうじて】「からくして」の音

便。やつこのこと。

【早川】葦の湖から發し、北に向ひ

東に流れて小田原に近く海に入

る。

【海士】海人とも書く、海邊に住ん

で漁鹽を業とする者。

【藻鹽木】海藻を焼くためのたき

木。

【あづまぢ】東海道。

【しほ木】藻鹽木に同じい。

早川の水には澤山の藻鹽木が流れてゐる。  
しほ木流るる早川の水。

【批評摘要】

本節「まことに早し」まで四行、短い句を並べて、險坂の様を叙したところ、この老婦人の筆さも見えないほどである。次の三行は、長い句を用ゐて歌を添へてゐる。歌は見たそのまゝをうつしたに過ぎないが、かへつてさつぱりとしてゐてよい。

【若い讀者への希望】

- (一) かかる險阻なところをうつすには、かうした短い句を以つてします。其他急な場合、感激した場合、皆これに準じてよい。かういふ注意を以つて、文章を讀み、文章を作ることは、必要な條件の一つであります。
- (二) 重要語句としては、「さかしき」からうじて・藻鹽木」の三語。

40、湯坂より浦に出でて

湯坂から海岸に出でて、  
湯坂より浦に出でて、日暮れかかるに

40「浦に出でて」「浦」は相模灣に面する海岸。



出た海  
岸はど  
こか知  
らない  
が、と  
にかく  
今夜は  
ここに  
宿らう

(1110)

宿は遠い。  
とまるべき所遠し。伊豆の大島(おほしま)まで  
この出来る海邊を、  
見渡さるる海面(うらみ)を、いづことかいふと  
問へど、知りたる人もなし。あまの家の  
もの賤しい家ばかりたつてゐる。

漁士の住んでるその名も何といふ所か知らないが白浪の、  
あまの住むその里の名も白浪(しらなみ)の、

打ち寄せる海邊に宿をかりませう。  
寄する渚(なぎ)に宿やからまし。

【批評摘要】

本節は、箱根の險を越えた後で、とにかく、ゆつたりした気分が充ちてゐる。無難な筆である。

【若い讀者への希望】

- (一) 「うみづらの意味は二つあります。即ち普通の意味では「海面」、古い意味では「海邊」です。この場合どちらの意味か、ちよつと迷ひます。「大島まで見渡さるるうみづら」は「かいめん」でも意味が通じます。然し「いづことかいふ」あまの家のみぞある」といふに至つて、はじめて「海邊」の意であることがわかります。よく前後を考へて、まとまつた解をすることが大切です。
- (二) 重要語句としては、「海づらなぎさ・宿やからまし」の三語。

41、丸子川といふ川を

41、夕  
闇に丸  
子川を  
渡つて  
酒匂  
にさま  
つた。

丸子川(まわりがは)といふ川を、いと暗くてた  
どりわたる。今宵は酒匂(さか)といふ所にと  
どまる。明日(あした)は鎌倉(かまくら)へ入るべしとな  
り。

り。

(1111)

41【丸子川】酒匂川の古稱。鞠子川とも書いた。相模國小田原の東約一里の所で海に入る。  
【たどりわたる】「はつきりわからぬ所を」さぐりながらわたる。  
【酒匂】酒匂川の東岸の海濱にある。  
【入るべし】「べし」は推量の助動詞。ここでは少々可能の意も加はつてゐる。



【批評摘要】

川を渡つて、とまつて、明日の豫想を書いた。簡にして、盡してゐる。いやみのない文である。

【若い讀者への希望】

(一) どうです、この文は、簡潔で、のんびりしてゐて、歌のないといふ變化もあつて、そしてわざとらしい所が見えない。だがどこかに、びりつ／＼と、ひびくところがあります。かういふ文章も見のがしてはいけません。  
(二) 重要語句としては「たどりわたる」の一語。

42、二十九日酒匂を出でて

42、鎌倉に最後の日の、細い淋しい月、ちぢめ

二十九日には、酒匂の宿を出發して、長い濱路を行つた。  
二十九日、酒匂を出でて、濱路(はまぢ)を遙(はる)と行く。夜明けが海上から常(つね)に細い月が出た。  
明けはなるる海づらを、いと細い月が出てたり。

42【濱路】濱邊の路。  
【遙々】遠く。  
【海づら】この「海づら」は、海面の意。「を」は、より、の意。  
【いと細い月】二十九日の月だからかけて細いのである。

た朝霧とを叙し、終りに、やるせない恨をもらしてゐる。

遠く浦路をたどる淋しさを浪の間から、浦路(うらぢ)行く心細さを浪間(なま)より、

出でて知らせるやうです有明の月。出でて知らする有明の月。

また海岸に打ち寄せる波の上に霧が立ち込めて、渚(なぎさ)に寄せかへる波の上に霧立ちて、あまたありつる釣舟(つりぶね)見えたりぬ。山あつた釣舟が見えないやうになつてしまつた。

漁士の釣舟の漕ぎ行く方を見せまいさいふのでせうか、あま小舟(あまこぶね)漕ぎ行く方を見せじとや、意地悪くも海邊の朝霧が浪の上に立ち込めてゐます。浪に立ちそふ浦のあさ霧。

故郷が遠く隔つてしまつたのも、都(みやこ)遠く隔りはてぬるも、なほ夢の心地して、

【浦路】海邊の路。濱路といふも同じ。  
【なぎさ(渚)】波うちぎは。  
【寄せかへる】打ち寄せてはまたかへる。  
【あま小舟】漁夫の釣をする小さな舟。  
【見せじこや】見せじこや「あらむ」見せまいとしてか。  
【浪に立ちそふ】浪の上にまた霧がたちこめる。  
【浦のあさ霧】朝の海邊に立ちこめた霧。  
【隔りはてぬるも】隔りはてぬる「の」も。はなれてしまつたのも。  
【なほ】やはり。  
【夢の心地して】夢の心地して「詠める歌」。







都離れて来て子供等にもまさかこんなつらい目は見せまいに、  
立ち離れよもうき浪はかけもせじ、

昔のままに爲家殿が居られようものならば。

むかしの人のおなじ世ならば。

【立ち離れ】「都を」はなれ。「立ち」

は接頭語で意味はない。

【よも】よもやの意の副詞。

【むかしの人】爲家卿を指す。

【批評摘要】

目ざして来た鎌倉に入る最後の記事である。さて来たは来たものの、いざ鎌倉と思ふこ  
一入淋しい。にくや糸より細い有明の月はあはれをさそふ。今見えた海邊の小舟も霧が立  
ちこめてしまった。ああ亡夫が御存命であるならば、こんなうきめは見せまいに、涙が  
先に立つ。三首とも、たしかに作者の心中の實寫である。愚痴をそしらばそれ、この思  
ひを何さしよう。決して婦人のみには限らない。

【若い讀者への希望】

(一) どうか、作者がやうやく思ひ立つて来た其鎌倉に入る心の中をお察し下さ  
い。嬉しいやうな、恐しいやうな、恨めしいやうな、細い有明の月や、たち込め  
た朝霧はたしかに作者の心のあらはれてあります。かう思ふと、「立ち離れ」  
の一首は、當然な叫びであることがうなづかれます。作者の戦は、これから  
なので。決して氣がゆるされないのです。

(二) 重要語句としては、「濱路・を(よりの)意の」・浦路・見せじとや・立ち離れ・よも」  
の六語。



三、あづまにて住む所は

本段は第三段で、十四節より成る。  
 本段は鎌倉に着後、月影の谷に居を占め、都を戀ひて、贈答した歌など、其翌年、弘安元年八月二日までのことを記した。其贈答は、

- 一、都のある貴人さ二回。
- 二、權中納言爲子の君たちさ五回。
- 三、みくしげ殿さ一回。
- 四、姉さ妹さ二人に一回。
- 五、新中納言と一回。
- 六、侍從宰相の君(爲相)さ一回。
- 七、爲守の君さ一回。

1、あづまにて住む所は

1、鎌倉では月影の谷にあり、淋しい所である。宇都の山から来た方が、

鎌倉での住居は、  
 あづまにて住む所は、月影の谷さいふ所である。  
 ぞいふなる。浦(63)近き山もとにて、風い  
 と荒し。山寺(64)のかたはらなれば、のど  
 かにすこくて、浪の音・松の風絶えず。  
 都のおとづれ、いつの間にか待遠く思にれるやうにな  
 程にしも、宇都の山にて行きあひたりし  
 山伏(65)の便(66)に、ことづけ申したりし人

1【あづま】東國。ここでは、鎌倉を指す。  
 【月影の谷】極樂寺の境内。今も阿佛屋敷の名がある。  
 【浦近き】極樂寺は稻村ヶ崎の傍で、濱に近い。  
 【山もと】山の麓。  
 【山寺】極樂寺を指す。  
 【のどかにすこくて】靜かで淋しくおそろしくて。  
 【都のおとづれ】都からのたより。  
 【いつの間にか待遠く思にれるやうになつた頃】いつの間にか待遠しくなつた頃。丁度「おぼつかなき」は、はつきりしない意から、こころもさない。待ち遠しい意。  
 【しも】意を強める意の助詞。  
 【宇都の山云々】一〇四頁参照。



またも  
御返事  
申しあ  
げた。  
と、鎌  
倉の住  
居のこ  
とと都  
との贈  
答のこ  
さを  
記した

たしかなたよりがあつたのでそれに托  
の御許(おん)より、たしかなるたよりにつけ  
して、さきの御返事と思はれる(「お歌を下された」)、  
て、ありし御返(おん)しとおほしくて、

旅衣に時雨はおろか涙までそへて宇都山には、  
旅ごろも涙をそへて宇都の山、

しぐれぬ時にもこれには涙の時雨が絶えないうであらう。  
しぐれぬひまもさぞしぐるらむ。

あなたがふとお旅立ちになつた時に浮かれ出た十六夜の、  
ゆくりなくあくがれ出でし十六夜の、

月があなたを離れぬ記念(きんねん)でせう(「からそれで慰めておます」)。  
月やおくれぬかたみなるべき。

都を出たのは、十月十六日であつたから、  
都を出てしことは、神無月(かみな)十六日な

りしかば、いざよふ月を思はれて忘れられないの  
かこ、大層したほしくなつかしく思はれて、

りけるにやと、いとやさしくあはれにて

【おん許】おもと。おそば。  
【たしかなるたよりにつけて】確實  
な好便があつたのにつけてそれ  
に托して。

【ありし】過ぎ去つた時の。以前の。  
【おほしくて】思はれて。

【旅衣涙をそへて宇都の山】旅衣に  
は時雨がそそきからうが、涙  
までそへて宇都の山。宇都の山  
の「宇都」は「旅衣打つ」を續く縁  
語。

【ゆくりなく】ふさ。思ひがけなく  
も。

【あくがれ出づ】心も浮き浮きと出  
る。ここは阿佛尼が都を出るの  
さ月の出たのをかけた。

【月やおくれぬかたみなるべき】月  
をわが身から離れぬ記念物と見  
るであらう。「おくる」は、のこ  
る。はなれる意。

【神無月】陰曆十月の異様。

【思し召す】思ひ給ふ。

【にやこ】にや「あらむ」と。

ただこのお方への御返事だけばと思つてまた差しあげるこ  
、ただこの返事(かへり)ばかりをぞまた聞ゆ  
にした。

またおあひ申す折をたよりにしておます突然と、  
めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく、

いざよひの月のやうに旅立いたした私ば。  
空にうかれしいざよひの月。

【批評摘要】

鎌倉にての住家の様、僅か四行のうちに、よくあらはされてゐる。  
着後は、一入都戀しく思はれるであらう。

「めぐりあふ」の一首、都の貴いなつかしい方に對しての情も強く、すがたもうるはしくあ  
らはれてゐる。然し、あれほど、毎日心にかけて、神に祈つて來た訴訟に關した事が、どこに  
も見えない。また、これからさきにも見えない。無論、待つてはゐるに違ひないが、文章  
にも歌にも、少しも見えないのは、どうしても不自然である。(長歌は別として)



【若い讀者への希望】

(一) かうして、讀んだり書いたりして來ると、作者の經由せられた所を、一々たづねて見たいとの感じが、むく／＼と心の底から湧いて參ります。なぜ學生時代に、今少し、かういふ方面に興味を以つて、旅行しなかつたかと、後悔いたします。どうぞ、この書を讀まれる方々は、この悔を、くりかへさないやうに願ひいたします。

(二) 重要語句としては「山もとのごか。いつしかに。おぼつかなさ。おん許。ありし。おほしくて。神無月。思し召す。にやと。やさしく」の十一語。

2、前の右兵衛督の御むすめ

前の右兵衛のかみの御むすめは、

前(き)の右兵衛督(うひやう)の御むすめ、相當歌 歌よ

の詠める人で、其歌が勅撰集にも度々はいった。

む人にて、勅撰にも度度(たび)入り給へり。

大宮院に仕へて呼名を權中納言といはれる。

大宮院(おほみや)の權中納言(ごんちゆう)と聞ゆ。

歌の事

【前の右兵衛督】藤原たのり爲教。爲氏の弟で、阿佛尼の繼子。「前の」は、以前の。「右兵衛督」は、右兵衛府の長官。  
【御むすめ】息女。爲子といふ。  
【勅撰に入る】勅撰集にその歌が入られる。これ非常の名譽。  
【大宮院】後嵯峨の皇后藤原姞子。

2、繼子爲教のむすめ爲子と其兄爲兼との贈答

を叙してゐる

で、始終親しくしてゐたからであらうか、  
事ゆゑ、朝夕(あさゆふ)申し馴れしかばにや、道 道

中の心配なことなど見舞つて下された其手紙の奥に、  
のほどのおぼつかなさなどおとづれ給へ

る文に、

あなたの御旅行を遠く都から思ひやつて居ります、  
はるばると思ひこそやれ旅衣、

時雨のやうに涙の打ち注ぐ時はごんなに悲しうござらぬか。  
涙しぐるるほどやいかにと。

との返歌に「次のを」、  
かへりごとに、

お察し下さい露や時雨(は)はおるか涙まで注ぎかかつて、  
思ひやれ露も時雨も一つにて、

山路を分けて來た袖のしづくのごんなに多いか。  
山路(やまぢ)わけこし袖のしづくを。

この權中納言の兄の爲兼の君も、  
このせうとの爲兼(かみ)の君も、同じさまに

【權中納言】爲子の宮中に於ける呼び名。  
【歌の事ゆゑ】歌の事で。  
【朝夕申し馴る】始終馴れ親しんでゐる。「申し」只添へた語。  
【にや】にや「あらむ」。  
【道のほど】「京から鎌倉までの」道中のこと。道中。  
【おぼつかなさ】心配さ。氣づかばしさ。  
【おとづる】たよりをする。  
【涙しぐるるほど】涙が時雨のやうに注ぎかかる時。  
【かへりごと】返事。ここは返歌。  
【思ひやれ】推量せよ。  
【露も時雨も一つにて】露も時雨も一緒にそそぎかかつて。  
【わけこし】分けて通つて來た。  
【袖のしづく】袖にかかつたしづく。(無論涙も含まれてゐる)  
【せうと】せ(兄)ひと(人)の音便。兄人。兄。  
【爲兼】有名な歌人、勅によりて玉葉集を撰んだ。  
【同じさまに】同様に。



「この旅を」心配したことなどを書いて、おぼつかなきなど書きて、故郷の都が時雨の降る時にお立ちなされたのに、ふるさとは時雨にたちし旅衣、

もう雪が降りますいよいよお寒いことで御座いませう。雪にやいとどさえまさるらむ。

其返歌に、返(か)し

寒い濱風が旅衣にしみてこの十月の、旅衣浦風さえて神無月(かみなな)、

時雨空に雪までが降り出しました。しぐるるる空に雪ぞ降りそふ。

【批評摘要】

かうした近親との贈答、いかにもゆかしく思はれる。四首とも、慰め、慰められる心が、さの遺憾もなくあらはされてゐるところ、人ごとならず、うれしく感ぜられる。

【時雨にたちし旅衣】時雨の降る時に旅に立つ。「たちし」の「たつ」を「旅にたつ」と「旅衣をたつ」とにかけた。

【いとど】ますます。ひどく。

【さえまさる】いよいよ寒くなる。

【さゆ】は、ひえる。寒くなる。

【旅衣浦風さえて】旅の衣に海邊の風が寒く吹いて。

【しぐるるる空】しぐれの降る空。

【降りそふ】「時雨の」降る上に「雪までが」降りかさなる。

【若い讀者への希望】

(一) 自分ばかりで、眼病で旅の空で、六疊の一間に、終日、一つの火鉢にもたれて、幾月も、暮したことがありました。その時、命とたのんでおたのは、ただ、お見舞のお手紙でした。見えない目にも、幾回も読みかへしもし、返事も認めました。元氣も衰へず、やがて全快もしましたが、それは全く、このお見舞のお蔭だと思ひます。この心で、阿佛尼の心の中を察して見ますと、「思ひやれ」旅衣」などの返歌に、あらはれた情緒は、本當の心の叫と思はれます。うつくしい心と、立派な文と、きれいな文字との見舞は、實にたふといものだと思ひます。

(二) 重要語句としては、「朝夕申しなる・おぼつかない・おとづる・涙しぐるるるほご・思ひやる・わけこし・せうと・時雨にたちし旅衣・さえまさる」の九語。

3、式乾門院のみくしげ殿

式乾門院に奉仕してゐるみくしげ殿と申す(方)は、式乾門院(しきけん)のみくしげ殿(ご)と聞ゆる

3【式乾門院】四條院の御准母、御名は、利子。  
×【みくしげ殿】女官の呼名。



殿は、相當な歌人で、安嘉門院におつかしてゐる。お別れに上つたが、御不在であつたから、おたよりの細々と御返事に出發の日を知らなかつたといつて

久我の太政大臣の御むすめであつて、この方もは、こがの太政大臣の御むすめ、これも續後撰集から引續いて、二三度の、びの、家(い)のうぢぎきにも、歌あまたはいられた方だから、相當有名な歌人である。入り給へる人なれば、御名(おん)もかくれなくこそ。今は安嘉門院(あんか)に、御方(おた)とおつかへしてゐる。鎌倉への旅行を企て、明日出發といつて、御暇乞のために、北白河殿へまゐりましたが、居られなかつたので、明日(あ)とて、まかり申しのよしに、北白河殿(の)へまゐりしかど、見えさせ給はざりしかば、こよひばかりのいてたち物さ

【聞ゆるは】申す【方】は。【こがの太政大臣】「こが」は「久我」、源通光公。【續後撰集】後醍醐院の勅によつて、爲家の撰んだ歌集。【家々のうちぎき】諸家で聞いたものを書きとめたもの、即ち私撰の歌集。【なくこそ】なくこそ「あれ」。こそ「の係(かかり)だけで止めたので意味は強く聞える。【安嘉門院】式乾門院の御妹で、後堀河院の准母。御名は邦子。【御方とて】おかたといつて。「御方」は貴人に仕へてゐる者で、殆んど呼び名のやうになつたのであらう。【さぶらふ】貴人につかへてゐる。伺候する。【あづまち思ひ立ちし明日とて】鎌倉との決心をし「そして」いよいよ明日「出發」といつて。【まかり申し】暇乞ひ。

残念がつて来た。た。ま。た。御返歌を申した。二人の贈答をこまごまと叙した。

出發のことさへ申し上げおほせず、急わがしくて、かくとだに聞えあへず、急ぎ出たがそれにも、氣がかりなので、おたより申し出てしにも、心にかかりて、おとづれ聞ゆ。草の枕ながら年さへ暮れぬる心細さ、雪の絶間なきほど、かき集めて、消え入る思ひでながめる空もわたしの心のやうに暗くなつて、遠い都の空もどうやら雪になつていくやうである。ほどは雲もそ雪になり行く。直ぐその御返事へ来たがそれなど聞えたりしを、立ちかへりその御返事(おんかへ)、「たよりあらばと、心がけまゐらせつるを、今日は師走(しよす)の二十二日、

【よしに】の故で。のために。【北白河殿】安嘉門院の御所。京都の東郊にあつた。【見えさせ給ふ】「させ」は尊敬の助動詞。お見えになる。【物さわがし】何さなく氣がせいで「かくとだに」鎌倉へ行くことさへ【聞えあへず】申し上げおほせぬ。【おとづれ聞ゆ】お便申し上げる。【草の枕ながら】旅寝をしながら。旅行中に。【年さへ】年まで。【雪の絶間なき】「かき集めて」集めて書いて。【消えかへり】消え入る思をして【ながむる】物思ひながら見つめてゐる。【かきくれて】暗くかきくもつて。【ほどは雲も】距離のほどあひは雲もである。遠い都の方は【立ちかへり】すぐに。【たよりあらばと】そちらへのたよりがあつたら「お手紙を上げよう」と。【まゐらす】他の動詞につけて敬語とする語。【師走】(發音シヨス)。十二月。



やつと御手紙を手にして、お珍しくて嬉しくて、まづ何ふみ待ち得て、めづらしく嬉しき、まづ

もかも細々申し上げたう御座いますのに、今宵は陸下

の御方違へのためのおみゆきの事なので、御方違(おんかたが)への行幸(きやう)の御上(おん)とて、

大混雑の際でして、心の中に思ふだけも出来るかごまぎるるほどにて、思ふばかりもいかか

うかと残念に思ひます。御旅立ち(おんたび)は明日(あした)とおつしやつて

と本意(ほんい)なうこそ。御旅(おんたび)明日(あした)とて御

まみりありける日しも、峯殿(みねの)の紅葉見

でやつと御出發を伺ひました。な

どやかかくとも御たづねさむらはざりし。

【ふみ待ち得て】待ちに待った御手紙を手にして。

【方違(へ)出かける時、或方角を思みさけて、よい方に出で一夜宿つて、目的の方へ向ふやうにするをいふ。

【行幸】天子のお出まし。(こゝは御宇多天皇)

【御上】御事といふほどの意。

【まぎるるほど】混雑の際。

【思ふばかりもいかか】思つてるだけでもどうであらうか、ととても書けまい」と思はれて】

【本意なうこそ】本意なうこそ(侍れ)。不本意で御座います。

【日しも日に丁度。】しも語を強める助詞。

【峯殿の紅葉見】峯殿の北白河村の御別邸の紅葉見物。峯殿は關白藤原道家。

一通り悲しんだだけで御座いませうのに(「まあ」)ひとかたに袖やぬれまし旅衣、

立っ日を聞かぬうらみなりせば。」

さてまわそれから、「都は雪になり行くやうです」と推量

して詠んだ歌の返歌は、

かきくもつて雪の降る空を眺めるにつけても、

ほどは雲のあはれをぞ知る。

とあれば、このたびは、また、「立っ日を

知らぬ」とある歌の返歌だけをさしあげることにした。

る。

【かくとも】暇乞に来るとも。「も」は感動詞。

【たづねさむらはざりし】「私の都合を前以つて」きいて下さらなかつたか。「し」は「き」の連體形で上の「や」の結び。

【ひとかたに】一通りに。普通に。

【袖やぬれまし】袖がぬれるでせう。「まし」は「や」の結びであらう。

【立っ日を知らぬうらみ】立っ日は前の旅衣「たつ」と續き、「うらみ」は裏見で、衣の縁語。

【せは】事實に反する假定をいふ。かりにかうであつたとしたならば。

【おしばかり】推察。

【かきくもつて】空が暗くもつて。

【ほどは雲のあはれ】距離は遠いみ空にゐるあなたのあはれさ。【このたびは】この次は、即ち「さきにみくしげ殿から返事が来たから」今度は「また……」



御勝手にまあ何をおうらみなさる必要がありませんか、  
心から何(な)うらむらむ旅衣、

わたしの出發の日まで知らないふりしてゐられるあなたがお  
立つ日をだにも知らず顔にて。

×【心から】求めて。ここは、心のそ  
こからの意ではあるまい。  
【何うらむらむ】何をうらむことが  
ありませんか、その必要はあり  
ません。  
【知らず顔】知らぬふり。

【参考】

【みくしげ殿】禁中の貞観殿中にある殿舎の名で、もとは櫛笥の調度を置く所であつたが、  
後には御装束所となつた。其の長官の別當をみくしげ殿といふに至つた。

【あづまち思ひ立ちし】思ひ立ちしは、くぼだて。決心。しは佐戀の「す」の變化で中止法。  
【草の枕】昔は旅行をするに草を結んで枕としたところから、後の世も旅寝のことを草枕と  
いふに至つた。

【ほごは雲ぬ】「ほご」は、ほごあひ・遠さ・距離の意で、その遠いほごあひは雲居といふ意で  
あらう。佐野氏はいろ／＼と用例をあげて、「ほごは雲ぬ」は、古來一つの熟語のやうに使  
はれて、本書のも「遠き雲居」「遙けき空」位に解すればよいといつてゐるが参考すべきで  
ある。

【雲ぬ】は、轉々として多くの意味をなしてゐる。即ち雲のある所。大空。雲。遠く又高  
く離れた所。禁中。皇都等。

【まゐらす】差し上げる。他の動詞に添へて敬意をあらはす語。

【心からの一首】これは失禮のやうないひ方であるが、無論戯れたので、親しい間には、か  
へつて親しみを増すものである。

【批評摘要】

みくしげ殿との應答は、前の紀行文の簡潔なのに引きかへ、細々と互に述べられてゐる  
、これを唯一の樂としてゐられるかと思ふと、旅寝のうさが偲ばれる。「草の枕ながら、年  
さへ暮れぬる心細さ、雪のひまなさなど書き集めて、『消えかへり眺むる空も云々』」旅愁、  
實に斷腸の思ひがある。「たちかへり、其御返事」、このうれしさ、喜ばしさ、余以外に察し  
得る者なし、といひたいぐらゐ。  
終の戯れの一首は、喜び極つて、我知らず叫んだのである。其親しみのほごが、察せられ  
てゆかしい。

【若い讀者への希望】

(一) 殊に婦人に多いやうであります、親しみの度が過ぎて、昨日の友は、今  
日の仇となるやうなことが、往々あるやうに思はれます。  
この二人の間の親しみはうらやましいやうです。旅愁を訴へてみます。慰め  
てみます。戯れをいつてみます。それで上品です、詞に調子に。



(二) 重要語句としては「家々のうちぎきさぶらふ・まかり申し・聞えあへず・おとづれ聞ゆ・草の枕・雪のひまなき・消えかへり・ながむる・かきくれて・ほごは雲ぬ・雲ぬ・たちかへり・まぬらす・師走・方違へ・行幸・まざるほど・思ふばかりもいかかき・本意なるこそ・日しも・聞え候ひしか・なごや・たづねさむらはず・ひとかたに・袖やぬれまし・せば・かきくらし・心から・知らず顔」の三十語。

4、あかつき便ありと聞きて

4、姉君に子供を頼むついでに近況を知

翌早朝都への便宜があると聞いて、夜ごほし起きあかつき便(り)ありと聞きて、夜(と)もすがら起きあて、都のふみども書くうちに、殊にへだてなく、あはれに頼みかはし

4【便(たより)】都への便宜。  
【夜もすがら】終夜。夜ごほし。  
【都のふみ】都への手紙。  
【殊に】特別に。  
【へだてなく】わけへだてなく。最も親密に。  
【あはれに】情も深く。  
【頼みかはしたる】互に頼みにした

らせた姉に磯物を送つたりしたことを記した。

君に、幼い爲相爲守のこと、いろいろ書いたる姉君に、幼き人々のこと、さまざまに書きやるほど、例の浪風(なみのかぜ)激しく聞ゆれば、ただ今あるままの事をぞ書きつけける。

【姉君】中の院の中將の夫人をいふこと、次に見える。  
【幼き人々】爲相・爲守を指す。  
【書きやるほど】「ほど」は、時。  
【例の】「例」の。  
【ただ今あるままの事】今あるままの事實。  
【涙も文もかきあへず】悲しきにとめどない涙もかき拭ひおほせず、そのために手紙も書ききれない。

悲しくて終夜涙も拭ひ切れず手紙も書かれません、夜もすがら涙も文もかきあへず、

磯(いそ)越す風にひとり起きあてて。

【磯】いそへ。海岸。  
【同じさまにて】「姉にやつたと」同様にして。

また、同じさまにて、故郷(ふるさと)には、戀ひしのぶ弟(おと)の尼上(あま)にも、ふみたてまつるとて、磯物(いそもの)などはしばしも、いさ

【弟の尼上】妹なる尼上。「おとうと」は、おとひと(弟人)の音便で、古くは女にもいつた。「尼上」は、尼さんといふほどの意。  
【磯物】磯邊にある海藻類をいふ。  
【しばし】切れ切れ。  
【いささか】少しばかり。少々。



（淡い）……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、  
【淡い】……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、

（淡い）……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、  
【淡い】……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、

（淡い）……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、  
【淡い】……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、

（淡い）……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、  
【淡い】……海岸、  
【同じように心細いかな、】  
【弟の足】妹の足に引かれて、



集め包んで、  
さか包み集めて、

何といふことなしに海草など拾ふ遊びのうちにも、  
徒らにめかり鹽焼くすさびにも、

住みなれた故郷の「妹の」尼さんが戀ひしい。  
戀ひしや馴れし里のあま入。

【すさびにも】すさびをするにつけても。「すさび」は手なぐさみ。あそび。

【戀ひしや】「や」は感嘆詞。

【馴れし里】住み馴れた里、即ち故郷。

【あま入】「めかり鹽やく」の縁語の「海人(あまこ)に、妹の「尼」をかけた。

【参考】

【めかり鹽やくすさび】ここでは、あまり嚴密な意味ではない。海草を刈り取つたり、鹽をやいたりする海人のするやうなことの意。

【批評摘要】

「あかつき便ありと聞きて、よもすがら起きぬて、都の文ども書く」當時の通信の困難。不便、今更ながら思ひ知られる。従つてまた、手紙を手にした喜びのほども、今の人の想像の及ぶところではあるまい。

「夜もすがら」の歌、さほどとは思はれないが、然し、夜中、ひとり文書きながら、磯越すあらしを聞く淋しさ、悲しさが、遺憾なく伺はれる。  
「徒らに」の歌も、かりそめの、磯邊のなぐさみにも、いとしい妹を思ふうるはしい情があふれてゐる。

【若い讀者への希望】

(一) 文章を読むには、自分を作者の地位におかないと、その文章の眞意を理解することも、まして、味ふことも出来ません。この前半を読む時には、風あらし淋しい夜半、ただひとり讀書したり、友を思つたりした經驗を、思ひ浮べて御覽なさい。後半を読む時には、海岸に遠足でもするか、修學旅行でもした時、弟でも、妹でも、好きさうな玩具でも、目にとまつた時のことを思ひ浮べて御覽なさい。そして始めて、この文は、理解が出来ます、味ははれもします。

(二) 重要語句としては、「頼みかはしたる・書きやるほど・例の・涙も文もかきあへず・磯・弟の尼上・磯物・ほしはし・いささか・いたづらに・めかり鹽やく・す



5、ほど経てこのおとどひ

しばらくたつて、この姉妹の返事が来たがそれが非常にあ  
ほど経て、このおとどひ二人（ふた）のかへ  
はれ深くて、  
見ると、姉君のは、  
りごといとあはれにて、見れば、姉君、  
お手紙を拜見いたしますと思はず涙をかけました。  
玉章（たまき）を見るに涙のかかるかな、

磯を吹き越す風の響を聞くやうに思はれて。  
磯越す風は聞く心地して。

この姉君は、  
中院（なかの）の中將（ぢやう）と聞え

し人のうへなり。今は三位（みい）入道（にゅうだう）とか。

「其夫人は」同じこの世ながら夫とは遠ざかりはてて、  
別（わか）に佛道修業  
同じ世ながら遠ざかりはてて、行ひぬた

5【ほど経て】よほどたつて。

【おとどひ】兄弟。はらから。

【玉章】手紙。ふみ。

×【中院の中將と聞えし人のうへ】

「中院の中將」は、いかなる人が

詳かでない。「聞えし人」は、申

した人。「うへ」は、貴い人の夫

人。おくがた。

×【三位の入道とか】「三位の中將

を」三位の入道とか「いふ」。

【入道】佛道に入つて修業する者。

又剃髪して衣を染め、なほ家に

ある俗人をもいふ。

×【同じ世ながら遠ざかりはてて】

其夫人は同じ此世にゐながら、

夫とは別れてしまつて。

【行ひぬたる人】佛道修行をしてゐ

。と二  
人の姉  
妹のた  
よりの  
叙した

をしてゐる人だ。その妹の君も  
る人なり。そのおとうとの君も、一めかり

「めかり鹽焼く」の歌の返事として、  
鹽焼く」とあるかへりごと、さまざまに

を書きつけて、「人を戀ひ慕ふ涙の海は、  
書きつけて、「人戀ふる涙の海は、都にも

も枕の下にたたへてあります。」など、  
枕の下にたたへて。」など、やさしく書き

奥に次の歌が、  
て、

私ども尼もめかり鹽焼く蟹（あま）のやうに御一緒に浦に住んだらば、  
もろともにめかり鹽焼く浦ならば、

「たとへ濱邊でも」却つて袖に涙の涙をかけますまうに。  
なかなか袖に涙はかけじを。

この妹君も、  
この人も、安嘉門院（あんか）にさぶらひしな

り。つつましくすることどもを、思ひつづ

【おとうこの君】妹君。さきの尼上

を指す。

【人戀ふる涙の海】人を戀ひ慕つて

涙の多く出ることを海にたとへ

た。

【都にも】「たたへて」の語に續く。

【枕の下にたたへて】枕の下にたた

へて「ある」。即ちそちらでも終

夜濱風の爲めにぬれられぬといは

れるが、こちらにも終夜泣く涙

の海が枕の下にたたへてあるこ

いふことである。

【もろともにめかり鹽焼く浦なら

ば】蟹（あま）となつてめを刈り鹽

を焼いて御一緒に浦に居るなら

ば即ち二人とも尼だから、蟹に

たとへていつたのだ。

【なかなか】「浦ではぬれるが當然

だが」却つて。

【を】ものを。

【つつましくする】つつしみはばか

る。つつみかくす。

【思ひつづれ】思ひつづけ。



けて書いてあるのも、大層しほらしくも、  
らねて書きたるも、いとあはれにも、  
を  
白くも思はれる。  
かし。

面  
【書きたるも】書いてある「の」も。  
【あはれにも】しほらしくも感心に  
【をかし】面白い。

【参考】

【中院の中將と聞えし人のうへ】この「うへ」を「身のうへ」などいふ「うへ」の意と解した人もある(三枝氏)。すると、「中將」は「この姉君」其人の名となる。ちよつと、かゝげて置く。  
【三位の入道とか】これは、「中院の中將云々」といつて来て、ちよつと思ひ出したやうな風に書きつけたので、カツコの中に入るべきものと見たがよからう。即ちさきの中將をいふのだ。

【同じ世ながら遠ざかりはてて】これも、夫と遠ざかりはてて、と解する者も、この世俗から遠ざかると解する者もある。とにかく、ここまで三行は、はつきりしない文である。

【批評摘要】

姉妹の返歌に、簡単ながら二人の、身の上まで記したのでも、其返事に、いかに満足したかが伺はれる。いつも、姉には敬意を拂ひ、妹の方には、親しみがあふれてゐる。

【若い讀者への希望】

- (一) 文が不完全だからといへば、それまででありませんが、ちよつと、古い國文には、(漢文などにも澤山ありますが)なかなか、解し兼ねる所があります。
- 「この姉妹は、中院の中將と聞えし人のうへなり。今は三位入道とか。同じ世ながら遠ざかり果てて、行ひぬたる人なり。これは、いろ／＼に考へられます。
- 1、この姉君は、中院中將と申す人の奥方である。「中將は」今は三位入道とかいつてゐる。「姉君は夫と」同じこの世に生きてゐながら、互に遠ざかつて佛道を修業してゐる人である。
  - 2、この姉君は、中院中將といつた人である。「姉君は」三位入道とかいつてゐる。同じく現世にありながら「世人と」全く離れて、佛道を修業してゐる人である。
  - 3、この姉君は、中院中將と申す人の奥方である。「姉君は」三位入道とかいつてゐる(以下2に同じ)。
- まだ、幾様にも考へられますが、とにかく、解しにくいといふことを知つていたゞきたいのです。
- 正しい解釋は、興にのつて通讀する時に得られますが、それでは、理解が出来ない時がある。其時には先づ文章を文法的に解して見る。次に、前後の關係を考へて見る。文勢を見る。筆の僻を見る。歴史的の事實を見る。これら



を考へ合せて知るのではありません。若し、これが得られなければどうするか。解釋力を養ふを目的とする多くの若い讀者としては、いづれにしても一應、理窟の立つた解釋までして置く必要があります。解せられないならば、この理由のために解せられない。といふところまで進めて置けばよいのです。かうすれば其文の正解は別として、解釋力は養はれます。すぢの通らぬ、曖昧な解で止めて置くやうでは、幾冊讀んでも、實力が付きません。この點は、大に考へなければならぬ所でありませぬ。

(二) 重要語句としては「ほご経て・おとごひ・玉章・入道・行ひぬたる・なかなか・な・つつましくする・あはれにも」の九語。

6、程なく年暮れて

問もなく今年も暮れて、新春になつてしまつた。程なく年暮れて、春にもなりにけり。

空は霞が立ちこめてぼんやりして、霞こめたるながめのたどたどしさ、谷の戸(こ)は隣(り)なれども、鶯の初音(はつ)だにも

6、旅ながら春を迎へたもの、谷の戸に近いこの住

6【春にもなりにけり】建治四年の一月になつてしまつた。舊曆の春は一月二月三月。

【霞こめたる】霞の立ちこめた。

【たどたどしさ】ぼつきりせぬこと。ぼんやりしてゐること。

【谷の戸は隣なれども鶯の初音だにも音づれこず】谷の戸は谷の入口。昔の人は、鶯は冬の問谷

音(お)づれこず。思ひ馴れにし春の空は、しのびがたく、昔の戀ひしきほどにしむ

また都のたよりありと告げたる人あれ

ば、例のところどころへの文(ぶ)書くうち

に、「いざよふ月」とおとづれ給へりし人の御許へ、

おほろなる月は都の空ながら、

まだ聞かざりし波のよるよる。

そこはかとなきことどもを書き聞

など、

なご、

居にも鶯の初音さへ聞えぬ。都の春の戀しさに「朧」の一首を送る。返歌もすぐに來た。旅愁を訴へてゐる。

これまで馴れ親しんでた都の春の空は、たへ難く、當時の事がなつかしく思はれる時丁度、

また都への便宜があると告げてくれた人があつたから、

いつもの方々へ差し上げる手紙を書いたそのうちに、

「いざよひの月や後れぬ」をお歌を下さつた人の所へ、

「おほろなる月は都の空ながら、

「まだ聞かざりし波のよるよる。」

「そこはかとなきことどもを書き聞

など、

なご、

の入口。昔の人は、鶯は冬の問谷にかくれて、春になつて谷の戸を出て來て鳴くものと思つてゐる。それで谷の戸は近いがまだ鳴かぬといつた。

【だにも】さへも。なりとも。

【音づれ】音がする。たづれる。

【思ひなれにし】これまで馴れ親しんでゐた。

【しのびがたく】こらへられぬ。

【昔の戀ひしきほど】昔の事の戀ひしい時。

【いざよふ月】さおとづれ給へりし

「ゆくりなくあくがれ出でし十

六夜」の歌をくれた人。(一三八)

【おほろなる月は都の空ながら】朧

の春の月は、かつて都の空でながめたのと變りはないが。

【波のよるよる】波の「寄る」を「夜」

にかけた。

【そこはかとなき】これさといふこと

もない。何のあてごもない。

【書き聞え】書いて差し上げ。



確かな方からこちらへ届けてくれたので、  
えたりしを、たしかなる所より傳はりて

、御かへりごとを、いたう程も經ず待ち  
見いたしました。

見たてまつる。

【たしかなる所より傳はりて】或る  
確かな人の手から、自分の所へ  
傳はつて。  
【程も經ず】固もなく。  
【待ち見たてまつる】待ちうけて拜  
見した。  
【寢られじな】安眠も出来ないであ  
らうよ。「な」は感嘆の助詞。  
【都の月を身に添へて】旅の空なが  
ら、都で見たままの月を始終身  
から離さずながめて。  
【馴れぬ枕】馴れぬ旅寢の枕。「寢  
る」身にそへ「枕」よる(夜)  
皆それぞれ縁語となつてゐる。

【程なく年暮れて、春にもなりにけり】さすらつき軽く書き出して來てゐるが、このうち  
にたへ難い感慨が含まれてゐる。「思ひ馴れにし春の空は、しのびがたく」など、「ごに力  
があるのか知らないが、ただ、胸をしめられるやうな氣がする。臘の月はありながら  
、夜な〜ひさり波の響に枕をそばだてればならぬ、何たるうらみであらう。」おぼるなる  
の」一首、其すがたともにすぐれてゐる。

【批評摘要】

【若い讀者への希望】  
(一) 住めば都で、どんな山奥でも、海のはてでも、故郷はごよいごいころはあり  
ません。阿佛尼は目的のために、この故郷を去つて、既に四ヶ月目、然も、  
旅の空で年を暮したのです。いつ歸られるともわかりません。思ひ起します  
「このお嬢の水が氷れば、冬の休だ」「この蓮が開けば夏の休だ」と苦しく待  
つたことを、いかに目的のためさはいへ、なつかしい父母、はらからる後に見  
て、都に出られる、男女の學生たちにも、今もかうしたなげきはあつて御座  
りませう。その心を以つて、本節を讀んでいただきたいのです。味はつていた  
だきたいのです。「おぼるなる月は都の空ながら」「寢られじな都の月を身に  
添へて」どうしても人ごととは思はれません。重ねて申します、作者の身に  
つて、讀め、そして味はへと。

(二) 重要語句としては、「春にもなりにけり・霞こめたる・たごたごしき・谷の戸  
・だにも音づれ・思ひなれにし・そこはかさなき・書き聞え・待ち見たてまつ  
る・寢られなじな」の十一語。

7、權中納言の君は

權中納言爲子の君は、  
權中納言(うなごん)の君は、まぎるることな

7、爲  
子の君

7「權中納言の君」爲子の女、爲子。  
「まぎるることなく」他に心がまぎ  
れることなく。「一心に」



は、歌に熱心だから、急ぐ使に頼んで、手紙に五首ばかり添へて送つた。間もなく返歌が来た。さ爲の子さの二回目の贈答の次第を記した。

から、  
く歌を詠み給ふ人なれば、このほど手習  
かいた歌ども集めて差し上げた。  
【私の所は】  
【慰らひ】したる歌ども書き集めて奉る。「海近き  
海へ近いから、貝などを拾ふ時があつても、名草の濱でないか  
所なれば、貝など拾ふ折も、名草【名草】の濱  
ら慰らひので、やほり死んじまつてもさうな心地がしまして。」  
ならねば、なほなき心地して。」など書き  
な書して「歌は」、

ごうにかしげらくでも都を思ふ悲しみを忘れたいが、  
いかにしてしばし都を忘れ貝、  
寄せ来る浪の絶間のないやうに私の心は砕けてあります。  
浪のひまなく吾ぞ砕くる。  
少しも知らなかつた濱邊の山の風も梅が香を吹き送ることは、  
知らざりし浦山風も梅が香【か】は、  
都に於ける春のあけぼののそれと同じであります。  
都に似たる春のあけぼの。

【このほど】この頃。  
【手習したる歌】手習のために書いた歌。手なぐさみに書いた歌。  
【名草の濱ならねば】「名草」に「慰む」をかけた。「名草濱」は、紀伊の國にある。  
【なき心地して】「貝が」ない心地して。生き甲斐がないやうに思はれて。  
【いかにして】ごうかして。  
【都を忘れ貝】都を思ふを忘れるを「忘れ貝」にかけた。この貝は蛤の一種。  
【浪のひまなく】「の」は、の如く。  
【吾ぞ砕くる】吾が心がくだける。いろ／＼に思ひなやむ。  
【浦山風】濱邊の山を吹く風。  
【梅が香は】「が」は、の、の意。ここでは、梅の香を吹き送ることはの意。

花ぐもりの空をくぐり跳めてますと吹き来る浦風のために、  
花ぐもりながめて渡る浦風に、

霞が動かされて朧月の景色になりました。  
霞ただよふ春の夜の月。

東路の磯邊に立ち並んでる松のすき間から、  
あづま路の磯山松【いそや】のたえ間より、

波までが咲き匂ふ花のやうに見えます。  
波さへ花のおもかげに立つ。

都のあなたがかりにも私のこゝを思ひ出して下されば東路の、  
都人【みやこ】思ひも出てばあづまぢの、

花は如何さ位はおたづね下さうのに「まあ残念なことよ。」  
花やいかにとおとづれてまし。

など、ただ筆にまかせて思つたままに書いて、  
急など、ただ筆にまかせて思ふままに、急  
ぎの使といふので、思ふやうにも書き盡さない手紙であつたが、  
ぎたる使とて、書きさすやうなりしを、  
また間もなく御返事下さつた。  
また程經ずかへりごとし給へり。「日頃の  
常々ごう

【花ぐもり】春、櫻の花が咲く頃空がどんより曇るそれ。ただ「花」といへば、多く櫻花のこと。  
【ながめて渡る】ながめてゐる。「渡る」は、ながめ「わたす」に、浦風の吹き「渡る」をかけた。  
【ただよふ】ふは／＼と浮びまはる  
【あづまぢ】東海道。東國。  
【磯山松】磯邊に生えてる松。  
【たえ間】ならべる松のすき間。  
【花の面影に立つ】花のやうな風ふうに見える。  
【都人】都にある人、爲子をさす。  
【おとづれてまし】たづねてくれようのに「實はさうでなく残念だ」  
【書きさすやうなりしを】中途で書きやめて思ふやうに書けなかつたのを。「さす」は、讀みさし。飲みさし。「さし」で、中途でやめる意。



かと思ひました心配も、このお手紙でさつぱりと晴れた心  
おぼつかなさも、このふみに霞晴れぬる  
地になつて。」など書いて「返歌が添へて」ある。  
心地して。」などあり。

たよりにしてお待ちして居りますよあなたが鎌倉へ行かれた、  
頼むぞよ汐干(しほ)に拾ふうつせ貝、

甲斐があつてまた都へお歸りになる時を。  
かひある波の立ちかへる世を。

まあ比へてお察し下さいあの霞のうちの春の月と、  
くらべ見よ霞のうちの春の月、

むすばれてる私の心のさまの同じいことを。  
晴れぬ心は同じながめを。

白浪の色と同じい色をして散る花をこちらから、  
しら浪の色も一つに散る花を、

思ひやつただけでもそれが目の前にちらつきまふ。  
思ひやるさへ面影に立つ。

東國の櫻を御覧になつてもこちらをお忘れしないなら、  
あづまぢの櫻を見ても忘れずば、

【おぼつかなさ】不安心に思つてた

こと。

【この文に】には、よつて。

【頼むぞよ】おたのみしますよ。

【汐干に拾ふうつせ貝】かひある

をいふための序詞。

【うつせ貝】かひがら。

【かひある波の立ちかへる世】鎌倉

まで行つた甲斐があつて再び都

にかへる時を、寄せてはかへす

波にたとへた。

【晴れぬ心】むすばれて晴々せぬ心

。心配する心。

【同じながめ】見たまゝの同じい

こと。

【しら浪の色も一つに散る花】白浪

の色と同じ白い色に散る花。

【思ひやるさへ】この「さへ」は、だ

けでもの意。

【面影に立つ】眼前に見えるやうに

思はれる。

都の花のこともあなたもおたづねなさるのでせうのに。  
都の花を人やはまし。

【人やはまし】「忘れないとしたならば」人がたづねるであらせうのに「實はたづ  
ねもしないまゝ」をみるまお忘れになつたであります。「人」は暗に阿佛尼を  
指してゐる。

【批評摘要】

本節は、読んで見て、別に心を引かれるやうなことがなかつた。然し其中で、「花ぐもり」  
の歌と「あづまぢの磯山松」の歌とは、繪にして見たいやうな気がした。「花ぐもり」ながめ  
て「風に」「霞たゞよふ」「春の夜の月」それから、「東路」「磯山松のたえ間」「波」「花の面影」  
と、かう思ひ續けて見ると、すつかり繪の中の人となつてしまふ。

【若い讀者への希望】

(一) 筆を執つて、ここまで来ますと、さながら歌集にても、接してゐるやうな  
氣がします。なるほど、ここまでも、九十二首あります。さすがに、其家  
にあつて、歌道の爲めに、鎌倉下向を決行せられ方の作さうなづかれます。  
歌の良非はしばらくおいて、とにかく、歌に志す方は申すに及ばず。一通り  
歌のことを知りたい方には、よい参考書だと思ひます。



(二) 重要語句としては、「まぎるることなく・このほど・涙のひまなく・浦山風・梅が香・花ぐもり・ただよふ・磯山松・たえ間・花の面影に立つ・音づれてまし・書きさす・日頃の・に・うつせ貝・思ひやるさへ・面影に立つ・忘れずば・人よこはまし」の十八語。

8、彌生の末つ方

三月の末の頃、  
彌生(やよひ)の末つ方、わかわかしきわらは

一日おきに二回も起ることになった。

やみにや、日まぜ(ひまぜ)に起ること二(た)たびに

不思議に、

なりぬ。あやしう、しをれはてたる心地

しながら、三度(さんど)目が起らうとするあけがた起きてぬて、

佛前で、

きみて、佛(ほとけ)のおまへにて、心を一つに

きみて、佛(ほとけ)のおまへにて、心を一つに

8【彌生】陰曆三月の異稱。

【末つ方】末の頃。「つ」は「の」の意。

×【わかわかしきわらはやみ】輕症の瘡(かさ)。「わか」は成熟しないこと故、重からぬにいつた。

【わらはやみ】「おこり」瘡といふ、隔日に發熱して振ふ病。

【日まぜ】一日おき。

【あやしう】「あやしく」の音便。不思議に。妙に。

【心を一つにして】一心に。専心に。

【法華經】妙法蓮華經の略。

法華經を讀みました。その靈驗であらして、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

その靈驗であら

して、法華經(ほふく)を讀みつ。そのしるし

法華經を讀みました。

返し返  
歌が來  
た。自  
分に御  
經の靈  
驗を知  
つて一  
首詠ん  
だ。こ  
れで爲  
子の君  
さば三  
回目。

8、三  
月末頃  
のおこ  
りも、  
法華經  
のお蔭  
で直つ  
た。こ  
のこま  
を爲子  
の君に  
知らせ  
たら折



と申してやりましたのを、驚かれて、御返事を直ぐに下さると聞えたりしを、驚きて、かへりごと疾はやれた。  
(三)くし給へり。

消えて死ぬことはありますまい長年歌道に盡して、消えもせじ和歌の浦路うらみちに年を経て、

益々光榮を添へられた方ですから神も守られるので光を添ふるあまの藻鹽火ほし。

法華經の效驗も甚だ尊くて、御經みきのしるしいと尊くて、

心強いことよ始終身につき添ふ友となりてしまひました、頼もしな身に添ふ友となりけり、

靈妙な法華經の衆生をすくふといふ約束が、妙たなる法りの花のちぎりは。

【頼もしな】たのもしいことよ。心丈夫であることよ。「な」は感嘆の助詞。  
【身に添ふ友と】始終わが身をはなれずについてゐる友のやうなもの。  
【妙たなる法り】靈妙な。  
【法のはなのちぎりは】「法の華」は、法華經。「ちぎり」は約束で、法華經がひろく衆

【聞えたりしを】申してあげたのを。  
【疾くし給へり】「疾く」は早く。  
【し】左變の「す」の連用形。  
【消えもせじ】「藻鹽火は」消えもしまい。

【和歌の浦路に年を経て】長い間、和歌の浦路の道にあつて。これは「あまの藻鹽火」のことをいって、阿佛尼が長年歌道にたづさはつたことが含まれてゐる。

【光を添ふるあまの藻鹽火】海人がたく藻鹽火が光を添へることのうちに、阿佛尼が歌道に高き光榮あるを含めた。

【御經】法華經を指す。

生をすくふといふ約束。この句は、初句の「頼もしな」に續く。

【参考】

【わかわかしきわらばやみ】これには前に解いた外に、稚々しき癩病。老人に不似合なる童などのなすべき様なる病の意とも解くが變である。  
一本には「わなわなしき」とある。わな／＼しきは、發熱のために身體のわななき(戰慄)ふるふをいふ。これも感心が出来ない。

【批評摘要】

始より五六行 癩病のことを記した條、筆の自然に進められてあるところがよい、贈答の文も、歌も、また例のと思はれて、さほごにも思はれぬ。

【若い讀者への希望】

- (一) ここには、阿佛尼の佛教に對する信仰の點が見えてゐます。
  - 1、佛前で一心に法華經を讀んで全快した。
  - 2、さすが、御法のしるしにや、今日まではかけごめて。
  - 3、御經のしるしいと尊くて、
- 頼もしな身に添ふ友となりけり妙なる法の花のちぎりは  
どうお考へになりますか。



(二) 重要語句としては、「彌生(やよひ)・わらはやみ・あやしう・しるし・名残なく・さすが・風に消えなば・誰かは見まし・疾くす・頼もしな・妙(たへ)なる・法のはなのちぎり」の十一語。

9、卯月のはじめつかた

四月の始頃、  
卯月(うづき)のはじめつかた、  
便(たよ)あれば、

また榎中納言の君のもとへ、  
また同じ人の御(お)もとへ、  
こそこの春夏(はる)なつ  
さいふこそなごを書いて(奥に歌を添へた)、  
の戀ひしさをなご書きて、

見し世こそ變らざるらめ暮れはてて、

春より夏にうつる梢(すずみ)も。

夏衣(なつぎ)はやたちかへて都人(みやこ)。

9【卯月】陰曆四月の異稱。

【はじめつかた】始の頃。

【同じ人】榎中納言の君を指す。

【こそこの春夏】去年は共に都にゐてお目にかかれたのにこそその折の戀ひしく思はれること。

【見し世こそ變らざるらめ】去年見

たつた都の様も今年さ少しも變

らないでせう「さ思ふこそその時

がいこそ戀しく思はれる」

【梢】木の末の義で、木の幹又は枝

のさき。

【夏衣】夏に着る着物。四月一日に

着かへるそれを更衣(ころもか)といふ。

【たちかへて】「衣を」裁ち「縫ひ」か

へて。着物を新に造りかへて。

9、都戀ひし二首を送つた。この歌の返しに、實方中將のこゝろなどもある。これが榎中納言の

贈答の四回目。終りに東國に四月の時鳥の聞かぬ念を述べてゐる。

今頃は山に鳴く時鳥を待つてゐられることせう。  
今や待つらむ山ほととぎす。

それに對して返歌があつた。  
そのかへりごとまたあり。

成るほど草も木も去年共に見たのさ變りませんが、  
草も木もこそ見しままに變らねど、

其當時の心持はしないで悲しう存じます。  
ありしにも似ぬ心地のみして。

それから「時鳥のお尋ねに對しては次のやうに、  
さて「ほととぎすの御尋ねこそ、

おたづねもあつたから人よりも苦心して時鳥の、  
人よりも心盡してほととぎす、

たつた一聲だけ今日やつと聞きました。  
ただ一聲(ひとこゑ)をけふぞ聞きつる。

昔實方中將が五月まで時鳥の音を聞かないで、  
實方(かた)の中將(ぢやう)のさつきまで時鳥(ほととぎす)

聞かて、  
みちのくににより、「都には聞きふ

【山ほととぎす】山に鳴く時鳥。

【見しままに】見しまゝにして。其

見たままであつて。

【ありし】昔ありし。以前。

【さて】これは、手紙の文句とも見

られないこともない。

【ほととぎすの御尋ねこそ】時鳥の

御尋ねこそ「かくは申さぬ」。さ

きの歌の「いかに待つらむ山時

鳥」をお尋ねですが、それにつ

いては次の様にお答へします。

【心盡して】苦心して。

×【實方の中將】左近衛の中將藤原

實方。一條天皇の時、禁中で行

成に暴行したので陸奥に左遷せ

られて、其地で歿した。

【さつきまで時鳥を聞かて】「さつ

き」は、五月の異稱。この頃は

時鳥の最もよく鳴く時、然るに

それを聞かないで。

【みちのくに】陸奥の國。

【聞きふるす】澤山聞いて、聞きあ

く。



れたらう時鳥も、  
 陸奥にある身には聞かれないの  
 るすらむ時鳥(ほとと)、  
 關(せ)のこなたの身こ  
 が残念です。』  
 さか申された事がございませう。  
 そつらけれ。』とかや申されたる事の候ふ  
 なる。あなたのお尋ねもそのやうに思ひ出されて、  
 手紙が殊に優美に思はれました。』  
 なご書いてよこされ  
 の書(み)こそ殊にやさしく。』など書きてお  
 た。  
 こせ給へり。さるほどに卯月(うつき)の末にな  
 りければ、時鳥の初音(はつね)ほのかにも思ひ  
 絶えたり。人づてに聞けば、比企(ひき)の谷  
 所に、  
 澤山鳴いてるのを、  
 (つ)といふ所に、あまた聲聞きけるを、人  
 誰  
 か聞いたなごいふのを聞いて、  
 聞きたりなどいふを聞きて、

【關のこなた】關は逢坂の關。「こ  
 なた」は陸奥からいふ詞。だか  
 ら、逢坂の關以東の意。  
 【つらけれ】「つらし」の已然形。  
 【事の候ふ】「候ふ」は「ある」の敬語  
 。「ございませう」。  
 【そのためし】實方が陸奥で都を  
 羨やんだと同じ例ださ。  
 【この文】阿佛尼の手紙。  
 【殊にやさしく】殊にやさしく「思  
 はれ侍り」。  
 【おこせ給へり】よこされました。  
 【おこす】ばよこす。  
 【さるほどに】然るあひだに。その  
 うち。  
 【ほのかにも思ひ絶ゆ】ほのかにも  
 「聞かむさほ」思ひ絶ゆ。「ほのか  
 に」はかすかに。少しは。  
 【人づてに】人からだんだん傳へら  
 れて。うはさに。  
 【比企の谷】今、妙本寺の境内。比  
 企能員の邸のあまといふ。

ごく低い聲では比企の谷の時鳥が鳴いてるが、  
 しのび音(ね)は比企の谷(つ)なる時鳥、  
 空高く鳴きわたるのはいつのこゝでございませう。  
 雲(う)めに高くいつか名のらむ。  
 なごさ、  
 自分ひそりで思ふが、  
 何の效もない。  
 など、ひとり思へども、その甲斐もなし  
 元來が東國は、  
 「こゝは勿論」陸奥まで、  
 もとより東路(あづ)は、  
 みちのおくまで、  
 昔から時鳥のあまり聞かなかつたのであらう。  
 昔より時鳥まれなるならひにやありけむ  
 。それなら全然また鳴かないならそれでよい、  
 たまに聞  
 一(ひと)すぢにまだ鳴かずばよし、  
 稀にも  
 聞く人ありけるこそ、  
 人によつて區別するやうで、  
 それが氣が氣でなく恨めしく思はれる。  
 心づくしにうらめしけれ。

【しのび音は比企の谷なる時鳥】  
 「しのび音」は、低い聲で鳴く初  
 音。其初音は「ひくい」を比企の  
 「比企」にかけた。「ひくい」は  
 「ひきし」に同じ故。  
 【雲めに高く】雲のある大空高く。  
 【いつか】いつのまにか。  
 【名のらむ】「名のる」は時鳥の鳴く  
 にいふ(語義は勿論我が名をい  
 ふ意だが)。(實はほことぎすさ  
 いふ名も鳴き聲からである)  
 【東路】關東・東國の意。  
 【みちのおく】陸奥の國。  
 【稀なるならひ】稀なるが常のなら  
 ひさなつてゐる。「ならひ」は、な  
 らはし・例の意。  
 【一すぢに】全く。少しも。  
 【聞かずばよし】聞かないならばそ  
 れでよい「仕方はない」  
 【人わきす】人によつて區別する。  
 【心づくしに】心を盡して。心配で。  
 氣がもめて。  
 【うらめしけれ】「うらめし」の已然  
 形。



【参考】

【實方の中將——都には聞きふるすらむ】續後撰集夏の部に、「みちのくにの任に侍りける頃、五月まで時鳥聞かざりければ、都なる人に、たよりにつけて申しつかはしける。都には聞きふるすらむ時鳥關のこなたの身こそつらけれ」

【批評摘要】

日に日につのる懷郷の情は、かうした優雅な歌の贈答によつて、慰められてゐる。初夏の若葉を見ては、「見し世こそ變らざるらめ」と詠んでゐる。それから、この若葉から、「今や待つらむ山ほささぎす」といつてゐる。かう思ふは、自然である。心も姿も、わざとらしい所がなくてよい。權中納言の返歌に、實方中將のことまで添へてあるが、成るほど、暇な婦人には、殊に阿佛尼思ひには、これも尤ものことであらう。然し、讀者にとつては、少々うるさいやうな感じがする。

それから、「しのび音」の歌の次に、「ひさり思へども其甲斐もなし」とある。平凡な詞であるが、眞實を語つるところが、身にしみて面白い。又「人わきしけるよさ、心づくしにうらめしけれ」女ならば浮ばない一句である。これも文に書いて見れば、また面白く聞える。

【若い讀者への希望】

(一) 都を捨てて、己に半年、つひに若葉も、冷しい頃さになりました。私は、徒然草(十九段)の次の文を思はず口ずさみました。

「若葉の槍涼しげに繁り行くほごこそ、世のあはれも人の戀ひしさもまされど、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。」かう思ふさ、文學は、或點までは實用的のものである。物思ひに洗む人は、讀め、詠め。終日俗務に没頭する人は、讀め、詠め。正科に忙しい學生は、讀め、詠め。夏冬の休の學生は、讀め、詠め。

(二) 重要語句としては、「卯月・こそ・春夏の戀ひしさ・槍・山ほささぎす・さて・さつき・みちのくに・聞きふるす・事の候ふ・おこす・さるほごに・ほのかにも・思ひ絶ゆ・人づてに・雲ぬに高く・名のる・みちのおく・ならひ・一すぢに・鳴かずばよし・人わきす・心づくしに」の二十一語。



10、また和徳門院の新中納言

また今和徳門院に奉仕してゐた新中納言と申す方は、  
また和徳門院(くわとく)の新中納言(しんちゅう)と聞

ゆるは、京極(きやく)の中納言の御むすめ、

深草(ふか)の前(さき)の齋宮(さい)と聞えしに、父の

中納言定家卿が宮仕へに差し上げておかれたままで、

年(とし)経給ひにける。この女院(によう)は、齋

宮の御子(みこ)にし奉り給へりしかば、傳は

りてさぶらひ給ふなり。「うき身(うきみ)こがるる藻刈舟(もかり)」

藻刈舟(もかり)」など詠み給へりし民部卿(みんぶ)

10【和徳門院】仲恭天皇の皇女義子内親王。

【新中納言】宮中での呼び名。

【聞ゆるは】申す「方」は。

【京極の中納言】藤原定家。

【深草の前】齋宮。後鳥羽院の皇女

照子(ひろこ)内親王。順徳帝の時

に齋宮になられた故に「前の」

といふ。「深草」は居所の名。

【齋宮】昔、御即位毎に、伊勢内宮

に奉仕せしめられた未婚の内親

又は女王。

【聞えしに】申す「お方」に。

【参らせおき給へる】「照子内親王

に仕へる爲めに」差し上げてお

かれた。

【この女院】和徳門院義子(四〇頁)

齋宮の御子にし奉り義子内親王

を齋宮照子内親王の養女にし奉

り。

【傳はりてさぶらふ】齋宮に仕へたの

が、其養女に仕へるやうになるな

いふ。

終つて  
ある。

「この方で」あらせられる。「定家程

の典侍(てんじ)のせうとにてぞおはする。「さる

人の子であつて、つまらない歌を詠んでは、人には聞

かされまい。」と、強いてかくしてゐられたが、

聞かれじ。」と、あながちにつつま給ひし

かど、遙かなる旅の空おほつかなさに、

あはれなることどもを書き續けて、

いろいろな情深いことを書き續けて、

あはれなることどもを書き續けて、

子(こ)を思ふといふその鶴にも似たあなたが都を飛び別れて、

いかばかり子を思ふ鶴の飛び別れ、

馴れない旅の空にどんなに泣いてゐられることせう。

習はぬ旅の空に鳴くらむ。

と、手紙の文句に續けて、

文(ふ)の詞につづけて、歌のやうにも

書かれたのも、他の人よりは、

あらず書きなし給へるも、人よりは、

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な